

假裝巡洋艦の大部よりも優速にして遑走を企て得るものは、日本郵船會社の所屬船にして、千九百二十三年に建造された長崎丸、上海丸の二隻に過ぎないとは米國海軍省の意見であつた。此二船は總噸數五千二百七十二噸で米國の假裝巡洋艦よりも小であるが、其速力は二十節で、米國の商船中只だレピアザン一隻のみが尙一層の優速を有するに過ぎない。然るに日本政府は米國の通商破壊戰を豫期して、此時右の二船に有力なる四門の六吋砲と二對の魚雷發射管とを裝載して居た不幸にして、此事實は米國海軍情報部の知る所とならず、然も其之を知りたる時は時機既に遅かつた。

此等米國の假裝巡洋艦中マウント・パーノン、ジョウジ・ワシントン、プレシデント・マヂソン、プレシデント・ピルスの四隻はカナリー群島と諾威の沿岸との間の海面を游弋し、レピアザンは連絡艦として、 prest の附近に配備せられた。同時に後者は又各假裝巡洋艦間の中繼艦となり、日本商船に關する情報を取續ひだ。此の受持區域は時々變更されたが、一般の規則と

してはマウント・パーノンとジョウジ・ワシントンは各々ジブラルター海峡の南北兩海面を、プレシデント・マヂソンとプレシデント・ピルスは英海峡の北海海面を受持つた。残れる三隻の假裝巡洋艦、プレシデント・クリーブランド、プレシデント・デフアーション、プレシデント・タフトは或時期迄準備せられなかつたが、其完成就役するや一戰隊に編成されて地中海方面に派遣され、爲に蘇士運河を通過する日本の商船は直に其姿を没することゝなつた。斯くて地中海方面に於ける日本の商船を驅逐し終るや、此等の三隻は進んで紅海に活動したが、ペリム以東に出づることを禁ぜられたので、此方面に於ては示威運動以外に大なる効果は無つた。

如上の作戰は日本に大なる打撃を與へ、爲に歐洲方面よりする物資の供給は、日本は中立船に依て之を得るの外全然杜絶の状態となつた。米人は又日本と競争して市場にある適當なる總ての船舶を傭雇して日本の海上貿易に大なる打撃を加へたが、之が爲め其傭船料は無限に暴騰して中立國



の船主を喜ばしめ、同時に戦争の危険に對して船舶の保険率も亦暴騰するので、保険業者も大なる利益を得た。

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字列が並んでいる）

## 第十六章 布哇に於ける反亂、及米軍のトラツク島占領

日本の假裝巡洋艦大西洋方面に出沒す——米國假裝巡洋艦との戦闘——布哇の反亂——ロイガン大尉の勇敢——反亂の起因——米國遠征軍トラツク島を占領す

### 一、日本の二假裝巡洋艦大西洋方面へ出沒す

歐洲方面に於ける米國の通商破壊戦は、外見上其地歩鞏固にして、同方面に於ける海上の管制も亦適良に確握されたる様に見へたが、偶ま四月十五日日本の快速假裝巡洋艦長崎丸、上海丸の二隻が、マデイラに到着するに及んで事態は一變した。此二隻は倫敦への途上燃料、清水及糧食を補充せんが爲め短時間同地に寄港したものである。之より嚮き米國假裝巡洋艦ジョウジ・ワシントンは、米國海軍情報部より豫め此二船の行動を通知されて



居たので之を監視しつゝあつたが、偶まセントビンセント岬の南西約八十  
 哩の所に二船の烟を發見したので、十八節の速力を以て之に近づいたが、二  
 船は直に針路を變じて西方に向つた。此二船が武装され、然も最新式の砲  
 火指揮装置を有することは米艦は一も之を知らなかつた、實に此等の砲は  
 之を使用せざる時には假裝のデツキハウスの後方に巧みに隠匿してあつ  
 たのである。

日本の二汽船はジョウジワシントンが徐々に追及するを許しつゝ、距離  
 一萬二千碼を少しく超ふるに至り、急に速力を増して米艦の追及を不可能  
 ならしめた。茲に於て米艦は前部六吋砲を以て射撃を開始したが、距離大  
 に過ぎて正確なる射弾を送るを得なかつた。然るに驚くべし日本の汽船  
 は有效なる砲火を以て之に應戦し、直にジョウジワシントンの一砲を破壊  
 し、前部に火災を起さしめた。次で米艦か他の諸砲を使用せんとして、轉針  
 し舷側を敵に示すや、忽ちにして日本二汽船の齊射弾の好目標となり、前部

煙突と船橋を破壊された。此猛烈なる射弾を受けた米艦は今に残れる諸  
 砲も亦破壊されて一弾をも應射するを得ない。之を見たる日本の汽船は  
 益々接近し來りて、憐むべき米艦の周圍を航過しつゝ、尙も砲火を注ひだの  
 で、米艦の前後には火災起り、水線上に在つた數名の乗員のみ其害を免れた。  
 米艦の無線電信機は既に砲戦の始めに破壊されたので、同艦が送つた最後  
 の信號は、日本汽船と交戦しつゝあるも、敵の砲火の爲め損害大なりと報ぜ  
 るのみであつた。

此電報に接したマウント・パーノン は當時リスボンに在つたので、全速力  
 を以て豫報せられたジョウジワシントンの所在へと急航した。今やジョ  
 ウジワシントンは全然破壊され、猛火に包まれつゝあるを發見したマウン  
 ト・パーノンは、同速力にして砲力優れる二隻の敵艦と對戦せざるを得ざる  
 に至り、憐むべき僚艦を放棄するは情に於て忍びざるも、寧ろ退却して之を  
 僚艦レビヤザンの方へ誘致するに加かずと考へた、實に後者は無線電信を



以て呼ばゞ直に來接すべしと信ぜられたのだ。  
 マウント・パーノンの退却するや、日本の假裝巡洋艦は直に之を追撃した。然るに後者は熱帯地方の航海の爲めに船底汚穢し、爲に二十節の米艦に追及するを得ないので、此追撃戦は暫らく繼續したる後、夕刻迄は兩軍互に視界内に在つたが、遂に米艦は西班牙の北西にあるコルナに入港した。之を見たる日本の假裝巡洋艦は數時間の間之を封鎖したが、翌日に到り米艦は無線電信により僚艦レピヤザンの接近しつゝあるを知つた。茲に於てマウント・パーノンは出港して大膽にも敵に向て突進し、距離を短縮して其砲を有効に使用せんとした。然るに日本側は砲や砲火指揮諸装置に於て米艦に優れるのみならず、其砲員も亦選擇されてあつたので、射撃は米艦よりも一層正確であつた。斯くて米艦は敵弾に依り大に苦んだが數弾を敵に命中せしめ、次で大なるレピヤザンが北方より急援するに及んで拍手喝采した。

今や米艦は僚艦の來援を得たので戦況は米軍の方に有利とならんとしたが、偶ま日本側は新なる戦術を用ひたので遂に戦況を一變することが出来なかつた。時に戦闘は二對の單艦戦となり、マウント・パーノンは長崎丸、レピヤザンは上海丸と戦つた。米軍側は敵砲火の優秀を中和せんとして距離を短縮せんと計つたが、間もなく日本側の速力は稍減退したので米軍側は或程度に迄右の目的を達した。然も此時米軍側には多數の死傷者を生じ、砲彈の炸裂に伴ふ火災は之を消火する事殆んど不可能と見へた。レピヤザンは二十三節の高速を利用して先づ接戦距離内に入らんとしたが、此時計らずも上海丸は突如針路を變じ、恰も操縦の自由を喪へるものゝ如く不規則の圓を畫きつゝレピヤザンに接近して來た。然も實際に於ては日本艦長は巧妙なる運用法により、敵の大なる船體に對し魚雷攻撃を敢行せんとしたのである。此發射せられた魚雷の航跡はレピヤザンの船橋上より明かに認むるを得たが、時既に遅くして之を避くるを得ず、遂に同艦右



舷側の第二第三烟突間に命中爆發した。茲に於てレビヤザンの機關室は浸水して速力減退し、上海丸は此機に乗じて敵艦より速りつゝ敵砲火の危害を避けた。

此時に當りマウント・パーノンと長崎丸は多少相伯仲せる戦闘を爲しつゝあつたが、偶ま前者の放てる一弾後者の舵機を損じて運動の自由を失はしめ、爲に應急舵を以て之を操縦する迄は砲手の射撃は困亂した。然るにマウント・パーノンの損害は此時既に大なりしに今や上海丸來りて之に加つたので、戦況は一變した。日本の二假裝巡洋艦が砲戰距離を短縮するや、其集中砲火は忽ちにして米艦の甲板を粉碎し、船橋の半ばは吹き飛ばされ、上部構造物も亦破損して破片は前部の諸砲と砲員との上に落ちかゝつた。茲に於て米艦は九死に一生を得んとして西班牙の領海内に突進せんと試みたが、之を見たる上海丸は該方向に急進して之を妨げ、爲に米艦は今絶體絶命の憐むべき状態となつた。次で其前橋は倒れて舷外に出でつゝ、曳

きずられ、偶ま推進機に搦まつたので今は遁走することさへ不可能である。茲に於てマウント・パーノンは白旗を掲げたが、之を見たる日本の假裝巡洋艦は直に砲火を中止し、殆んど損害を蒙らざりし上海丸は端舟を卸して同艦に向ひ、其士官は米艦の乗員に無條件の降伏を要求した。米艦は今僚艦來援の望みも絶へたので右の降伏條件を承認し、日本人は一隊の監視兵を配してマウント・パーノンを全く捕獲し終つた。

次で上海丸はレビヤザンの状態を知らんとして該艦の方に向つた時に該艦は右舷に傾きつゝ、憐れなる状態にて漂流しつゝあつた。偶ま附近を通過した中立國の汽船數隻は之を救助せんとしたが、曳航は隔壁を損傷して尙も浸水を増すの憂ひがあるので危険と考へられた。茲に於て諾威の汽船は該艦に接近して生存者を收容し、船體は浪のまに／＼に漂流するに委したが、後遂にフキニステル岬附近に漂着し、有ゆる救助の手段も其奏なく、全然破壊して此戦争中には用ふることが出来なかつた。又ジョウジ



ワシントンは佛國の一曳船を以てカサブランカより遠く曳航したが、險惡なる天候に遭て漂流し、モロッコ沿岸に坐礁粉碎した。

マウント・バーノンは長崎丸上海丸の二隻に伴はれてヴィゴに入り、數日間其修理に惱殺された。大西洋方面に在つた米國の他の二假裝巡洋艦プレシデント・マヂソン及プレシデント・ピルスの二隻は、撃破された他の三隻よりも勢力が劣つて居るので、これをして攻勢を取らしむるは不得策と考へ、米國海軍省は援軍の來着迄何事をも爲さざらんことを訓令したので、日本の假裝巡洋艦は自由自在に活動するを得た。斯くて日本の軍令部は豫め假裝巡洋艦の諸準備が適切であつたので、右の勝利より一時は豫期せざる成功を收むるを得たが、此種の成功も士氣上の問題を別とすれば長期に亘る利益を收むることは鮮少であつた何となれば日本の海上貿易に對する米國の作戦は既に既に回復す可らざる重大なる損害を加へ得たからである。

上述のものは武裝商船の猛烈なる格闘戰の例としては特に著しきものである。世界大戰中南太西洋に於けるカーマニヤとカツプトラファルガ一の格闘並に北海方面に於けるアルカンタラとグリーフの二例は之と比肩するに足るものであるが、大西洋方面に起つた這次戰闘の著しき特徴としては、日本人が敵の損害を蒙らざる様特種の技能を示したことである。日本の海軍當局は此二船の設計を爲すに當り、幾分巡洋艦に似た建造法を取らんことを慫慂したと云はれて居る。實に此二船が敵の砲火に平然たりしより見ればこれ亦有り得べきことである。

## 二、布哇に於ける日本人の反亂

今や轉じて遠隔の方面に於ける戰場の状況を述べねばならぬ。ロツモウ海戰後トラック遠征の準備は着々として圓滑に進行し、加州布哇よりサモアへの陸兵の輸送も亦規則正しく實施され、既に訓練良好なる多數の陸



兵はサモアに集合した。斯くて今や最も重要な第二段の作戦に轉ぜんとする時、五月の始めに至り驚くべき反亂の警報は布哇方面より飛來した。此反亂が地方的に突發したか將又日本の煽動によるかは今日に至るも之を知るを得ない。併しながら多數の小銃が或手段を用ひて布哇に密輸入せられ、オアフの本部に送られて之より多數の日本移民間に分配されたのは事實である。當時布哇方面に在りし日本人は布哇の全人口三十三萬に對して約十四萬人であつた。抑も斯種の反亂は布哇の米國官憲が戰前より豫想した所で、之に對しては種々の對案が樹てられた、即ち或者は戰爭破裂せば日本人の全體を輸送と設備の困難如何に關せず、米本國に送らん事を提議し、他の者は之をニーホウ島に集中すべしと云ひ、該島が狭少にして到底全日本人を收容生活せしむるに足らざるを顧みないのである。斯くて結局に於ては地方官憲の意見に従ひ、日本人は依然として同島に居住しつゝ其職に留まることを許された蓋し此等日本人の大部は農業及商業に

従事する者であるから、他の住民の經濟的生活に必要なのみならず、例へ之を殘留せしむるも武器を有せずんば騷擾を惹起すること不可能なるべしと考へられたからである。併しながら此等數千の強壯なる日本人が、母國が戰爭の最中にある時、一度武器を得たならば爆發するは唯だ時と機會の問題である。

然るに茲に此爆發の機會は來た、之より擣き布哇には戰爭開始と共に二大隊の歩兵がホノルルの北東五哩の所に建てられた一時的の兵營に駐屯して居た、而して其武器は夜間は之を手近かに置かず、寢室より數百碼を離れた一の倉庫に收め、之に番兵を付して置いた。然るに此等の番兵は新兵であつたので事變の際には古參兵と同様に敏捷で無つた。此不注意の責任は之を關係の各士官に歸することは不可能であるが、兎も角も此の不注意の爲に武装した數千の日本人の一團は五月十七日の夜中を以て兵營を襲ひ、先づ兵器庫に在つた番兵を捕虜として武器を奪取し、進んで兵營の



本部に進入した。此不意に寢込を襲はれた米兵等は手元に武器を有せず、偶ま抵抗したものは何等の容赦なく射殺され、聯隊長ランドール大佐の如きも亦此不注意の犠牲者として射殺者の中にあつた。斯くて米兵等は優勢の護衛兵に守られ、捕虜として山上に送られて茲に收容されたが、日本人の計畫は周到にして一人の米人も其警報を得へ得た者は無つた。

此成功に引續き反徒の主隊は日本の豫備陸軍將校之を指揮しつゝ、軍隊式に編成されてホノルルに進み、途上他の方面より來投せる反徒を加へ、埠頭からの主要路を扼する市の中央部數個の地點を占領した。翌朝に至り同地在住の米人等は此の地中より湧き出でたてきの爲に市街を占領されてあるを見て驚いた。當時同島には一萬以上の陸軍兵が在つたが、此等は一箇所に集中せないうで各地に散在して居た、即ち其大部は島の中央を距る二十哩のショウフキールド兵營に在り、此等は既に反徒に依て包圍され、總ての鐵道、電信、電話は切斷されて居た。又他の部隊は眞珠港の入口なるウ

キーパーとカメハマ要塞に、ホノルルの北西ではシヤフター要塞に、市の南東では市とダイヤモンドヘッド間のアームストロングドラツシー、リューガーに、並にホノルルの北約十哩なるカナホーヌイ山麓に在る火薬庫に分在して居た。反徒は電話交換局停車場等の交通通信の中心點を占領したので米軍の集中は非常に困難であつた。要塞を取圍んだ若干の兵營は反徒の爲に襲撃されたが、米軍の哨兵等は何れも警戒嚴重なりしと見へ、不明の兵力で圍んでこれらの反徒等は何れにも足場を得なかつた。實際ホノルルの中にあるアームストロングドラツシー兩要塞には約二千の兵あり、中には非戦闘員も在つた。砲は大體海方面よりの敵の攻撃を撃退する目的で配備せられ、市中を砲撃するは最後の場合に非れば敢てすべきもので無つた。斯くて一隻の快速汽艇は眞珠港に急派されて艦隊よりの援助を求めた。米軍は艦隊よりの援助を刻々に期待しつゝ、利用し得べき總ての兵を用ひて此兩要塞の附近に在る日本人を驅逐することに努力し、之に



成功するや進んで市の中央部に在る敷市街の方へと進軍した。暫くは兩軍の銃聲絶へ間なく續ひたが、遂には彈藥の浪費を覺つて之を中止した程である。時間の経過と共に兩軍は何れも援軍が到着した、即ち日本人は遠隔の村落より増援を得、米軍側は艦隊よりの陸戦隊が到着した。遂に此日午後に至りオワフ軍司令官マクベール大將は一般の攻撃を爲すべき強固なる決心を爲し、屋根には銃隊と機砲隊を配し、軍艦には敵の占領せる主なる建物を砲撃する様命令が下つた。時に艦隊の大部は一日前に出港して巡航中であつたが、約十二隻の軍艦は眞珠港より來着し砲撃を開始した。此艦隊の砲火は建物には大なる損害を與へたけれど、日本人は巧みに之を避けたので其死傷者は甚だ少數であつた。之よりも有効なりしは白兵戦で、之が爲め反徒の足場は大に動搖した。然るに翌日に至り反徒は其占領せる建物の後方にある平地を横過して來たので、米軍は其前進線に直角に在る塹壕と柵よりの十字火を受くることゝなつて退却の已むなきに至つた。

茲に於て建物の背後に戻つて再び攻撃計畫を立て直し、一方には猛烈な砲火で敵と戦ひつゝ、他部隊は敵の兩翼に展開して之を包圍せんとした。此運動は大なる損害を招いたが遂に成功せなかつたので、此日の終りには長い困難な塹壕戦によらずに、敵をして速に退却せしめんには他に其策を講ぜねばならなくなつた。

然るに此夜ホノルル港にタンク隊を載せた一運送船が到着したので、事態は茲に一變して米軍側の危機を救ふことが出來た。此等のタンクは輕き小型のもので斯る場合には最も適當なものである。此等は直に陸揚に着手せられ、砲は夜通しで之を組立てたが、幸にも砲員は運送船と共に到着したので、翌日は直に前進して日本人を攻撃し、爲に日本人は不意打を受けて士氣沮喪した。此タンクよりの機砲彈の雨は捲土重來せんとする日本人の有ゆる計畫を覆へしたが、更にシヤフター要塞よりの優勢なる投軍到着するに及んで米軍側の勝利は愈々確實となつた。斯くて日本人は茲に



全く敗れて種々な方面に遁逃し、此の退却する叛徒に對してシヤフターよりの援軍は縦射を加へた。日本人は退却するに當り、追撃を遲滞せしめんが爲め同時に數ヶ所に火を放つたので、之が爲め若干の市街は火焰に既められて、反亂の爲に生じた損害をば更に大ならしめた。又負傷した日本人の多くは此等の燃へつゝある家屋の中で焼死した。茲に至て形勢全く一變して叛徒の勢亦振はず、其後叛徒の餘勢は尙數週間は収まらなかつたが、此時より以來危険なる状態は起らなかつた。

火災消火され秩序回復さるゝや、叛徒が更に夜襲するを防がんが爲め大部隊を以て市中を警戒せしめ、翌日に至ては更に一步を進めて大部は敵の手中に在る島の殘部を奪還することに着手した。シヨウフキールドの兵營に在つた守兵は叛徒を驅逐し、破壊された鐵道線路を修理した後、眞珠港方面と連絡を保持し得る様になつたので、之により秩序的の措置を以て、叛徒を包圍せんと企てた。

之より嚮き其前日にコナホーヌイ山方面に大爆聲が続ひて起つたので、同地に在る火藥庫の安否が非常に懸念された。這般の事情は其後に至て明かとなつたが、之に依れば同地の海岸要塞守備隊長ラゴン中尉は多數の叛徒の襲撃を受け、數時間の間頑強なる抵抗を續けたが、叛徒は遂に内弾となりてなだれこんだ。此戰鬪中中尉は重傷を負へるに拘らず、豫め用意せる導火線に點火したので、總ての火藥庫は爆發し、數百の日本人は殺され、尙多數の者は負傷した。日本人は此火藥庫内に在る多數の小銃や彈藥を奪取せんことを企て、居たので、此勇敢なる行爲の爲め彼等の企ては全然水泡に歸した。實にラゴン中尉の此行爲は實際に於て叛亂を速に終熄せしむるに大功があつた。

武器の手に入ることが少かつた他の諸島では叛亂は然く猖獗で無つた。布哇群島中でホノルルに次ぐ最大の都市ヒロでは反亂は單に一揆の程度に止つた。實に同地に於てはオワフに在る米國の陸海軍用施設を破壊す



るを目的とする行動であつたが、日本の叛徒は山地に據り、恰も山寨に立籠つた盜賊の籠城戰の形で二三ヶ月間を維持せんと企てた。而して米國陸軍省の記録する所に依れば、此等叛徒の餘勢を一掃するに當つて無上の經驗が得られ、之に於て新戰術を案出したと云ふことである。

武器を手にしたまゝ捕虜となつた日本人は全部巴奈馬に送られて運河地帯の勞役に使用され、一定期間内に進んで降伏した者は一層寛大に取扱はれた。其他布哇に殘留することを許された數千の日本人は出來得る限り隔離されて憲兵監視の下に置かれた。

此叛亂の原因を調査する爲め眞珠港に軍法會議が開かれたが、此席上に於て捕虜の多くは、叛亂は日本政府の煽動により起したものであると主魁者等は公言して居たと申立てたが、之に對する積極的な證據は之を擧ぐることは出來なかつた。ルーガー要塞の攻撃を指揮中捕はれた森本と稱する日本の一農夫は、此暴動は日本陸軍の到着と相呼應して計畫されたもの

で、其來島は密に叛徒に通知されて在つたと明言したが、之には曖昧な點があるのは否めない。而して彼は嚴重な審問の下に飽く迄其主張を固守したが、法廷は遂に之を疑問なりと決定した。今一人の證人須藤某は武器携帶のまゝ捕はれた者であるが、彼は森本の證言を翻へして叛亂は布哇在住の某々日本人に依て計畫されたものであると熱心に主張した。法廷に臨んだ數名の將校は須藤が日本官憲の參與を熱心に否認するのは怪しいと云ふのであつたが、其眞偽を確めることは出來なかつた。

此問題に關聯して別の方面より判斷し得る唯一の事實は、戰爭の數ヶ月後に東京で發行された一の著書である。此書は元海軍大佐甘粕氏の書いたもので、之によれば布哇に於ける叛亂勃發と日を同ふして日本の遠征軍は出動する計畫であつたが、『我偵察部隊は此等の爲に緊要缺ぐ可らざる情報を得ることが出來なかつたので』遂に之を中止したと述べ、然も『此時既に軍艦及運送船は布哇に向ひ出發する爲め横須賀に集合しつゝあつ



たが、出動豫定日の僅か十日前に之を放棄することゝあつた」と附言して居る。此記事で見ると、日本政府が布哇の叛亂に多少なりとも關係して居たことは之を否認するを得ない。實に之を日本側より見れば此計畫は兎も角時宜に適したもので、敵國に内憂を生ぜしむることは戦争の遂行上良策であるからだ。

此叛亂が實際の出來事以上に遙かに深刻のものであつたのは勿論である。現に數多の米人の生命と貴重なる幾多の財産は之が爲めに犠牲となつたのみならず、軍事上の一般的情勢にも影響を及ぼした、何となれば之が爲めにトラツク遠征は少くも三週間遅れ、延ては全戦争期間を延ばしたと云ふことが出来るからである。

### 三、米軍のトラツク島占領

トラツク遠征隊は遂に六月十八日を以てバゴバゴを出發した。此遠征

軍は四千の精兵より成り、多數の機關銃と野砲とを備へて居た。運送船隊は二隊の驅逐隊と航空母艦ライトに護衛され、エリス及ギルバート群島を北に、フキージー及ソロモン群島を南にして、各々之を視界外に避けつゝ、總ての重要島嶼を避けて航路を取つた。又有力なる巡洋艦の二戦隊は各々航空母艦を從へて運送船隊の前方及北方約二十哩に位置し、運送船隊の後方には驅逐隊、潜水隊及補助艦を随伴せしめた主力戦艦隊が後衛となつた。太平洋廣しと雖斯る大集團の航行は全然姿を認められず、航行不可能と思はれたが、其採られた陣形の適良なりし爲め運送船隊は實際上他よりの視認を有効に妨げた。實に此遠征艦隊の姿を見た者はソロモンよりフキージー群島に向ふ英國の一巡洋艦と、ナウルから燐礦を運ぶ一隻の商船のみであつた。前者は單に其見た所を英國海軍省に報告し、後者は無線電信機を有たなかつたので、其二週日後シドニーに到着する迄は之を發表するの機會が無つた。然も其到着した時には時機既に遅れて居たのである。



遠征艦隊はツイラよりトラツクに至る三千哩の航海に十日間かゝつた。其平均速力は十三節以下であつたが、途中荒天に會したので一兩日遅れた。斯くて遂に無事トラツク島に到着し、六月二十八日極めて平穩裡に上陸した。該島統治の任に當つて居た二三の日本官憲は何等の抵抗をも行はなかつた。將又此僻遠の島嶼の住民達に戦争が始まつて居ることが知れて居たかどうか、又知れて居たにせよ、之に興味を持って居たかどうかは頗る疑はしきものであつた。

遠征艦隊の航海中無線電信の使用は最少限に之に制限して居たが、一度該島を占領するや次の準備が遅滞なく實行されんが爲めにホノル、へ詳報され、そこから華盛頓へと傳へられた。但し出來得べくんば最後の瞬間迄敵に知らせたくないので、占領の公報は合衆國內には示されなかつた。其後確め得た所によれば、日本巡洋艦が該島へ寄港することは減多に無つたけれど、日本軍の奇襲を警戒する爲には數個の飛行機を以て嚴重な監視を

行はしめたので、該群島の監視は之が爲め大に助かつた。又最快速の四隻の巡洋艦は汽罐に點火し、即時出動の準備を整へて敵艦若し現はるれば直に之に對抗撃破し得るの準備を爲して居た。餘程後に至つて判つた事であるが、此遠征艦隊は今少しの所で黒山少將麾下の日本南遣枝隊と遭遇する所であつた。實に同枝隊はトラツク占領の前々日に比律賓よりマーシャル群島のヤルットへ向け航行中ボナベに寄港したのであるが、米艦隊を遅らした荒天は幸にも米軍を隠したのであつた。

此の米國海軍の前進根據地となつたトラツク、一名ホゴール群島は、カオリン群島中の最大島で舊獨領に屬し、ベルサイユ條約により日本の委任統治となつたものである。一打以上に上る玄武岩的の島々は、長幅共に四十哩の大礁湖の周りに鋸齒狀に衝立つて居る。此礁湖に入るには六個以上の水路があり、各々最大の戦艦を出入せしむるに足るも、處々に淺瀬と烈しき潮流があるので注意を要する。主都にして日本行政廳の所在地たるイ



イツン港はイツン及ダブロン兩島の間であり、此港への水路は開戦前日  
 本人が撤去せず置いた航路標があるので明瞭にされて居る。礁湖自身  
 はハトバト少將の報告にもある通り、全艦隊の爲の良好なる泊地となるも  
 のである。勿論少らぬ暗礁や淺瀬もあるが、海水が清澄であるので、出入港  
 に當り各艦の橋上に嚴重な見張りを置けば之を避けることが出来る。天  
 然の要害と云ふ點では遠征の目的上これ以上に適當な場所は無いので、日  
 本人が何故に之を等閑視して、此トラツク占領に對し少しも警戒せなかつ  
 たかは永久に解かれぬ謎である。元來南洋群島は其數餘りに多く然も皆  
 敵襲に暴露して居るので、日本が其全部を防禦することは實際上不可能で  
 ある。併しながらトラツクの地理的位置は明かに戰略上に重要であるか  
 ら、之に簡單な防備をすら怠つた日本人の措置は——彼等は此所に遠距離  
 無線電信所すら置かなかつた——非常なる過誤であつた。之を小笠原  
 島の無効なる遠征と比較するに、此の貴重な地點を一兵をも廻らずに容易

に占領したことは好個の對照を爲して居る。併しながら戰勝の全歴史は  
 大部分は始めの失敗による苦き經驗より生れ出でた智慮に依て償はれた  
 記鐵であるが、今此場合にも亦此例に洩れなかつた。



## 第十七章 米軍のヤルット及ボナベ 占領並に支那の對日宣戰

トラツクの占領に對する日本の狼狽——日本の最高軍事會議に於ける意見一致せず——日本の大潜水艦撃沈さる——米軍ヤルット及ボナベを占領す——米國の國船艦隊日本の飛行機を欺く——日本の不安——支那日本に對して宣戰す

### 一、トラツクの占領に對する日本の狼狽

トラツクの占領は米國に於てよりも寧ろ日本に於て非常なる驚愕を與へた、これ米國の民衆は其結果の重大なることを即坐に認識することが出来なかつたのに反して、日本に於ては其意義を豫想し得たからである。日本が全力を盡して避けんとし、又之を避くることは其戰爭を遂行するに於て主たる目的の一であつた斯る不意の事變は、今や青天の霹靂の如く起つ

て來たのである。日本が米國の勢力を太平洋の西半部より驅逐せんとしたのは國內の革命的氣分を根絶せんとの主要なる動機に基ひたものであるが、彼等は比島とグワムを占領し得たので、此目的は既に完全に達成されたものと思つて居た。然るに今やトラツクは米軍の手に落ち、米國の國族が此禁制地帯に翻るに及んで米國の海軍力は再び其威力を發揮し得ることとなつた。然も米國海軍の此舉は將に演ぜんとする一層大なる活劇の前提たるに過ぎざるを如何せん。

トラツク諸島は日本よりは距離大であるが、グワムに對しては重大なる脅威を與へ得る様な近距離に在る。而してグワムにして一度奪回されたならば比島攻撃の途も之に依て開かるべく、否恐らく日本々土をも攻撃することが出来る。

### 二、日本の最高軍事會議に於ける意見分離す



此時に當り東京に於ける陸海軍の主腦部は有利な新戰勢を得んとして畫策しつゝあつたが、偶ま他の警報は更に彼等の耳朵を打つた。茲に一言すべきは日本陸海軍の指導者等は敵の計畫と行動に關しては正確なる情報を得ることが乏しひので、之が爲に少らず不利の位置に立つて居た。日本人は米人とは人種が異なるので巧みに白人を装ふことが出来ず、従て米國內に於ける機密を搜り出すことも出来ない。加之ならず米國內に居住を許された少數の日本人でも、嚴密なる監視を付せられ、陸海軍の地帯内に入るを許されない。勿論白人の間諜となつた者も相當にあつたが、此等は價値ある情報を日本人に傳ふるとしても之を迅速に報道する方法が無つた。此等の情報は普通南米や歐洲を經由して遅く且廻り途して漸く東京に達するので、多くの場合に於ては其東京に到着した時には價値なきものとなつて居た。トラック遠征の如き其顯著なる一例である。日本の歴史家中橋氏の記する所によれば、此米國遠征軍の目的地と使用さるべき精確

の兵數等計畫の詳細なる内容が桑港の日本の一間諜の手に入つたのは遠征軍の出發前少くも二週間も前のことであつた。此報告は暗號を以てカラオの同僚の許に打電され、之より電報により日本に送る筈であつたが、或不明の理由により其日本に達したのは遠征軍がトラックに上陸した二週日後であつたと云ふことである。

一方他の重要な情報は驚くべき迅さを以て桑港の間諜より日本の最高司令部へ達すること屢々であつたが、此等の殆んど全部は虚偽であつた。之を知つた日本の或記者等は憤怒して米國政府を「表裏相反するもの」と攻撃したが、斯るは寧ろ天に向て唾すると同様である。之に反して米軍の諜報機關は戰爭の進むと共に益々有效となつた。これ實に支那人の援助に俟つ所大である。茲に其詳細な方法を述ぶるは賢明な事でないから之を略するが、兎も角戰爭の後半に至ては、華盛頓政府は之に依り重要な日本軍の行動を適時に知ることが出来た。今日となつては既に明かとなつて



居る通り、米國の巧妙なる宣傳の爲に、日本の高級司令部は全然欺かれて最も重要な兩海軍主力の決戦を行はしむることとなつたのだ。

茲に其一例を挙げよう。米軍がトラツクに上陸した十日後なる七月八日に於て、東京政府は米國にある二人の間諜から、米國は實際上全主力艦隊の掩護の下に四萬の陸兵を以てグワムを奪回せんが爲め、先づトラツクの占領を行ひ、以て日本の注意を該方面に牽制せんとしつゝあると報告され、更に曰く、北海道攻撃説も之と同様の目的を以て流布されたもので、米國が眞に斯る攻撃を行はんとするの意圖は無ひと報告した。此二人の間諜は實際互に顔を知ぬ男であつたのに、其報告は斯くも符合して居たのである。勿論此情報の眞偽は之を確めることは出来ないが、最近米國と加奈陀から極東に來た數人の中立國人の語る所が同様であつたので、幾分信用された有様であつた。更に又香港で發行さるゝ一英紙は米軍が大舉して奇襲によりグワムを奪回せんとする準備を進めつゝありと報道し、且之は米國が

全力を盡して比島を奪回せんとするの前提であるとし、更に此遠征は日本々土にも及ぶべく、之が爲には米軍が日本の附近に適當なる根據地を獲得した曉、目下建造中の飛行機の大部隊を以て、東京は愚か他の大都市をも襲撃させる計畫であると諷刺した。日本の海軍側では之を信じなかつたが、陸軍側では之を眞實と考へ、茲に今に始まらぬ兩軍間の意見の軒輊が生じた。然るに國防上の重大問題となると、日本では陸軍の勢力は海軍以上であるので、遂に最高軍事會議は米軍の態度の明瞭となる迄は——換言すれば敵が手を出す迄は——海陸共に重要な作戦を行はざることに一決した、これ即ち日本は米軍の作戦に對して適切なる行動を取り得る曉迄は守勢を維持すると云ふことである。此のトラツクの喪失に對しては一旦は之を奪回せんとして有力なる艦隊を派遣するに決し、此艦隊は既にグワムに集合されて居たが、最高軍事會議の決議が右の通りであつたので、トラツク奪回の計畫は遂に實行されなかつた。時にトラツクに施した米軍の間



に合せの防禦では到底斷乎たる攻撃を撃退するだけの用意は無かつたので、若し日本軍が迅速に來襲したならば米軍側は非常なる困難な立場に立つたであらふ。

### 三、巡洋潜水艦名古屋のトラック襲撃

斯くてトラック方面は只一隻の日本の潜水艦が現はれた外、何等の妨害なしに推移したが、此潜水艦の活動に就ては今茲に之を略述しよう。開戦當時日本が大型の巡洋潜水艦六隻を完成したのは前に説ける通りである。此等の潜水艦は何れも七千噸の排水量と、砲塔に二門の八吋砲を有し、又輕砲や魚雷發射管があり、水上速度は二十三節で、行動半徑二萬四千哩と稱せられて居る。而して其甲板も砲塔も司令塔も何れも強固に装甲が施してある。此等六隻の潜水艦の中機雷敷設に適する一隻は既に布哇方面に機雷を敷設した。第二の潜水艦は巴奈馬方面迄出動したと云はれて居るが

該艦の要目は一切不明である。然るに一般には此等の大型潜水艦の消息は不明であつたので米國側では何れも失敗に終つて任務を適當に遂行する事が出来なかつたものと信じて居た。兎に角此等の潜水艦は設計が根本的に間違つて居たのか、建造上に缺點があつたのか、但しは乗員の訓練が不充分であつたのか、何れかの原因によりて遂に豫期の結果を擧げることが出来なかつた。日本の巡洋潜水艦は何れも國內の主要なる都市の名稱をとつて命名してあるが、第一に完成したのは長崎である。該艦は試運転に際し、潜航中の艦の操縦頗る困難を極めたので、危く慘事を惹起すを免れた程であつたが、其後大修理を加へ開戦間際に漸く完成した。其後該艦は米國に向つて出發し、米人は此の非常に不愉快なる珍客の有力なる大砲の御見舞を受ける筈であつたが、同艦は遂に米國方面に來らず、其消息は杳として知ることが出来なかつた。太平洋の底知れぬ何處かの海底に葬られたのか、何處で如何なる椿事の起つたかは一切之を知るよしもない。



長崎と同級の潜水艦で第二に進水したものは函館である。同艦は一度南洋方面へ出動したことがあるが、何等注意するに足るべき行動を爲さず、其後戦艦隊に附属せしめられた。該艦は絶へず機械の故障が起つたので、其速度は實際十七節を出でず、寧ろ戦艦隊の爲には厄介者であつた。或日戦艦山城の前方數碼の所に浮上したので同艦の衝突する所となり、卵の殻の様子に打碎かれて短い生命を終つた。當時の事情から考ふれば潜航中の操縦意の如くならざりし爲め、不時に水上に浮出して右の災厄に遭つたものであらふ。其他同級の神戸、大阪の如き、何れも機關の不完全の爲め、實戦には遂に参加することが出来なかつた。此二隻は進水の際艦體を損傷したので遂に完成されなかつた事實より見れば、此型に對する日本海軍の意見が不向であつたのは推察することが出来る。

米軍のトラック占領後二週間に同方面に現はれたものは、右と同型の巡洋潜水艦名古屋である。同艦は特別の命令を受けて何れより來たもの

か、又は單に其近くを巡航するにあつたかは一切不明である。併しながら其行動より推せば、トラックが既に米軍の手中にあることは知つて居たものと思はれる。同艦の到着した七月十二日の朝には、イーツン港には巡洋艦コロンバス(艦長ベートマン大佐)、ハートフォード、八隻の驅逐艦、航空母艦アラスカ、及運送船と補助艦船の數隻が碇泊して居た。海岸沖六哩の所には驅逐艦メルビン、クレムソン、レイド、ソントン哨戒任務に當り、前二隻は東方を、後の二隻は其北方を哨戒しつゝあつた。又二臺の水上飛行機は既に飛翔して居り、硬式飛行船ジャクソンは補助艦の一に設備された繫留柱を離れんとしつゝあつた。然るにも拘らず名古屋は此嚴重なる警戒を破りて敵を驚かすことが出来たのである。

名古屋が米國驅逐艦と海岸との間に姿を現はすや、驅逐艦クレムソンの一哨兵は之を發見した。此時潜水艦の砲塔や司令塔は太陽に照らされて鮮かな光を投げて居た。茲に於てクレムソンは僚艦に信號すると同時に全速



を以て潜水艦目掛けて突進し、有ゆる砲を以て之を射撃した。此時他の驅逐艦も亦迅速に現場に來合した。潜水艦は數發の敵彈が命中炸裂したにも拘らず敢て水中に潜入せんとせず、否却て島と平行しつゝ其方へと進んだ。次で潜水艦は砲塔を廻はすや、一門の巨砲は紅舌を閃かし、二百五十封度の巨彈は僅に數吋を隔て、クレムソンの艦橋を飛び越へた。米艦は敵の照準を暗まさんとして速りに發砲を續けたが餘り効力は無かつた。此時潜水艦は右舷に少しく轉針し、二個の砲から恐ろしき齊射を浴せかけたが、遂に一彈はクレムソンの操舵機の上方で炸裂し、爲に同艦は忽ちに停止して其艦腹を敵に暴露した。續いて第二彈は水線に穴を穿けたので、茲にクレムソンは全く憐むべき状態で漂流した。

日本潜水艦は敵の一艦を葬つた勢に乗じて次にはメルピンに向て砲火を開いた。メルピン艦長は敵の厚き装甲に對して自艦の四吋砲を用ふるの無効なるを思ひ、魚雷を以て之に對せんと決心した。斯くて三個の魚雷

發射管の中一は直に發射され、他の二個を發射せんとする時、敵の巨彈は甲板上に爆發した。此彈丸は残れる魚雷をも爆發せしめたものと見へ、メルピンは見る間に火焰と烟に包まれつゝ沈没し去つた。

日本の潜水艦はメルピンの發射した魚雷を辛ふじて避けつゝ、這回はリードとソーントン目懸けて砲彈を注ぎ、然も其砲撃は精確であつたので、二艦は己むなく退却しつゝ、煙幕を展張した。此煙幕の陰から二艦は突進して魚雷を發射したが、此時潜水艦は速力を増して餘程前方に進出して居たので、遂に魚雷は命中せなかつた。次で煙幕霽るゝや潜水艦はリードに向て一彈を發射し、又此時來投した數臺の米國飛行機の一を目懸けて高射砲を發射した。然るに此等の飛行機は不幸にも爆彈を持たなかつたので、名古屋の甲板上にリュウイス小銃彈を發射して數名の水兵を斃したが、之に反して潜水艦の應射は猛烈であつたので、飛行機は遂に退却した。

今や日本の潜水艦は僅に六人の死者と數名の負傷者を出し、其裝甲部に



數發の彈痕を受けたのみで、敵の一驅逐艦を撃沈し、他の一隻の航行の自由を奪ひ、又他の一隻に損害を與へて意氣揚々たるものがあつたが、此時警報は無線電話を以て傳へられたので、米國の巡洋艦コロンブスは此戦闘に加はるべく全速力を以て港口を出でつゝあつた。同艦がサラット島を廻りて外海に出でんとする時、橋上の哨兵は敵潜水艦が南々西の方向七哩の所にあるを報じた。これ即ち同艦八吋砲の射程内にあるので直に砲火を開き、第二の齊射彈では既に目標を夾又した。潜水艦は之に對して應戦せんとせず、潛入せんとしつゝあつたが、司令塔が水面下に没する迄には尙も數分を要じ、此間米艦からの最後の砲彈は僅か數碼の所に落下した。

ペートマン艦長は敵の魚雷を避けんが爲め蛇航運動をなしつゝも、港内から隨伴し來つた四隻の驅逐艦を掩護するに適當なる様、之に接近しつゝ、高速を以て突進し、又水中聽音機を以て敵潜水艦の所在を捜しつゝあつた。然るに此方面の水深は餘りに深ひので、名古屋は海底に鎮坐し、機關を止め

て其所在を窺ふことが出來ず、其發する電動機の音響は直に米艦聽音機の知る所となつた。斯くて潜水艦の所在は直に發見され、四個の七百五十對度水中爆雷は投下された。此等の爆雷は百五十呎の深度に於て爆發したが、山なす水煙が収まらぬ中に潜水艦の艦首は突如として米國驅逐艦ビルスバリー近くの水面に浮び出た。此驅逐艦長は賞讃すべき冷靜を以て直に三發の魚雷を發射し、又砲火を以て之を砲撃した。此時巡洋艦コロンブスは三連以内の距離に在つたけれど、味方の驅逐艦を射撃せんことを恐れて砲撃を差控へた。潜水艦が霧の水中爆雷により既に損害を受けて居たか否かは明かでないが、若し果して然りとすればビルスバリーからの二發の魚雷は潜水艦に命中して舷側に穴を穿つたので、之が瀕死の病艦に最後の止めを刺したのだ。此魚雷の爆發の爲め潜水艦の半身は波上高く空中に昇り、之を見たる驅逐艦は砲彈を雨注した。斯くて潜水艦は一分間の間は平衡の状態を保つたが、忽ちにして傾斜し始め、油を海面上に流しつゝ、



海中深く沈んだ。米艦は尙其最後をも確むる爲め水中聽音機を出して音響を聴かうとしたが、深く沈んだ名古屋からは何等の反響も無かつた恐らく同艦は海底に達する前に非常なる水壓の爲め船體破碎したものであらふ。

#### 四、米軍のヤルト、ボナベ占領

トラツクの米國守備軍は日本軍が更に攻撃を繰返すや否やを知らなかつたが、此大なる日本潜水艦の現はれたのは、同島を奪回せんが爲め決死の攻撃を試みんとする先鋒であると考へた。茲を以て全力を盡して防備を完成し、海方面よりの接近路を制する所には砲を備へ、礁湖に通ずる三個の出入路には水雷を敷設し、又島の三個所は水中聽音所を置ひて適時に潜水艦接近の警報を送らしめ、又數臺の飛行機と小型の硬式飛行船を以て晝夜を問はず哨戒せしめた。防備が完成するにつれ敵の侵襲に對する不安は

薄らひだが、それでも名古屋沈没後の數週間内は尙も緊張した。然も上説せる日本の事情により何事も起らなかつたのである。

日本の高級司令部は、前にも説ける通り敵の計畫に就て尙充分に之を知る迄は、本國より遠隔の方面へ遠征軍を派遣せぬ事に決定して居たが、此米軍の計畫を知る迄には長ひ時日を経ねばならぬ。米軍側では此の期間を利用して前進根據地たるトラツクとの通信線を確保するの計畫を樹て、茲にボナベとヤルトを占領することゝなつた。何となればカロリン群島のボナベ、マーシャル群島のヤルト島は何れもサモア、トラツク線の潜水艦の行動半徑内にあるから、日本艦隊の根據地となつて居るのではないかとの疑もあり、之を奪取することは必要と考へられたからである。此兩地は同時に之を占領することゝなり、ボナベはトラツクから、ヤルトはソツイラから占領軍を送ることゝなつて、何れも難なく之を占領した。就中ボナベでは日本の軍隊は居なかつたので占領軍は何等の抵抗を受けずして上



陸し、易々と之を占領したが、委棄された装具なき二個の水上飛行機並に海軍用火薬が倉庫内に在つた事實より見れば、日本軍の一時的根據地であつたことが知られた。次にヤルートの占領はボナベ程容易でなかつた。此島には四門の六吋砲臺と少數の海軍兵があつたので多少の抵抗を試みたけれど、軍艦からの砲撃と航空機よりの毒瓦斯彈投下の爲め守兵を撃退し、米軍は僅かの死傷者を出しただけで、少時の後之を占領した。

此等諸島の占領はサモア・トラツク線に對する日本潜水艦の危険を除いた計りでなく、他にも亦重要な戰略上の意義があつた。特にヤルートは布哇、トラツク間を航行する船舶の寄港地として便利な位置にあるので、之より以後は従來の様にサモアを迂回する長途の航海を爲す代りに、ヤルートを経て布哇から兵員物資を直接に米國の前進根據地に送ることが出来るのだ。

斯くてハイパー少將の立案した戰略上の大計畫は着々として其緒に就

き更に進んで一層大膽にして遠謀深慮ある他の行動に移る機會も刻々に近づきつゝあつた。但しそれがグワムに對する直接の攻撃だと速断するは間違つて居る。併しながら日本人は米軍の小笠原遠征が努力の不足よりも寧ろ時機が悪かつた爲に失敗に歸したことを知つて居るから、這回も米國の眞の目標がグワム島にあると云ふ風に考へるかも知れない。此種の信念を強めたものは外にもある、即ち米國內に在る日本の間諜は將に來らんとする攻撃に就て自由に充分の材料を蒐集するを許され、且之を東京に通信するに就ても米國官憲より親切な便宜を得た。のみならず、華盛頓の官憲までが、祕密を漏洩して極東に向ふ旅客にグワム遠征の切迫せることを眞實らしく吹聴したので、日本が之を信するに至つたのも無理はない。その結果として日本の戰時大本營否少くとも陸軍側が斯る風説を眞面目に受けたのは後に現はれた作戰計畫に徴するも明かである。



## 五、米國の砲船隊トラツクへ向ふ

トラツク占領の數日後、これ迄數ヶ月間ダツチハーバーに碇泊して居た四隻の米國戰艦は竊に何れへか出動した。斯る優勢な戰艦を遠隔なウラナスカ方面へ派遣したならば、米國の机上の空論家達は兵力を無益な且危険に分離するものとして大なる非難を浴びせ掛くるに違ひない。然しながら事實は然らずして特に近世の戦争に於て然りとする。實云へば此七月初旬の朝霧に紛れてダツチハーバーを出港したものは、外見上には何人が見ても戰艦アーカンソウ、ワイオミング、フロリダ及ユータの四隻であったが、其實は何れも名前を借りた砲船戰艦で、大型貨物船を巧みに擬装して戰艦に質せたものである。其有する砲や砲塔は外見上には恐ろしきものゝ様に見ふるが皆俄か造りの木製で、若し一發の巨彈を見舞はれたならば、此等の弩級艦は何れもマツチの如くバラ／＼となるに違ひない。抑も此

等の砲船は其目的とする所戰ふにあらずして敵を欺くにある。斯る砲船を使用することは戰略上決して新しきことでないので、既に英國は世界大戰中に之を演じ、歴史家の云ふ所にして誤らずんば、日本も亦日露戰爭中に之を使用したのである。然るに今此米國の場合に在ては此の陳腐な戰略は最も重要な最終の効果を擧げねばならぬ任務を擔つて居た。

此等の砲船は以上四隻の外にビュージェットサウンド海軍工廠で更に六隻が艤装せられたので、合計十隻の所謂『戰艦』を使用することが出来る。此等の中には米國戰艦隊の最鋭なるメリーランド、コロラド、カリフォルニア、テンネツシーの質物も混つて居るので、正しく米國海軍の粹を集めた大艦隊である。此等の砲船大艦隊は七月十五日ポートランドに集合してトラツクに向ひ、八月七日無事同島に到着した。其三日後には此等の砲船艦隊は航空母艦アラスカ及二個の驅逐隊に伴はれて北西方向に掃蕩を行ひ、グワムを距る百五十哩の所に達するや日本の潜水艦を發見した。斯くて



艦隊は針路を反轉して歸航の途に就ひたが、其數時間後には開戦以來該方面で始めて見らるゝ米國の戦艦に對し、爆彈を投下せんと待ち構へた日本軍の大型飛行機數臺に依て攻撃された。米軍側では息を凝らして敵の行動を見つめた何となれば敵の爆彈にして一發にても命中するならば米艦の化の皮は露はれて這回の行動を準備的として之から取らんとする一切の戰略計畫は水泡に歸するからである。然るに幸にも驅逐隊の高射砲は日本の飛行機を撃退して爆彈の命中不確實なる高度に保持し、更に近づいて有效なる爆彈を投下する前にアラスカよりの追撃機は日本機を追拂つたので、米軍は危機を免れ無事トラツクに歸航するを得た。

斯くて夫は米軍に幸して萬事は豫定の如く進んだ。日本の大本營では潜水艦と飛行機よりの詳報に接して、米國の戦艦隊、又は其大部がグワム方面に威力偵察を行つたと信ぜざるを得なくなり、最早米國のグワム攻撃を眞面目に考ふるに至つた。此等の事情を知らんには太平洋上に於けるグ

ワム島の價値が、日本人より見れば單なる孤島以外に何等かの理由あることを述ぶるの必要がある。他なし此島こそは極東に對する外國の勢力を標示する標<sup>標</sup>として、米國が早晚之を難攻不落の堅塞となし、米國艦隊は此處に據りて自國海面の管制は素より、又大日本の門戸をも窺ふことが出来るからである。勿論華府會議は該島に要塞を築き、又は海軍根據地としての設備を新たに爲さるゝことを米國に約せしめたが、東洋人の眼からは斯るは一片の白紙に過ぎずと見られて居た。斯る理由から開戦初頭に於ける此島の攻略は眞の成功以上に日本人に非常なる感動を與へたのであつた。果して然らばグワムが今や壓倒的に優勢なる兵力を以て奪回されんとして、あることを聞ひた時、日本人に對する反動の如何に大なりしやは察するに難くない。

## 六、日本の不安と支那の對日宣戰



日本の軍事當局者等は從來輿論に對して峻嚴な態度を保持したので、最高軍事會議の採つた食糧品其他の必需品——此等は米國巡洋艦活躍の結果、此時既に非常な缺乏を告げて居た——の貯藏策を穩かに批評したばかりで、二三の新聞紙は發行禁止、罰金及編輯人の禁錮と云ふ様な處罰に付せられた。政府者と其反動的支持者等は平時は憲法上の保障の爲め多少の遠慮はあつたが、今は憚る所もなく高壓政策に出ることとなり、全國は擧げて只だ戒嚴令の下に統治せらるゝこととなつた。此の獨斷的政策の結果、開戦當時に俄然として勃興した國民の熱狂的愛國心は漸次に然も確實に冷却し始めた。時に議會は開かれて居たが、千九百三十一年(大正二十年)二月に宣言された各政黨の政治的休戦は夙に破れて居た。自由主義的政客の演説は葬られ、反動派の雇壯士の爲に暴行を加へられた者も數多あり、遂に六名の代議士は政府の高壓政策に抗議した爲に投獄せらるゝに至つた。一言にして云へば、擧國一致は既に破れて居たのである。

日本に於ける食糧の配給は政府の命により表面上には何人にも均等であつたが、實際に於ては富者階級は公然と美味珍肴を購ひ之を口にすることを、得たので、貧弱な食物に甘んぜねばならぬ下層民の間には、戦争に對する倦怠の狀が益々顯はれて來た。數十萬にも上る此等下層民は、戦争に關係ある種々な事業に徵發され、然も陸海軍の僅かばかりの給與率で働かねばならなかつた。此等は嚴格なる軍紀の下に置かれ、苟も規則を犯せば容赦なく嚴罰に處せられた。既に千九百三十一年(大正二十年)の秋から横濱神戸、大阪を始め其他の主なる工業都市では平和を議せんとする集會が竊に行はれ、此等の席上に於て警官が優勢な時には容赦なく之を解散せしめ、全體が檢擧されることもあつた。然しながら政府の干涉も今は非常な勢を以て擴がりつゝある國民的運動の前には如何ともするを得ない。茲に於てか先見ある識者等は政府當局に對して、革命を撲滅せんが爲の戦争は却て革命の有ゆる可燃分子に點火することゝならんと忠言を與へた者もあ



つたが、政府は事態の容易ならざるを知りつゝも、結局は勝利を得べしとの望を放棄するを得なかつた。實に國民の不平を抑へ、激昂せる彼等を熱誠なる愛國者に轉ぜしむるには眞に光輝ある勝利に依るより外に方法は無つたのだ。

然るに茲に日本政府にとりては由々しき災難が新たに起つて來たので、今は斯る勝利を收むることは如何なる點より見るも最も緊切となつた。他なしトラツクの陥落數週前、北京政府は其態度を鮮明にして、支那領土内より軍需品の輸出を禁じたのである。此輸出を禁止した軍需品の品目中には、日本が自己の經營の下に支那より採掘して日本へと送りつゝあつた石炭、鐵及他の礦物があつたので日本人の注意は茲に集つた。何となれば支那から之を禁せられては貿易は忽ちにして停止し、日本の軍需品製造は茲に一大打撃を受けて、例へ一週間と雖も戦争を繼續することが出來ないからである。茲を以て日本政府は高壓は最後の手段で、今は如何なる手段

を盡しても穩和的態度を取るの外なしとして懇願的方法を試みたが、北京政府は之を拒絶した。斯くて北京政府は實際には最後通牒に等しき峻嚴なる覺書を日本に送りて支那の礦山より採掘せる礦物の輸出を直に停止せんことを求め、若し之に應ぜざれば支那は己の主權を保持せんが爲に必要なる有ゆる手段を取るべしと通告した。然るに日本よりは返事が無つたので、其一週間後には支那は日本に對して宣戰を布告した。

此の支那の對日宣戰は一部は素より米國外交の壓迫によるが、然しそれは全部ではない。之より嚮き支那の統一に向て道を開ひた王楚將軍の武勳は、支那國民に愛國心を燃へ出さしめ、支那領土内に於ける外國勢力の侵入を驅逐せしむることとなつたが、此點に關して特に公憤の的となつたものは日本である。支那は日本に對する勢力の弱小なるに顧みてこれ迄恨を呑んで居たのであるが、今や將軍王楚の率ふる陸軍は精銳四十萬を算し、近世の武装特に大砲だけは多少不足して居れど、實戰には差支へる程でな



い。加之ならず其の陸軍は内亂以來最も有能の譽高き將軍王楚と其部下將校に率ひらるゝのみならず、就中最も重視すべき無形的の遺産とも云ふべき支那國民の信頼を得て居た。然しながら茲には此の王楚軍の花々しき戰爭に就ては之を後章に譲ることゝして先づ海軍の方面に筆を轉じて見よう。

## 第十八章 米國のアンガウル島占領

日本艦隊を誘出せんとする米軍の計畫——艦隊の出動——日軍艦隊を襲撃す——米軍のアンガウル島占領——米軍の戦勢有利となる——當時に於ける日米兩艦隊の兵力校計

### 一、米軍艦隊の出動

既述せるが如く日本の軍事主腦部は、敵第二段の行動をば漫然として無限に待受くる譯に行かなかつた。否、それよりも特にグロムを喪失することや米軍が西太平洋に進出するに當り副次の作戰目標となり然も戰略上に重要なりと海軍専門家の眼に映じたるペリユー群島の如きものを失ふが如きは到底堪へ得る所では無かつた。然るに其後の事實が證明する所によれば、此海軍側の意見は正當であつた。

米國海軍作戦局の採用した計畫は、比島を奪回せんが爲に一步々々根據



地を奪取するにあつたが、之が爲にはペリユー群島のアンガウルが最初に  
 撰定された目標であつた。時に華盛頓に於ては此計畫に對して日本の主  
 力艦隊は到底之を妨ぐることは出来まいと觀測して居た。幸にもトラッ  
 クは既に米軍の手中にあり、米艦隊は之を根據として行動しつゝあるので、  
 日本の巡洋艦や潜水艦の攻撃を受くるの惧なく、可なり安全にペリユー群  
 島に達することが出来る。最もアンガウルには輕微の防備は施してある  
 から、之には相當の警戒を加へねばならぬのは勿論である。果して然らば  
 殘る不明なる唯一の要素は日本の主力艦隊が果して之を妨ぐるや否やで  
 ある。併しながら米國一般の輿論は、日本は最後の決戦を試みる迄は輕々  
 しく其主力艦隊を出動せしめないであらふと見て居た。

アンガウルの脅威に對して日本が果して主力艦隊を出戦せしむるや否  
 やは疑問であつたが、日本としては寧ろグワムの如き戦略上頗る重要な個  
 所を防禦せんが爲に、最後の場合迄は主力艦隊の出戦を敢てせざるものと

信ずるのが至當であつたので、米軍の全戰略計畫は之を基礎として割り出  
 された。此際極東より華盛頓に達した情報はハーバー提督の先見の明を  
 裏書するもので、日本がグワムをば戰略上よりも寧ろ士氣上より、最後まで  
 死守せねばならぬと決心して居たことは一點疑ふの餘地は無かつた。茲  
 を以て米軍側では日本の主力艦隊を誘出して、日本の根據地より遠く離れ  
 た海上に於て、米軍司令長官の欲する時機と、米軍にとりては最も有利なる  
 狀況の下に戦を強ふる様、其方法を案出することとなつた。

此問題の解決は勿論困難なるも不可能とは思はれなかつた、而して其解  
 決法は次の通りである。讀者は既に米國の四船艦隊がトラック方面に進  
 み、更に之よりグワム方面に迄巡航したことを記憶さるゝであらふ。此の  
 グワム方面への巡航は八月十日より同十七日迄の期間であつたが、其十日  
 後には再び之を繰返した、但し這回は其計畫は前回と同様ではあつたが少  
 しく之に変更を加へた。即ち四船艦隊は前回よりも五十哩遠く進出し、グ



ワム島の南東百哩の所まで進んだのである。此の地點に於て這回も亦日本飛行機の攻撃を受け、其損害も亦前回に比し一尺多大であつた。即ち戦闘なる時、數臺の日本飛行機は米軍の猛射を冒して勇敢に突進し來り、爲にカリフォルニヤは爆彈の爲に怖ろしき爆發が起り、次で第二回の爆發が起つたが、それが爆彈によるか又は魚雷の爲であつたかは不明である。此の巨大な艦は直に沈没し始め、驚くべき短時間内に海中に没し去つた、而して其乗員の多くは艦と運命を共にし、味方の驅逐艦に救はれた者は僅かに五十餘名に過ぎなかつた。

日本の飛行機は此の驚くべき勝利に酔ふて尙も突進し來り、更に他の艦を攻撃せんとしたが、此混雑中米軍の一弩級戰艦は僚艦と衝突した。日本の飛行機は之をオクラホマか又は其姉妹艦ネバダと思ひ、根據地に歸還後然く報告した。日本の飛行機が戰場を去る時は同艦は沈没しつゝあり、多數の端舟は其乗員を救出しつゝあつた。然るにこれ以上の觀察は日本

飛行機の方では不可能であつた、何となれば此時アラスカよりの追撃飛行機は飛翔し來り、劇しき戦闘の後四機を残して日本の飛行機を皆墜落せしめたからである。米機が特に此四機を見逃したのは戰況をグワムを通じて日本の大本營に傳へんが爲である。此等米軍の損害は何れも詭計を以て日本人を欺かんが爲で、即ちオクラホマの最後の如きも日本の飛行機が現場を去る迄は全く沈没せしめなかつた、何となれば非常に重き砲塔や六十五噸砲が海上に浮んで居る様では化の皮が露はるゝからである。實際日本飛行機よりの爆彈は一も米艦の有効距離内に落ちなかつた、只だ四船カリフォルニヤだけは爆彈が極近き所で爆發したので、水線に穴を穿けたものと敵は思つたかも知れない。茲に於て沈没を装はんが爲め、直に海水弁を開ひて沈没せしめつゝ艦の平衡を保たしめ、以て四船の正體を現はさない様にした。オクラホマの衝突の如きも實は故意に之を演じたもので、此の芝居を演じた米軍側の將卒は、敵に其計畫を暴露せず、美事に任務を



遂行し得たことを祝し合つたに違ひない。此の喜劇的戰略が豫期の目的を達したか否かは將來の結果を見るの外なきも、米軍は何れも完全に目的を達したものと信じて居た。

日本飛行家の如き訓練ある海軍士官をば『捏造』の戦艦を以て欺き得るとは信ずるを得ないと云ふかも知れない、併しながらそれには之を打消すべき種々の理由があることを知らねばならぬ。第一に此の日本飛行機の攻撃は非常なる高空より行はれたので、米艦の位置さへ明瞭に判定することは出来なかつたに違ひない。第二に米軍の駆逐隊は烟幕を張り、加ふるに砲烟や爆弾よりの水烟もあつたので、艦の識別が充分に出来なかつたであらふし、又第三の理由としては、如何に頭腦明晰な人でも心理上の作用により、實際の物よりも寧ろ自己の想像せるものが眼中に映するを常とするから、茲に間違を生じ易きことも擧げねばならぬ。實に戦闘の初期に當つては相矛盾せる觀察が行はれるのは海戦の状態で、兩軍の損害の如きも多

くは一致せないものである。されは日本の飛行機がグワムの根據地に歸還して米國の精銳なる二隻の戦艦が、一は爆弾により他は衝突によりて沈没したと報告したのは何等怪しむに足らない。東京に於ても亦之を事實と信じて、疑はなかつた、否却て米艦隊の精銳か爆弾の爲に脆くも沈没したのは、米國戦艦の防禦力は豫期に反して案外劣弱なりとの信念を高むるに至つた。由來東洋人は西洋の事物に關して侮蔑の眼を以てするの風がある。日本の海軍々人も亦此の習慣を脱するを得ないので、米國の弩級艦は構造脆弱なりと結論したのであらふから、此の心理的作用は勢ひ日本の作戦計畫にも重大なる影響を及ぼさざるを得なかつた。

## 二、日本主力艦隊米軍の欺計に陥りて出動す

一定の排水量を有する米國の軍艦を取りて、之と同型にして其戦闘力も本略は同等なる日本の軍艦と比較する時は、米國側は數に於て日本側に數



倍して居るから、日本側は今迄は勝利の算なきものと信じて居た。然るに若し米艦にして日本の海軍専門家が信じた様に設計に於てか、又は構造上に或種の根本的缺陷ありとすれば、數の上の優勢は意とするに足らないので、米國主力艦隊との決戦も敢て恐るゝに足らない。此種の考慮と或種の劇的成功を収めねばならぬとする目前の必要との爲に、日本の最高軍事會議は海上に於て積極的作戰を斷行する事に決し、艦隊司令長官は主力艦隊の決戦を行ふべき有ゆる準備を完成せんことを命ぜられた。即ち特別任務にある戦隊や各軍艦は利用し得べき總ての軍艦を集中せんが爲に斷へず召還せられ、其成るや艦隊は全兵力を以て即時出動を爲し得る様準備を整へ、各艦は大は戦艦より小は潜水艦に至る迄燃料を滿載した。又これ迄航空隊の根據地となつて居るグワムには、海岸防禦用のものを除く總ての精銳なる飛行機を集中すべき命が下り、更に又大湊、吳、佐世保等の根據地に碇泊して居る各種の補助艦船——給油船、給炭船、工作船、給兵船及曳船等——

—は直に横須賀に急航する様命ぜられた。最後に總ての海軍工廠は緊急を要する仕事以外全部作業を中止し、來るべき大海戦に伴ふ艦艇の修理に支障なき様、萬般の準備を完成すべき命を受けた。斯種の準備は勢ひ大なる時日を要するものであるが、日本に於ては僅かに三週間足らずで之を完了した。

斯くて日本の全艦隊は準備成るや九月十七日を以て小笠原方面に向ひ出發した。時に數隻の日本潜水艦はトラックに在る米艦隊の行動を監視せんが爲め派遣されて居たが、今や米軍は同方面に於て連りに活動しつつあるので、此等潜水艦の任務には危険が伴つて居た。トラック島にある米軍の水中聽音所は、該島より十哩の圈内に現はれた潜水艦をば時を移さず探知し得るのみならず、偵察用飛行機や驅逐艦も亦増援されて居た。斯様な状態であつたので、日本の潜水艦伊五十九號は餘りに深入りして發見せられ、九月十四日水中爆雷で響沈せられ、他の數隻は辛ふじて同様の運命よ



り免れた。偵察に任じた此等の日大潜水艦はトラツクには多数の戦艦と運送船と思はるゝ商船が到着したことを報ずる以外には何等價值ある情報を得なかつたので、日本は更に他の偵察手段を試みることゝなつた。

九月二十日航空母艦鳳翔は数隻の驅逐艦を伴ふて二見港を出で、南東方に航してトラツク島の百五十哩以内に進み、此所にて四機の偵察機と八機の戦闘機を飛ばした。彼等の受けたる命令は出来るだけ戦闘行爲を避け、兎も角もトラツク島の上空を飛行して慎重に港内の艦船を視察し、且縦横にカメラを使用するにあつた。斯くて此等の飛行機は日出後一時間にして該島に到着したが、霧に妨げられて偵察に困難を感じたけれど、敵に過早に発見せらるゝことも無かつた。茲に於て各機は低空飛行に移り、敵に発見さるゝ前に該港と附近の海面を一周した。然るにやがて日本の飛行機を認めたま艦や砲臺は猛烈なる砲火を開き、續いて米機の襲撃は開始された。日本側は此の攻撃を振り拂ふ迄に早くも五機を失つたが、鳳翔に無事

歸還した飛行機の報告によれば、トラツクには戦艦と思はるゝ少くも八隻の大艦、四隻の大巡洋艦、多数の驅逐艦、十数隻の商船ありとせられたが、此等は飛行機の齎らした寫眞を現像するに及んで益々精確なりとせられた。此報告に満足した日本の海軍々令部は一大遠征軍が將にトラツクを出發せんとしつゝあるものと判断し、其目指す所は恐らくペリユウ群島ならんとの説を取つたが、最高軍事會議の方ではグワムが目標であると主張して譲らなかつた。

此兩者間の論争が尙熾まぬ間に艦隊よりの電報は最高軍事會議の判断を裏書するものゝ如くに見へた。他なしトラツク島の北方を偵察しつゝ、あつた日本の一潜水艦は、一大艦隊が北西方に向て航行しつゝあるを発見し、充分之に接近して視察したるに、十隻の戦艦と少くも十二隻の運送船を認めたと云ふのである。此潜水艦が敵艦隊を発見したのはトラツク島の北七十哩の地點であるから、其進路の示すが如く目的地が果してグワムで



あるとすれば、尙約五百五十浬の航程を餘して居るので、假りに艦隊の集合速力を十四節とすれば尙約四十時間を費やさねばならぬ。日本の海軍々令部は敵の無謀なる蠻勇的行動に愕ろきつゝも、今は敵の目標はグワム島の奪回なりとせざるを得なかつた。茲を以て即刻必要なる命令を下し、潜水艦からの無線電信受信後三時間を出でずして、日本の主力艦隊は全速力を以てグワムに進むべき命令を受けて二見港を出發した。

『艦隊の將卒は我歴史上に於ける最大の海戦に勝敗を決せんが爲め進發しつゝあることを擧つて銘記せり』とは、當時艦隊の一艦に便乗した日本の海軍史家中橋氏の記述す所である。氏更に筆を續けて云ふ、『敵艦隊のグワム到着後間もなく之と會して戦鬪を強ひ得ることに就ては吾人に確信があつた、我が出發點たる小笠原島よりグワム迄の距離は約八百六十浬で、我が艦隊速力は二十節であるから、我は敵よりも三乃至四時間遅れてグワムに到着することゝなる。蓋し敵は我に比し航程は小なれども低速の運

送船隊を伴ふを以て我に六節の優速があるからだ。今や士氣は全艦隊に横溢して居る、敵の兵力は僅かに戦艦十隻なりとは旗艦の報する所である、果して然らば殘餘の敵艦隊は何れに在るか？ 此等は恐らく他の方面より來援しつゝあるであらふ。何となれば米軍は既に幾度か其戰略を誤りつゝあるから、今回も亦其主力艦隊のみを敵に暴露せしめて孤立無援の位置に置く様なことは有り得べきことであるからだ。萬事は益々我軍に有利である。吾人は十一隻の戦艦を有し、然も此等は敵の同型艦よりも優速である。吾人は又巡洋艦や驅逐艦の數に於ても敵に優り、恐らく飛行機に於ても同様であらふ。されば吾人にして若し此の大膽不敵なる侵入者と會戦して之を全滅することが出来ないとするれば、それは寧ろ不思議と云はねばならぬ。上は司令長官より下一卒に至る迄、全員は唯一つの覺悟に燃へ立つて居る、他なし陛下と祖國の爲に光榮ある勝利を收めねばならぬと云ふことである』と。然り當時の情況に就ては吾人は此の雄辯なる海戦史



家が叙し去り叙り来るまゝに従ふの外はない。

氏は更に筆を續けて云ふ、其日は日夜を問はず日本艦隊は會戰當時の豫備速力として二、三節の餘裕を餘す以外高速を以て航進した。旗艦長門には我が潜水艦偵察飛行機——後者はグワムを根據として飛行して居た——よりの報告が刻々に來り、何れも敵艦隊の益々グワムに接近しつつあるを報じたが、最後に來た數個の電報では敵は稍々速力を緩めた様に見へた。『十月三日午後四時日本艦隊は二見港を出で、より三十五時間にして約七百哩を航破し、グワム島を距る百五十哩以内に近ひた。明日こそは敵は我等の掌中に入るのだ！斯く思ひつゝある偶も此時である、全身に冷水を浴びた様な信號が旗艦より來た、曰く「偵察隊の報告に依れば敵艦隊は午後三時三十分針路を變じて正東に航行しつつあり、艦隊速力を二十二節に増せ」と。これ抑も何を意味するか？ 我艦隊は全速力に僅に一節を剩す高速を出すことを命ぜられたのだ。果して然らば獲物は我等の掌中より

逃れ去りつゝあるのか？ 今や全艦隊の緊張は極度に達した。勝利を確信し腕によりかけて待つて居た氣早の士官等は之を聞て俄に悄氣始めた。然るにも拘らず我等は尙も望を持ち續けて居たが、午後五時に至り旗艦は更に信號した、曰く、「敵は針路を反轉し全速力を以て南方に退却しつつあり」と。萬事休矣！ 會戰の機は既に逸したのだ。然り此時若し汽罐の續く限りの全速力を以て敵を追撃するならば、彼等がトラツク到着以前に之に追及し得たかも知れない。併しながら敵の海面に突入するの危険と燃料の缺乏とは如何なる指揮官を以てするも如何ともするを得ない。果せる哉、午後五時三十分旗艦は次の信號を揚げた、曰く「速力を十二節に減ぜよ」と。斯くて追撃は中止され、全隊艦は既に襲撃の危険を免れたグワム島向つてのろくろくと進むだが、吾人は例へ敵を撃破するの好機を逸したとは云へ、少くも敵の計畫を畫餅に歸せしめて、正に占領されんとする重要地點を救ふことが出來たのである」と。



併しながら吾人は此の健氣な史家の自己慰藉さへも其當を得ざりしを恐れざるを得ない事實に於てはグロムは少しも危険で無つた。日本の偵察隊からは蛇の如くつけ狙はれ、遂には日本の主力艦隊までも二見港から出發せしめて、之が撃破に向はしめた米國の遠征軍は、實は戰艦を裝ふた四船艦隊と空虚の運送船隊で、後者の如きは何等の役にも立たざる老朽の商船に過ぎなかつた。然も米軍の此計畫には二個の目的があつた、一は即ち當時の日本艦隊は如何なる程度に迄戰備整ひ居るやを知らんとし、二にはペリユー群島への遠征軍が此の四船艦隊の出發後數時間にしてトラツクを出發したので、日本艦隊の注意を他の方面に轉向せんとしたのである。

### 三、米軍のアンガウル島占領

ペリユー群島に對する遠征軍を載せた運送船隊は布哇より直航したもので、其トラツクに到着したのは日本の飛行機が該港を偵察した一週間後

であつた。其後二日にして米國の戰艦隊も亦同港に來着した、同艦隊は途中ヤルットに立寄り、こゝで驅逐艦や巡洋艦の燃料を補充したのである。此遠征軍は十月二日を以てトラツクを出で、ヤップ方面よりの日本潜水艦の危害を避けんが爲めに南方航路をとり、戰艦隊は其西方にありて全航程千四百哩の三分二を掩護し、快速巡洋艦の一隊は日本艦隊の來襲すると思はるゝ北方に占位して偵察に任じた。然るに十月四日に至り此方面の心配は一切無用となつた蓋し之より嚮きグロムの北方を偵察しつゝ、あつた數隻の米國潜水艦は、多數の日本戰艦隊が全速を以て南航しつゝ、あり、これ明かに當時グロムに接近しつゝ、あつた米國の四船艦隊を遮斷せんとするものならんと報告したからである。之に依て日本の主力艦隊はペリユー群島より少くも八百哩の距離にあることが明かとなつた、されば今や目的地迄は只だ二日航程の所にある米國の遠征軍を妨害し得ることは出來ない。残るは日本巡洋艦潜水艦の脅威のみであるが、既述せるが如く此等の



ものは實際には横須賀に艦隊の大集中を行はんが爲め約一ヶ月前に南洋方面より召還されて居たのである。

遠征艦隊は十月六日ペリユー群島中の主なる居留地アンガウルに到着し、先づ驅逐隊をして之を偵察せしめたが、敵は之を發見して港口を扼する六吋砲臺より砲火を開ひた。茲に於て航空母艦ハーバートよりの飛行機は飛行して多數の含燐瓦斯彈と爆彈を投下し、守備軍をして忽ちに戦闘不能の状態に陥らしめた。斯くて一人の死傷者をも出さずに上陸し、十月六日午後九時には八千の陸軍兵は上陸した。嘗てトラツク、ヤルード、ボナベに於ける上陸以來非常に經驗を積んだ軍需品揚陸隊は、一刻の猶豫もなく大砲、附屬品及諸材料の陸揚を開始し、爲に一週間以内にはアンガウルには七吋砲及其他の輕砲が据付けられ、飛行隊も完成したので、敵の奇襲に對して安全となつた。偶ま十二日に至り、ヤツブより二臺の日本飛行機飛來し、島上を偵察せんとしたが、何れも追撃を受け、焔に包まれて墜落し、以て防備

の如何に完成せしかを示した。

米軍のペリユー群島占領の報日本に傳はるや、日本に於ては國を擧げて狼狽し、多くの方面に於ては全く絶望に陥つた。今や最高軍事會議は有ゆる點に於て誤算を取てせるを自白せざるを得ざるに至り、此の明白なる戰勢の發展を豫想し、之に對せんとして努力したるも、陸軍側の反對によりて水泡に歸し、馬鹿正直にも之を追想するに止つた海軍側とても、陸軍主腦部の失策を取返す術とても無つた。斯くて形勢は絶望といはぬ迄も極めて危殆に瀕しつゝあることは何人の眼にも明白であつた。

茲に於てか米國は之に乗じて大膽にして慎重なる行動を續行し、依て以て戰略上の全形勢を自己の有利に展開せんとした。戰爭開始以來米人は地勢に制せられて其手を太平洋の東半部にのみ制限されて居た。かの小笠原遠征の如きは此の視へざるも然も嚴密なる哨線を突破せんとして、戰略上の原則に反しつゝも之を斷行し、其極遂に愚劣なる不幸を招ひたもの



に過ぎない。併しながら斯る痛ましき犠牲より得た教訓は無益でなかつた。實に此小笠原遠征の失敗よりは、今や將に其收穫を刈り入れんとする嶄新にして健全なる戰略は生れて來たのである。

此のペリユウ群島の占領と共に戰爭の山は見へて來た。何となれば之が爲め日本が勝敗を一擧に決せんとする最後のカードを投ずるの日も近ひて來たからである。一見する所米軍の形勢は依然として絶對安全の境地に達せず、否尙不安とさへ思はるゝ點があつた。見よアンガウルに於ける新根據地は堅固に防禦され、強大なる兵力を以てするに非んば之を攻略すること不可能なるも、其位置は米國の何れの大根據地よりも餘りに遠く距つて居る。即ち布哇とは三千八百哩、ツツイラとは三千六百哩を隔て、然も此兩地よりアンガウルに至る航路は日本の堅塞たるグワムは素より、其北西僅に三百哩にあるヤップ島よりも側面を攻撃せらるゝの憂がある。其西方五百哩には更に比律賓群島横はり、該島の諸港には日本はペリユウ群島

を奪回せんとして秘密裡に壓倒的勢力を集中しつゝ、あるものと思はれた。されば多數の傍觀者は米國が斯くも西方に深入りするは、恰も獅子の頭を突込むものと考へたに違ひない。然しながら尙深く檢覈すれば此見解は必ずしも正當でない。

米軍はペリユウ群島に其足場を固むる以前に、該群島に至る主要航路を脅かす所の敵の潛勢的根據地の總てを秩序的に占領し、此等の根據地を迅速に利用して、全交通線に沿ひ可なり有效なる哨線を配備した。勿論時としては日本の巡洋艦又は潜水艦は此交通線に出没して絶へず往來しつゝ、ある運送船隊を攻撃し、之に危害を加ふるもの危険はあるも、斯る襲撃は戰爭の全局上には何等決定的影響を與ふるものでない。此哨線後方の何れかには今や米國の戰艦隊あり、此等はヤルート、ボナベ、トラツク、アンガウルに於て燃料を補充し得るので、東方の根據地布哇と連絡をとるの必要もなく、布哇比島間の如何なる地點に於ても全力を擧げて攻撃し得るからである。



## 四、日本其艦隊を馬尼刺に集中す

之を日本側より見るに、日本は敵艦隊を撃破せざる以上、既に敵の掌中に歸せる諸島を奪回して、己の領海内に侵入する敵軍を阻止するは素より、目前の頽勢をも挽回するを得ない。日本若し敵の挑戦を避けて其主力艦隊を不活動の状態に置かば米軍をしてマリアン群島を占領せしめ、依て以て太平洋の西半部に自由に其手を伸ばさせる結果となるの外はない。然も此マリアン群島の占領こそは今や次第に明瞭となりつゝあつたのである。翻つて米國側は如何と見るに、明確なる情報を缺如するも、米國の陸軍力が過去の十八ヶ月間に於て非常に増大せるは日本人の明知する所である、其海軍力の如きも右の期間内に於て戦艦以外の各艦種は其力を倍加し、戦艦隊も亦増勢されたことは勿論である。米國は敵に優る無限の富と工業的資源とを有するを以て、今や既に海を越へて攻勢作戦を行ふに必要な

總ての材料を準備し、其陸軍は正に數百萬に垂んとして居る。其商船は造船所より續々として出來上り、未だ嘗てなき大規模の遠征軍に必要な有ゆる運送船や補助船に利用することが出来る。來るべき大決戦に要する費用は素より莫大ならんも、米國の大なる財力より見れば敢て重大視するに足らない。其食糧品の供給は無盡藏にして各種の原料品も亦同様である。由來米國民は戦争に對して根本的の嫌忌を有せるにも拘らず、這回は名譽ある永久的の平和を贏ち得る迄は飽迄も戦はんとする不撓不屈の決心を異口同音に示して來たが、今や形勢は益々己の側に有利となつたので、以前よりも一層堅く不完全なる休戦を承認せざるに至つた。

這般の事情は素より日本の治者等が知悉せる所で、彼等は之と同時に自國の形勢の不利なることをも痛感して居た。今や戦争は一年半に垂んとして居る、果して然らば既に有らん限りの力を盡した日本は尙幾年間此戦争を持續し得るか？。之を寛大に計算するも日本は其國民の結束にして



壊崩せざる以上尙半ク年間は耐へ得るかも知れない。併しながら此時既に國民一般の意氣は政府をして充分の確信を以て戦争を持續せしむるに足らなかつた。此際日本にして何等か決定的の勝利を收め、依て以て米國民をして戦争を繼續するの無益なるを知らしむることが出来るならば形勢は日本にとり好轉したかも知れない。然るに日本は既に中立諸國を通じて公平妥當なる條件ならば喜んで平和に應ずべき旨を米國に通じ、日本が米國より奪取した諸島嶼を日本の領有に歸せしむることを條件とするならば、償金を要求せないと云ふ肚を見せて居たが、斯る探りは勿論、米國內に何等の反響を起さず特に當時日本がペリユウ群島を喪つたことは斯る提案を無効に歸せしめた。然しながら靜かに日本帝都の内部に於ける形勢を観察すれば、敵の講和條件に服して平和を求めんとするの意志は尙未だ日本に無つた。即ち最高軍事會議は有形無形に未だに其戰鬪力を損せざる艦隊の力を過信し、之を以て敵の肺腑を衝き得るものと信じて居た。

果して然らば日本の爲め之を最も有利に使用せんには如何にすべきか？

これ即ち最高軍事會議の焦眉の重要問題であつた。

米軍の進出線は遙か南方にあるので、日本艦隊にして小笠原島を其主根據地とせば適時に之に應ずることは出来ない。グロムは此目的に對して適當なる位置に在るも、大艦隊を容るゝに足るの泊地と陸上の設備が無ひ茲に於てかアングウルからは距離稍々大であつたけれど、結局馬尼刺灣内のキャピテが日本の艦隊根據地として撰定さるゝことゝなつた。時にキャピテに於ける造兵廠は日本軍の占領以來大に擴張され、又ミンダナオ島の東海岸方面には、哨艦を配備して、一朝グロム―又は萬一の場合ミンダナオ―が脅威さるゝ場合には、之を遮断せんとする日本の主力艦隊に、適時に重要な敵の行動を警報し得るの手段を講じて一層安全の度を増した。斯くて日本艦隊は敵の視認を避けんが爲めバリンタン海峽を通過して十月十五日馬尼刺に到着したが、偶ま米國潜水艦V七號と同十一號の二隻は



該海峡の東方を巡航しつゝあつたので、舩艦相合んで航行する大艦隊を認め、無線電信を以て之を適當の方面へ報告した。

五、千九百三十二年(大正二十一年)十月に於ける  
日米兩艦隊の勢力

今や日米兩國大海戦の時機熟し、彼我主力艦隊の決戦も單に數週間内に迫つたので、茲に兩軍の編制を述ぶるは其當を得たものであらふ。

千九百二十二年二月に調印された華府條約は、其時より開戦迄の九ヶ年間兩國主力艦隊の勢力を一定せしめた。兩國は開戦と同時に新艦を建造して其勢力を大ならしめんと努めたが、日本が既に建造に着手したと稱せられた驚くべき大型の巡洋戦艦は實は紙上の設計だけで、實際には建造されなかつた。日本は狀況已に最も有利に推移するも、此等の大艦は二年以内に完成して役務に就けることが不可能なるを豫想して、戦争に間に合は

なひ上に例へ完成しても既に時代後れのものとなつて居る軍艦の建造に勢力を消費せざるを賢明の策と考へ、寧ろ小型の主力艦を増勢するのが近道だと考へた。そこで眼をつけたのが、加賀と赤城の二隻である。此二隻は始め主力艦として建造されつゝあつたが華府條約の結果航空母艦に改造されたものである。元來航空母艦は之と協同動作する戦艦より少くも七節の優速を必要とするに、加賀の速力は僅に二十三節であつたので、決して完全なものとは云へなかつた。之に反して赤城の速力は二十八節であるので一層所期に近ひものである。然るに日本は最近鳳翔と他に數隻の快速航空母艦を完成せしめたので、茲に航空母艦の數は相當に備はることゝなつた。茲を以て戦雲愈々急となるや、日本の海軍當局は加賀赤城の二艦を元に復せしむることに決定し、爲に日本海軍は比類なき戦闘力を有する二大主力艦をば其主力艦隊に加ふることゝなつた。

此二艦の改装工事は直に着手され、更に其完成を速かならしめんが爲に



は之を裝備すべき砲や裝甲板の大部は之を歐洲方面に注文した。斯くて千九百三十二年六月迄に此改装された二艦は就役するの運びに至つた。加賀は今や四萬噸二十三節の戦艦となり、十門の十六吋砲を有し、其重要部は強固な裝甲板を以て蔽はれて居る。赤城は四萬四千噸の巡洋戦艦となり、八門の十六吋砲を有し、三十節の全速を出すことが出来る。此等は米國海軍の同型艦よりも何れも優勢で、之が爲め日本海軍は主力艦の總數十二隻となり、内五隻は二十八節の巡洋戦艦で、他の七隻は平均二十二節の速力を有する戦艦である。其大口徑砲の總數は百十四門で、内三十四門は十六吋砲、残りは十四吋砲である。其他就役中のものに四隻の航空母艦、二十三隻の巡洋艦(中には八吋砲を有する大型巡洋艦數隻あり)約百隻の驅逐艦、及噸數と威力を異にする九十四隻の潜水艦がある。

之に對して米國が西太平洋に集め得る艦隊は十六隻の戦艦(註一)二十三隻の巡洋艦、百十五隻の驅逐艦、八十隻の潜水艦及航空母艦五隻である。

戦艦主砲の總數は百七十門で、内十二吋砲二十二門、十四吋砲百二十四門、十六吋砲二十四門である。次に速力に於ては米國側は何れも日本側に劣り、二十一節以上の戦艦なく、舊式戦艦の如きは汽罐を取替へたるにも拘らず、二十節以上を出すことは出来なかつた。然るに日本側では其戦艦の中五隻は二十三節、二隻は二十二節で、殊に日本の有する五隻の巡洋戦艦に對しては米國は速力と砲力とに於て之に匹敵する何物も持たなかつた。されば日本の主力艦隊は例へば隻數と砲數に於て米國に劣るも、其高速力は以て戰術上に頗る重要な利益を齎らすことは確かである。其他の艦種に就ては兩軍の勢力は略ほ匹敵して居た、特に日本の驅逐艦は一般に米國のものよりも大型にして優速、且砲力も大であるから、數の上の不足を補ふて尙餘りがある。

(註一) 此時ユータとアトカントは本國の工廠で修理中であつたので艦隊には加はつて居なかつた。



茲に注意すべきは米國の主力艦は新艦の建造に依て何等増勢されなかつた一事である。開戦當時設計された四隻の巡洋戰艦（各々五萬二千噸）は日本が主力艦の新建造を躊躇したと同じ理由で工程遅々として進まず、従て此時には未だ進水さへ了してなかつた。軍艦の建造能力は主として目前の必要に應ぜんが爲めに小型艦に向けられ、此際建造されたもので現在就役せるものは頗る多數に上つて居る。戦争中の或時期に於て日本の戰艦——扶桑、山城、伊勢日向——は其有する十四吋砲十二門を十六吋砲八門に改装したとの報道があつた爲に、米國側でも之に劣らざらんとして従來搭載して居る物よりも口径一層大なる主砲を換装せんとする問題を頗る眞剣に考へた。多くの士官は此報道を以て信憑すべきものとしたが、此等は技術上の困難を度外視せるので、ミユラー、ハーバーの兩提督は斷乎として之に反對し、爲に六隻の戰艦に口径一層大なる主砲を換装する危険なる實驗は遂に行はれなかつた（註二）

（註二） 艦の世界大戦中英國大艦隊を指揮して居たジェロークー大將は一時獨逸海軍が其戰艦の

十二吋砲を十四吋砲に取替へたとの同様の風説をば、技術上不可能とは知りつゝも誤

信したことがある。云ふ迄もなく此の噂は後に至り事實無根であつたことが確められ

た。

抑も乗員の無形的術力は有形的兵力よりも重要なものであるが、之を知ることは不可能なるも、此點に就ては兩軍の術力は恐らく相伯仲せるものであらふ。米國の兵員は過去十八ヶ月間の訓練に依て著しく其能率を向上し、所謂「新兵」の割合は非常に少くなつた。實に米國海軍の教育法は日本ほど嚴格でないが、さりとて優良な結果を示して居た。士官に就て兩軍の著しき差違は米軍の上長官の平均年齢が日本の者よりも遙に上だと云ふことである。米國の艦長連には數名の老年者も在つたが、日本艦長の多くは三十代で、司令官の數名は漸く四十を越したばかりである。

日本は幾度か敗戦を繰返したる後、今や演ぜられんとする曠古の大海戰



に最後の戦を試みんとしつゝあるが、然も其將卒の士氣は何等衰へたる徴候は無かつた。否之に反して有ゆる證據は其反對なるを示して居た。實際日本人を識る者は、日本の海軍々人は一般に戦ひを熱望し、勝利を確信して居ると主張するが、戦場に於ける日本艦隊の行動は實際には此主張を裏切つて居た。米國の多くの批評家が一般に認めて居るように、日本にして若しも尙一隊の戦艦隊を持て居たならば、勝敗の結果は恐らく全く異つたかも知れない。日本人は大膽にして熟練なる海軍々人が爲し得る總てを盡した、彼等は黄海、日本海々戦に於て日本海軍を建設した人々の後繼者たる名譽を辱めなかつた。然り此ヤツプ島沖の大海戦は之を如何なる點より觀るも、兩國の戦士等が愛國の誇を以て長へに回想すべき歴史的大事件である。

## 第十九章 米軍のヤツプ島擬襲

日米兩艦隊各々決戦を準備す——米軍のヤツプ島擬襲——日本主力艦隊ヤツプに向ひ馬尼刺を出發す——日本艦隊の編制——日軍敵の欺計に陥り決戦の已む可らざるを知る

### 一、米軍のヤツプ島擬襲

今や米國海軍高級司令部の取るべき途は、周到なる作戰計畫の下に最後の決定的行動を爲すことのみとなつた、若し此計畫にして成功せんか、米軍は日本の主力艦隊を全滅せしむるか、又は之を戦闘不能の状態に陥れて確信を以て之を戦域より驅逐することが出来る。勿論之を驅逐し得たりとするも之を以て戦争は直に終結するものに非るも、遠からざる内に之を終結せしむるの手段となるは明かである。然るに日本の主力艦隊は今や馬尼刺にあること確實なる以上右の目的を達せんが爲めには一刻の猶豫



も許されなかつた。平賀提督麾下の日本艦隊が同地に在るのは、未だ米軍に占領されざる南洋群島を敵手に委せんよりも寧ろ艦隊戦闘を爲さんとするの決意を物語るものと考へられた。茲に於てか日本艦隊を誘出撃破するの策が講ぜられ、之が爲にアンガウルの北東約三百哩に在るヤップ島へ遠征軍を派遣することゝなつた。

此作戦行動は多少の危険を伴ふも今は之を斷行するに躊躇するを許さない。日本艦隊が馬尼刺到着の翌月、米軍は全力を盡して總ての根據地の防禦を堅めた。アンガウルは比律賓よりする飛行機の行動半徑内に在るので、遠征軍用の運送船は敵に發見せらるゝの惧比較的の小なるトラックに集合する様命ぜられた。而して茲にも亦例の四船艦隊が最も重要な任務を擔ふことゝなつたが、這回は一層本當らしく見せかくる爲に、四船艦隊中には眞の戦艦フロリダが加へられ、又需にグワム島の舞臺に参加した十二隻の貨物船も運送船に見せかけて使用せらるゝことゝなつた。

此の日本艦隊誘出計畫の概要は次の通りである。即ち如上の混成艦隊は巡洋艦の一隊數個の掩護驅逐隊を従へて十一月十六日トラックよりアンガウルに到着する。途上若し日本の飛行機や潜水艦に發見せらるゝも掩護艦艇あるが爲に損害を蒙るの恐れはない、否寧ろ其發見さるゝは望む所である。其二十四時間後には遠征軍を乗せたる運送船隊はヤップに向て出發し、此運送船隊は只だ該島に接近するばかりでなく、恰も上陸せんとするものゝ如くに見せかける。此際フロリダは其十二吋砲を以て港を砲撃し、其隨伴せる質の戦艦よりも輕砲を發射する。日本人がヤップ島に防禦を施して居ることは知られて居るので、若し敵が應戦するならば四船戦艦の一隻は撃沈された風を装ふも、眞のフロリダのみは敵の砲火に暴露することを禁ぜられた。斯くて數時間擬攻撃を行ひ、機を見て三隻の運送船は恰も陸兵を上陸させる風を装ふて港に接近する。此等の運送船は敵の猛射を蒙り、且撃沈さるゝを豫期せねばならぬから、其乗員は特に決死隊を以



て之に乗組ませる。此ヤツプ島攻撃の報は左馬尼刺の日本艦隊司令部に迅速に傳へらるゝに違ひない、何となればヤツプには強力なる無線電信所があるからだ。勿論此無線電信所は必要なればアンガウルよりの飛行隊で容易に之を破壊し得るも、米軍は日本人が速に米軍の行動を馬尼刺に傳へんが爲に特更に之を妨害せないことにする。更に亦此遠征軍が途中で日本の哨艦に發見報告せらるゝことも有り得べきことである。以上の報告に接せば日本の主力艦隊は全速力を以てヤツプの救助に來るに違ひない。勿論日本人も之を欺計と思ふかも知れないが、之を確かむべき方法が無いので所詮は危険を冒して來攻するものと思はるゝ。又若し日本の司令長官が豫期せられ得るが如く如何なる犠牲を拂つても敵が新領土を占領せんとするを防止すべき嚴命を受けて居るものとすれば、ヤツプ島が脅威せられんとするの報に接するや否や、其眞偽を確むるの餘裕もなく、恰もグワムの場合と同様急速ヤツプに向ふに違ひない。ヤツプは馬尼刺から

千百六十哩の距離にあるのである。

茲に於て日本艦隊の速力を十八節とすればヤツプ島へは六十五時間にして達するものと考へられた。勿論平賀大將は全速力を以て急航し來るかも知れない、斯る場合には之れよりも十時間早く、二十日の午後五時には到着するのである。更に又提督は右の警報を受取つた時、根據地を離れて洋上を遊弋して居るかも知れない、蓋し偵察に任ぜる數隻の米國潜水艦は、日本艦隊馬尼刺到着の第一週目に、既に同艦隊が洋上に在つたことを認め、た事實もあるから、之も考慮外に置くことは出來ない。

此等諸事情の下に在ては豫め行動豫定表を整然と定めて置くわけに行かないので、最善の方法は危機一髪の際米國の主力艦隊が適時に戰場に出現し得る様其準備を爲すにある。然るに幸にもそれは困難でなかつた。之より嚮きテンブルトン提督は十一月十五日を以て、トラックを出港し、アンガウルに向ふべき訓令を受けて居た。提督麾下の艦隊中驅逐隊と其他の



者はアンガウルに入港して迅速に燃料を補充するも、戦艦隊は島の百哩以内、内、近づくことなく、他の驅逐隊の掩護の下に海上に止まり、以て小艦の歸投を待合せ、小艦歸投せば全艦隊はヤツプの東方七十哩の特定地點に向ふべく、此特定地點への到着は恰も平賀提督の日本艦隊がヤツプ島到着と符合する様に計畫された。勿論敵艦隊到着の迅速に就ては充分の餘裕がとつてあつたのだ。將又速に日本艦隊の來航を報ぜんには、ヤツプの西方百五十哩の南北線上に二十隻以上の米國潜水艦より成る哨線を配した。日本艦隊は此哨線の何處かを通過せねばならぬし、又各潜水艦は水中聽音機を有するので、晝夜を問はず其發見を免れて通過し得ることは殆んど不可能である。更に亦此等の潜水艦には嚴命を下してヤツプ島に向ふ東方航路を取る敵艦は一切之を攻撃せず、戰を終へて歸還する敵を攻撃する様命ぜられた。

斯くて日本艦隊來航の報に接せば、テンプルトン艦隊は全速を以て北航

しヤツプとウルシー島間を通過して敵艦の位置と針路に關する確報を得る迄北西方に航し、以て出來得べくんば兩艦隊の戰鬪を交ふる前に、米艦隊は日本艦隊と比律賓根據地との中間に位置して、敵の退路を遮断せんとする。之と同時にヤツプ島沖にある四船艦隊は無線電信を以てする司令長官の退却命令が到着する迄は其位置に留ることゝした。若し此四船艦隊の退却早きに失すれば、平賀大將をしてヤツプに絡まる眼前の危機は既に消滅したものと信ぜしめて、東方への航行を中止せしむることゝなるから、日本艦隊がヤツプに到着する一二時間前迄は右の信號を發せないこととした。此等の四船艦隊や運送船は其使命を了れば驅逐隊掩護の下にアンガウルに歸航すべく、又真物の戦艦フロリダだけは、時の状況に應じて機宜の處置を取り、出來得べくんばヤツプ島の北方を通過する主隊に合することゝした。以上は實に日本艦隊を其根據地を距る遠隔の海上に誘出して之に決戰を強ひ以て終局の成果を收めんとする米艦隊の配備であつた。



讀者は記憶するならん、竊に米國海軍艦隊のグワム島方面に於ける伴動に當り、日本人は米國の二戰艦を太平洋の底深く沈め得たりと誤信せしことを。加ふるに日本人は數隻の主力艦が米國の工廠に於て修理中であつた事實を知らないとするも、結局一又は二隻は修理中で、直に戰場に使用するを得ないことは知つて居たに違ひない。斯くて日本人の眼にはテンブルトン提督麾下の米國主力艦隊は多くも十四隻を出でず、否恐らく十三隻位であると推測したものと思はるゝが、實際に於ては十六隻であつた。之に對して日本側は十二隻を有し、其の各艦は何れも米艦より優速であるから、狀勢已に有利なりと見れば、決戦を爲さんとするの意圖を持つ事は勿論である。一方米軍側に於ても、今や幕幕を徹せんとする這次作戰の困難なる性質は之を輕視せなかつた。敵に戰を強ふることは爲すべき一事に相違なきも、之と遭遇して撃破することは別の問題である。米軍側は大艦と砲數とに於ては日本軍と略ほ伯仲して居るから、後者の優速は之を巧みに

利用すれば戰術上の利益を與へて勝利の鍵を握り得るとも限らない實に日本の指揮官は之を利用して挑戰避戰の何れをも自由に選擇するを得るのである。されば之を米艦隊の側より見れば、敵に決勝的打撃を與へんが爲には、戰鬪開始の瞬間から精確にして壓倒的なる砲撃を加ふるを緊要とした。

此等の諸點は永き以前より米國海軍當局の考慮せる所であつたので、全力を盡して艦隊の射術を改良した。開戰數年前より砲煩射撃演習は屢々行はれ、特に遠距離射撃に意を注ひだ。又八隻の主力艦の主砲の仰角は十六度より二十五度に増大されて、其有效距離をば四千乃至五千碼増加した。此仰角の變更は既に千九百二十三年に提議されたるも、對外政策上の理由により開戰の當時まで延期されて居たのである。然るに一時に數隻の仰角改造を行ふ時は、急に艦隊の戰鬪力を弱める事ゝなるので、順次に一隻づゝ行ふことゝなり、爲に全部の工事を了へるには約十八ヶ月を費したが、然



も尙仰角を改めぬ艦が五隻残つて居た。又艦隊の射撃術を常に高度に保持せんが爲には、屢々行はれる射撃演習の爲めに靡耗した砲を新砲と取替へた。戦争の進行につきて經驗に依て生じた諸種の改良は砲火指揮装置の上にも行はれた、一言にして云へば砲術の改良上尙も人智の及ぶ限りは盡されたのだ。素より日本海軍に於ても此方面の改良に意を注いだのは勿論である。然しながら例令兩軍の砲術略は相伯仲せりとするも、米軍側の主砲五十六門の優越は形勢を一變せしむるに足るものであらふ。況んや米軍は速力と飛行機搭載數に於ては、比類なき航空母艦レキシントン及サラトガの二隻を有するに於てをや。

斯くて必要な準備は既に出来上つたので、ヤップ遠征軍はフロリダに坐乗せるハツバード少將之を指揮し、十一月十七日午前七時を以てアンガウルを出發した。時に其東方百裡にあるテンプルトン提督は、ヤップ附近の指定地點に至り、出撃の好機を報ずる電報を待たんが爲め同地點へと航

進しつゝあつた。トラツクよりの遠征軍は航行未だ幾許ならざるに敵の活動を目のあたりに見た、即ち日本の一潜水艦は米軍の嚮導艦に數發の魚雷を發射したが幸に命中せず、潜水艦は驅逐隊の爲に驅逐せられた。然るに其二十分後には米艦の無線電信掛は敵の暗號電報を傍受した、これ明かに偵察に任ぜる日本の潜水艦が其視察せる所を馬尼刺の平賀提督に報告せるものである。更に其二時間後にはミンダナオより來れるものと思はるゝ日本の大型飛行機二臺が現はれたが爆彈投下は行はなかつた。今や米國の遠征艦隊は日本軍の發見する所となつたこと疑ひないので、日本艦隊は間もなくヤップへ向け航行するものと推測された。

ハツバード少將麾下の遠征艦隊は十四節の速力を以て航進し、潜伏せる敵潜水艦の好餌とならざらんが爲めには、蛇航運動をなしつゝ北東に向て航進し、十一月十八日の早朝遂にヤップ島の島影を認めた。同艦隊は直に日本飛行機の襲撃を受けたが、襲撃距離に入るに先ち、アラスカよりの飛行



機で之を撃撃した。少將は半數の驅逐隊の護衛の下に運送船隊を後方に残しつつ、殘餘の艦隊を率ひ、戦闘陣形を制りて徐々港を通過し、一萬八千碼の射距離に於て十二吋砲の發射を始めた。然るに敵は應射しなかつたので更に、一萬四千碼まで接近し、四船の六吋砲も砲戦に加つた。

此時陸上砲臺は徐々に精確なる射撃を開始した、水烟の高さより判断すれば七時か八吋砲と思はれた。偶ま其一弾はフロリダの極近くに落ちたので、ハツバード提督は轉針して距離を遠けた、これ其受けたる訓令に依り同艦を危険に瀕せしめざる爲である。同艦の轉針するや後續艦たる四船アリゾナは烟突に敵弾を受けた。米軍側は飛行機を使用して彈着觀測をなさしめたが、其一機は陸上砲臺の位置を信號したので、フロリダは之を沈黙せしめんと努力したけれど、彈藥節約の必要上有效なる砲撃を持續することは出来なかつた。陸上砲臺は二發程同艦の彈丸を受け、終日とぎれとぎれに發射を繼續して四船に三發の彈丸を命中せしめた。茲に於てか此

四船の一隻は豫定の如く著しく傾斜を装ひつゝ、外海へと引揚けた。思ふに此の更に一隻の戦艦を撃破したことは必ずや迅速に平賀提督の下に傳へられたるべく、斯くて提督は此快報に接して勝利を確信したことであらふ。

午後六時三隻の所謂『運送船』は陸岸に接近し、恰も陸軍兵上陸の爲め端舟を卸さんとしつゝあるかを装ひ、フロリダと其僚艦は掩護の爲め猛烈に發射した。然るに此時これ迄沈黙して居た陸上にある數門の輕砲は著しく精確なる齊射彈を送つたので、三隻の『運送船』が引揚げる前には何れも多少の損害を蒙り、ローノークの如きは所々に砲彈の孔を生じ且多數の死傷者を出した。右の野砲が若し重砲であつたならば——何れも十二吋砲であつた——同船は其場に撃沈を免れなかつたであらふ。斯くて同船は生存せる決死隊を救助するの暇もなく、其夜遂に海底に沈んだ。

夜暗は遂に來た、思ふにヤップ島の日本守備軍は必ずや晝戰の勝利を祝



し合つたに違ひない。彼等は終日米艦隊の半數を相手として戦ひ、一隻以上の敵艦に重大なる損害を與へ、敵の上陸計畫を粉塵したと信したので。然しながら更に一步を進めて考ふる時は、米軍攻撃力の餘りに微弱なるに驚き、且陸上砲臺の未だ沈黙せざるに早くも運送船を敵の射程内に突入せしめた米軍の淺慮をば一層の驚異としたるに違ひない。然るに之をハット提督側より云へば、其日の戦闘行動は遺憾なく行はれて何等不滿を感すべき理由は無い。提督は夜間該島の南三十哩の所にあつたが、十九日の未明に至り、再びヤツプ島に接近し來り、前日の行動を繰返した、但し這回射撃は繼續され、日本の飛行機も亦來つて攻撃を試みた、然るに此等の飛行機は少數であつたので、米軍の空中哨線を突破するを得ず、其爆彈は一も功を奏せなかつた。

午後四時日本の一潜水艦は魚雷を以て二度四船ユータを雷撃した、此等

の四船は特別の浮揚装置を付して浮んで居るものである。夜に入るや彈藥の缺乏によるか又は砲の使用が出来ないのか、陸上の主なる砲臺は砲火を中止した。茲に於て再び上陸の伴動を行はんが爲め四隻の所謂『運送船』は陸岸に近づいたが、巧みに隠蔽された野砲より猛射を受けた。ハット提督は此等の勇敢なる決死隊を敵彈に暴露するは、徒らに死傷者を増すに過ぎないので、遂に彈着距離外に退却せんことを命じた、然も彼等はこれだけでも既に其使命を果したのだ。

米國の遠征艦隊がアンガウルを出發してより既に六十時間を経過した。此遠征艦隊の出動は日本の哨艦より逸早く平賀提督の下に報ぜられて居ると思はるので、平賀提督麾下の艦隊は今僅かに五六時間の距離に近づいて居るかも知れない、されば今は悠々と敵の來攻を待構へて居る場合でない。他の一方に於てはヤツプ島の無事が報ぜられて、日本艦隊の出動を中止せしむることの無ひ様に、該島の守備軍に大打撃を與へることも願



る重要である。且又ハツバード少将も擬襲を中止する前、司令長官より指令を仰ぐべき上長の命令を無視する人でなかつた。

然るに午後九時少し過ぎに至り、偶も提督が砲撃を中止して夜間の配備を爲しつゝある時、待ちに待つたテンブルトン提督よりの命令は来た、曰くフロリダは六隻の驅逐艦を従へ、全速力を以て主隊に合すべしと、時に主隊は日本艦隊の進路を遮断せんとしてヤップとウルシー島間を通過せんとしつゝあつた。又四船艦隊や運送船は潜伏せる日本潜水艦の危害を避けんが爲め、東方に航してアンガウル島に歸還すべく、殘餘の驅逐隊は之を掩護すべしと命ぜられた。茲に於て午後九時十五分フロリダは僚艦と分れ、十九節の速力を以て集合地點に向ひ、一方四船艦隊は最善を益してアンガウルに歸ることゝなつた。斯くてフロリダは正午後間もなく主隊に合したので、テンブルトン提督麾下の戦艦は今十六隻のものが全部揃ふことゝなつた。

## 二、日本主力艦隊の出勤

以上の事件が進行しつゝある間に日本軍が何を爲しつゝありしかを知らんが爲には、中橋氏著書の一節を左に引用するを優れるとする、該書は日本の公刊海戦史よりも一層明瞭、且條理一貫せるものである。

(註) 中橋六郎氏著『日米戦争に於ける日本艦隊』大正二十二年東京政教社發行

十一月十七日の朝、ペリウ群島の北方を哨戒しつゝあつた潜水艦呂六十號は敵の大艦隊が運送船隊を伴ひ北々東に航進しつゝあるを報じた。此潜水艦は魚雷攻撃を試みたが命中せず、却て敵驅逐隊の爲に追廻はされたので、米艦隊の後方六深の所に浮出し、敵の動向を注視したが、敵は依然前針路を保つた。之に依て推斷するにヤップの攻略が將に始まらんとして居ることが判つた。

然しながら敵は我艦隊の目前に於て斯る無事なる遠征を取つてするものであらふか？ 之には我艦隊を保護に掛けんとする何等かの深き企圖が潜んで居るのでは無うか？ 余は斯種の疑念



が我が司令長官や幕僚の頭に浮んだことを知つて居るが、然し彼等には最早行動の自由を與へられてなかつた、他なし最高軍事會議は一の命令を發して『苟もヤツプ又はグツムが脅威されんとする徴候にあらば、全力を以て之を撃退せよ』と命じたからである。勿論平賀提督は敵行動の深意につき可成り判然感する所はあつたので、假りに自己の意志に従て自由に行動し得るものとしたならば、此際は艦隊の出動を躊躇したに違ひない。實に敵は豫期されたる如く日本艦隊を誘出して決戦を強ひんとする手段を取りつゝあるのだ。然も我艦隊が北より南に移動したことは、若し新領土の襲はるゝ様なことがあれば、決戦を辭せずとの決心を敵に傳へて居るのである。斯く考へ來れば敵の採るべき行動は明かである、即ち敵は豫め其主力艦隊を或る適當の位地に配備し、敵に有利なる状況の下に我に決戦を強ひんとして、我が海外の島嶼に襲撃を試みんとするのである。

此等は素より平賀大將と其幕僚等の明知する所であつた。然も其行動の自由は最早與へられなかつたのだ。

(註) 米國の海軍戰略家等は情報に依つて得たる斷片的事實より、其後に至て明白となりしが如く、敵の企圖を精確に看破した一の結論を下して、米軍の作戰計畫を策定したが、此の米

國海軍戰略家等の結論が茲に述ぶる日本側の記述と殆んど符合せるは興味あることである。大將はヤツプ提督の報に接するや今は東京より命令を乞ふの時間もなく、又之を乞はんとするの考へも無つた。由來海軍戰略の諸問題に關して陸軍側が容喙することは無益である、然るに日本の陸軍主腦部はこれ迄海軍の遂行に容喙し、今後も尙之を持續せんとしつゝあるが、彼等は日米戦争には海上權の爭奪如何が勝敗の關鍵を握るので、海軍が本位であることを無視したのだ。勿論一部の士官等は米軍の謀略を見抜ひだが、然し彼等とても最後の決戦を挑むことを辭せなかつた。彼等は敵が日本軍の攻撃により、既に數隻の戦艦を喪失せるを確信し——嗚呼！此信念は誤つて居た——進んで、否熱烈に之と戦はんことを欲して居たのだ。茲に於てか艦隊は直に出港準備を整へ、待ちに待つた命令に依つて汽力を揚げた。此時第一巡洋艦隊と數隻の驅逐艦は埠頭に於て給油しつゝあつたが、其終了を俟つ餘裕はないので、補給終り次第艦隊へ來投せんことを命ぜられた。又掃海隊は出入路を掃海し終つたことを報じたので、茲に全艦隊は各戦艦毎に出動し、其先頭隊がコレキドルを通過したのは實に午前十時三十分であつた。

此の壯大なる艦隊が日章旗を翻へしつゝ敵と會戦せんが爲めに出港した時の光景は實に一大



壯觀を呈した。先頭に航進するものは二個の艦隊と上原少將麾下の第四巡洋艦隊。妙高、足柄、米澤、殿島)で、碧々と湛へた馬尼刺灣の水をかき分けつゝ進んだ。之に續くは數隻の航空母艦で、其廣き甲板には多くの飛行機が搭載され、其間を縫ふて青旗を着けた飛行士や技手の姿も見へた。次には和田中將の率ふる巡洋艦隊が巨艦赤城を先頭として、之より稍々小型なるも然も侮る可らざる金剛、比叡、榛名、霧島を従へ、威風堂々として續き、此等の巨艦に引續いて司令長官旗艦(平賀大將座乗)長門を先頭とする第一艦隊加賀、陸奥並に第二艦隊伊勢(清水少將旗艦)日向、共榮、山城航進し、此艦隊の後方には第二、第三、第五巡洋艦隊の十三隻が續ひた、故に之に第一巡洋艦隊を加ふれば合計二十一隻の巡洋艦が平賀大將の麾下にあるわけである。尙又馬尼刺にあつた三十三隻の潜水艦中最高速のものは艦隊に隨伴して司令長官の指示する配備につき、低速のものも亦ヤップ島に向けせられた。ヤップ島附近の哨戒に任ぜる潜水艦を除き、此等の潜水艦が適時に戦場に到着して戦闘に参加し得るやは疑問なるも、平賀提督は已むを得ずんば之をして敵の損傷艦を始末せしめ、又出来得べくんば敵艦隊の退却を阻止せしめんとした。

我艦隊がコレキドルの正横に差寛るや、同島の守兵は整列して一齊に「高旗」を掲げし、

其聲海を越へて我等の耳衆に傳つた。我等も亦之に答へつゝそこを通過した。全艦隊は馬尼刺灣を出づるや直に航行席列を作つた、即ち大艦は三縱列となり、航空母艦を先頭に、而して巡洋艦隊と艦隊は大艦の周圍を取巻いて完全なるスクリーンを形成した。時に艦隊速度は十八節であつたが、總ての汽鐘は何れも蒸気を蓄へて居るので、命令一下直に速度を増すことが出来る。

仰げば碧々たる蒼穹には太陽傑として輝きつゝ一點の雲翳もない。視界は特に良好なるも太陽の反射の爲に測距は困難である。眼を放てば大小各種の艦船軸煙相啣み、數多の煙突より煙が吐き出され、鏡の如き海上を滑り行く各艦の艦尾には眞白の波紋が殘されて居る。總ての筒は視認によるものゝ外禁ぜられた、蓋し近距離の無線電信も敵の哨艦に我所在を暴露するからである。馬日我等は味方の哨艦より六回の報告を受け、何れも敵はヤップ島に向け航進しつつあるを報じた。正子迄に我等は二百哩を航破したが、殘す所尙九百五十哩である。されば艦隊が戦場に進んだ時には燃料は既に半ばを消費するも、勝利を得れば大艦より給油して歸港するを得るから、之は問題とするに足らない。其夜は異常なく過ぎ行き、敵の潜水艦飛行機も其影を示さなかつた、唯だ極めて近距離にある不明の敵艦より、無線電信が數回發信せら



れたのを傍受した。

十八日午前十時我艦隊はヤップ島より、敵の戦艦隊現はれ、南西に航行しつつあるの報に接した。次で十時四十五分第二の信號は来た、曰く「敵戦艦十隻我等を砲撃しつつあり、運送船の一隊は彈着距離外に位置す、目下砲臺は戦闘中」と。這回は敵の攻撃は眞物と思はれた、何となれば艦にグレムムの擬装を行つた時には、敵は實際上該島の數百呎以外に在つて之に近接しなかつたのに、此のヤップ島の場合に於ては陸上砲臺を砲撃し始めたからである。これ即ち敵は上陸の意志を有するものでなくて何であらふ。我等は次の報告を待ち詫びた、何となれば若し我が守備軍にして速に撃破され、敵が上陸に成功するならば、之を掩護せる戦艦隊は我艦隊の到着以前に引揚ぐるの恐れがあるからだ。茲を以て司令長官は針路を少しく南東に變じ、敵若しヘリユク群島方面に退却せば之を遮断せんとした。然るに次で接受した電報では、ヤップの守備軍は頑強に抵抗せるも、敵の攻撃は不思議にも猛烈でないことを明かにした。

午後五時我等は更に守備軍が安全にして、米軍は主として副砲を以て射撃し、大口徑砲彈の發射は稀なるの報に接した。其後四時間を経て守備軍は必死に敵の上陸を妨げ、三隻の運送船は大なる損害を受けて彈着距離外に退却せるの報告を得た。午後十時に至り更に他の報告は來

た、曰く「敵影を見ず」と。斯くて、我等は一夜中ヤップ島の勇敢なる戦友と通信を持續し、敵が攻撃を再起せるの報告を息をもつかずに待ちあぐんだ。何となれば敵若し眞に同島の攻略を断念せば、主力艦隊決戦の機會は消滅するからである。然るに翌午前八時に至り我等は始めて胸擁を下した、蓋し敵の戦艦は再び島前に現はれ、砲撃を再興したとの報告に接したからである。併しながら我等は共に再び疑問を起さざるを得なかつた、我艦隊が全遠力を以て東方に進出しつつあるを知りつつ、敵は何が故にこの不合理なる攻撃を固執するか？。彼等は曠て我全艦隊の攻撃を受けねばならぬのに、何が故に斯る無益なる企畫に彈藥を浪費するか？。と。斯く考へながら平賀大將は敵攻撃の眞意に疑念を懐きつゝも進航を續けた、何となれば若し之を中止して萬一ヤップ島が敵手に落つる様なことがあれば辯解の辭が無ひからである。實に我々は敵の攻撃を眞實として之に應ずるの外はなかつた、敵は既に一步先んじて居るから、我等は本國最高軍事會議の誤算通りに斯くするより外は無ひのだ。唯だ余は茲に我艦隊の幕僚以外には、此の敵の特別なる行動を以て欺瞞策だと考へた者は稀であつたことを告白せねばならぬ。由來米人の智能を蔑視した多數の我士官等は、無益ではあるが米人だからこれ位のことには有勝ちの事であると信じて居た。日本の軍人が此の智略上の優越を過信したのが少らず敗因を



なしたことは一々之を指摘し得るも、今となつては之を改むることは出来ない。

ヤップ島からの電報は頻々として第二日目の砲撃の開始を報じ、艦隊よりの砲火は猛烈ではないが、既に本防禦線は撃破されたことが判つた。形勢漸の如くなるを以て我々は其日の夕刻には敵軍の上陸を豫期したが、午後七時に至り四隻の運送船は守備軍の野砲を以て撃退したとの報告があつた。されば敵は二日の間守備薄弱な島に對して生温ひ攻撃を断行したわけである。

午後九時又々例の電報は来た、曰く「敵は退却しつゝあり、砲臺修理中なるも使用に堪ふる砲は二門のみ」と。此時我主力艦隊はヤップ島を距る三百六十哩の所に達し、此の速力を以てすれば翌日の午後五時には同島へ着く筈である。若し敵が翌朝も引續き攻撃を續行するならば我艦隊に攻撃せらるゝを免れない、何となれば我艦隊は更に針路を南に變じて敵の退路を遮断し得るからである。されば吾人は萬難を排して夜中も航進を續けねばならぬ。

翌未明に至りヤップ島から更に電報は来た、曰く最早敵影を見ずと。此電報に依れば敵は攻撃を断念した様であるが、さりとて再び現はれ來つて無効なる砲撃を始めるかも知れない。然るに其の後數時間を経過するも斯る報道が來ないので、平賀提督は敵は我艦隊の來襲を嗅ぎつけ、全くヤップの攻撃を断念して其根據地たるアンガウルか、又はそれよりも一層あり得べきトラ

ックへ歸港しつゝあるものと断定した。此断定は午後二時に至り確定的のものとなつた、實に此時偵察の爲め艦隊の前方に派遣された我二臺の飛行機は、ヤップ島の東南東約二百哩に九隻の米國戰艦と多數の運送船とが低速を以て南東に航進しつゝあるを報じたからである。即ち敵は這回も亦我艦隊の來襲を恐れて退却したものと想はれた。

(註)此米國艦隊とはアンガウルに歸航中の砲艦隊で、訓令により東方へ迂回して歸航しつゝあつた。

茲に於てか我等は不可解なる二つの問題を起さざるを得なかつた、曰く、ヤップを砲撃せる米國の戦艦は十隻であつたのに九隻に減じたのは如何なる理由であるか？ 曰く、然らば殘餘の米艦隊は何れに在るか？ と。第一の疑問に對しては守備軍砲火の犠牲となつたか、又は我が哨戒潜水艦の爲に雷沈せられたものと考ふるの外はない。第二の疑問に就ては米艦隊の殘部はトラックか又は其附近に在るものと判断された。何れにせよ敵艦隊は我が手の及ばざる遠距離に在るので、此際一劃も速に決すべきは我艦隊の次の行動を決定することである。時に我艦隊はヤップを距る僅に六十哩の所にあつたので、司令長官は同島に向ひ、此地に於て小艦艇に燃料の補給を行ふことに決定し、それ迄には新たな情報を得て爾後の行動を決することが出来



るであらふと考へた。茲に於てか午後二時三十分速力を十六節に減じつゝ、ヤップへ向ひ、同時に敵艦の飛行機を飛ばしてヘリユウ群島及其附近の海上を偵察せしめた。斯くて形勢は茲に再び迷宮に入り、敵は其他の事に就ては兎も角として、此踏碇の妙技に至つては實に入神の感があつたので、斯る無益の「隠れんぼ」は何時果つると思はれなかつた。

偶も此時である、突如として驚天動地の警報來つて静寂を破つた、曰く、敵艦隊見ゆーと。然もそれは我等の想像せし如く島の東方數百哩の所に非ずして、我が正西僅に百哩の所であるのだ。我等は始めには哨戒潜水艦呂五十七號より發信された此の電報をば明かに有り得べからざる事として一笑に付した。然るに間もなく他の潜水艦が「敵の大艦隊見ゆー」と時報し、然も敵の位置と針路とが呂五十七號のもの一致せるを知るに及んで茲に始めて艦の判断の輕卒なりしを覺つた。茲に於て我司令長官は直に快速の飛行機に命じて指示の地點に向はしめ、敵分隊には此等は航空母艦の甲板上より飛翔した。同時に艦隊は旗信により左舷に逐次八點の變針を行ひ、其針路を正東より正北に轉じた。

此命令と共に全艦隊には緊張の氣が漲つた、知覺よりも寧ろ本能的に決戦の機が刻々に迫りつゝあるを知つたのだ。余の乗艦長門では靜かに合戦準備を整へられ、斯て其半時間後に全艦

隊の戦闘準備が成つた時、艦隊の針路は再び左舷に六點變針されて敵に向ひ直進し、同時に旗艦は「戦闘」の信號を信した。併しながら斯る昂奮を抑へつゝも何人も次の一問を自問せざるを得ない、曰く、「一體之はどう云ふわけであるか？ 西に米國の大艦隊があるのに東にもあると云ふことが有り得るであらふか？ 敵は全然新たな艦隊を建造したのであらふか？ 若し果して然りとすると、之を合して無敵艦隊とする代りに何故に之を二分するか？」と。

中橋氏は此等の疑問に對して其得意の筆を揮ひ、數頁に亘りて之を論じて居るが、茲には之を引用するを避けて、次に米國艦隊の行動に移つて見よう。



## 第二十章 ヤツブ島沖の大海戦

米國艦隊の編制——兩軍の空中戦——ヤツブ島沖の大海戦——日本艦隊の惨敗——兩軍の損害

### 一、米國艦隊の編制

テンブルトン提督麾下の米國艦隊がトラツク島を出發せる時の艦隊編制は實に左の如きものであつた。

- 司令長官旗艦 ウニストバリーシニヤ(テンブルトン大將座乗)
- 第一戦隊 ウエストバリーシニヤ、コロラド、メリーランド、
- 第二戦隊 カリフォルニヤ(司令官マクアーサー中將旗艦) テンネツシー、アイダホ、ミシシッピ、
- 第三戦隊 ニューメキシコ、ニューヨーク、オクラホマ、ネバダ、
- 第四戦隊 ペンシルバニア、アリゾナ、テキサス、フロリダ、ワイオミング、

- 第一巡洋戦隊 ハートフォード、オリンピヤ、コロンバス、アトランタ、
- 第三巡洋戦隊 アルバニー、カンサスシティ、ロスアンゼルス、ボートランド、
- 第四巡洋戦隊 トロイ、グリーブランド、デンバー、ウキルミントン、
- 第五巡洋戦隊 シンシナチー、リチモンド、ラレー、デトロイト、
- 第七巡洋戦隊 オマハ、メンフィス、モルウォーキー、
- 第八巡洋戦隊 ビツツバーク、ヒューロン、セントルイス、
- 驅逐隊 六隊、驅逐艦總數百十五隻
- 航空隊 第一、第二、第三航空隊、航空母艦レキシントン、サラトガ、アラスカ、モンターク、カーチス、飛行機總數百九十機
- 潜水戦隊 二隊(各隊は二十一節のV級潜水艦五隻より成る)

(註一) 第一、第三、第四巡洋戦隊は何れも千九百二五——六年以後建造の一萬噸級巡洋艦である。

(註二) 第八巡洋戦隊は舊式装甲巡洋艦なるも速力十九節を出すことが出来る。

(註三) カーチスは千九百三十一年三月のルーバン島沖海戦にて沈没せる霧のカーチスの名



を獲へるもの。

這次の出動には米艦隊は特務艦船を伴はなかつた、これその低速なる爲め主隊が全速力を以て航行する時は之に随伴するを得ないからである。只だ三十隻以上の特務艦船(大部は給炭給油工作船である)は特に作戦局の指令により此時トラックよりアンガウルに向ひ航行しつゝあつた。蓋しヤップ島附近の海面は豫想された決戦戦場であつたので、アンガウルへ此等の特務部隊を派遣して置けば、戦闘後適時に味方艦隊に燃料の補給並に修理を爲し得るからである。

## 二、諸戦期に於ける兩軍の空中戦

十一月二十日午後三時に至り、日本の司令長官は始めて確實に、米國の全艦隊がヤップ島の西北西百六十哩に在つて、味方艦隊との距離は僅に百哩に過ぎざるを知つた。これ實に其の豫期せざりし所で、敵は我と我根據地

との間に在るのである。今や敵との決戦は免るゝを得ない何となれば我優速を以てするも敵の一翼を迂回して退却することは不可能で、我が一部は勢ひ敵との交戦を免れないからだ、況んや我驅逐隊は燃料を消費して居るので、全速力を以て航行すれば根據地へ歸投することが出来ない。とはいへ日本の司令長官は此時既に決戦の意志を固めて居たのである。

今や兩軍は四十節の合成速力を以て互に接近しつゝある。米國の戦艦隊は四列縦陣を作り、其先頭には二隊の巡洋戦隊を配し、其兩側及後方にも各々一隊の巡洋戦隊を配した。兩軍の偵察飛行隊は間もなく觸接し、相互に敵の行動を妨んとしたが、何れも其効なく、敵の情況を一々其司令長官に報告した。斯くて茲に豫期された大海戦は猛烈なる空中戦を以て其幕を切下したのであつた。

テンブルトン大將は敵の速力我に優るので、戦闘の始めに先づ敵の大艦一二を撃破せんとした。蓋し斯くすれば平賀提督は損傷艦を放棄すること



なく、飽く迄踏止つて戦ふものと判断したからである。茲を以て午後三時二十分五十の飛行機（大部は爆弾機と魚雷機）は、第一列にある日本軍の嚮導戦艦に攻撃を集中するの命を受けてレキシントンとサラトガより飛翔した。此等の飛行機は四十分後日本艦隊を発見したので直に之を猛襲せんとしたが、突如上空を飛行中の優勢なる日本の飛行隊が降下し來り、茲に言語に絶する空中戦を演出した。

此空中戦の始めの一分間内に、約十二機は操縦の自由を失つて墜落した。日本隊は米機の投ずる爆弾に味方艦隊を委せんよりも寧ろ身を以て敵機を衝落さんとしたので、機關銃の猛烈なる彈雨中に三回衝突を試みた。それにも拘らず米機の約半数は之を突破して日本艦隊に近いたが、艦隊は直ちに猛烈なる砲火を以て之に應戦した。實に此の壯烈なる空中戦は、空の勇士等が平時廢艦を標的として試みた襲撃とは全然異つたものであつた。下方の艦隊からは砲彈の雨が絶間なく注がるゝので、其炸裂の爲に飛行

機は恰も暴風雨に遭遇した様な景況を呈した。斯くて空には鎧の破片飛び、毒瓦斯充滿するも、決死の米軍勇士等は敵艦目蒐けて突進した。恰も此時日本の飛行機六臺は疾風の如く米軍の前面を掠め去り、異様な黄色い煙の帯を播ひた。米軍の飛行士等は之を突破せんとした刹那、忽ちにして劇しき頭痛を感じた。彼等の或者は斯ることあるべきを注意した者もあつたが、毒瓦斯除けのマスクを備へ付けなかつたので、茲に不幸な目に逢つたのだ。爲に二機を除ひた全部の米軍飛行機は、此毒瓦斯の爲に襲はれて眞逆さまに海中に墜落した。

残つた二機——一は爆撃機で他は雷撃機である——も亦毒瓦斯の中を通過したが、まだよく擴らぬ前であつたので、気分は悪かつたが襲撃を続けるを得た。然るに半ば失神し、且咳が激しいので、敵の巡洋戦隊を戦艦隊と見違へたのは已むを得ない。斯くて此二機は妙高を襲撃したが、雷撃機は將に魚雷を發射せんとする際一彈を受けて破壊され、爆撃機は一彈を此巡



洋艦に命中させたけれど、これ亦直に射落されて操縦者と偵察將校のカスパーソン、マルチンの二大尉は日本の驅逐艦に救助された。此際妙高は前甲板に大なる損害を受けたが戦闘に堪へぬ程度でなかつた。以上は即ち此空中戦の戦況で、米軍側の約四十機は戦ひの犠牲となり、辛ふじて完きを得たのは僅に十二機のみであつた。

此の空中戦が行はれつゝある間に、日本側の飛行機も亦米艦隊を襲撃したが、同じく不成功に終つた。實に此等の日本飛行機はベンシルバニヤの上甲板に一孔を穿ち、テキサスの乗員八十名を毒瓦斯に依て斃したが、僅かに七機を残すの外悉く破壊されてしまつた。

### 三、主力艦隊の衝突

兩軍の決戦は空中戦よりも寧ろ他の手段に依らねばならぬことは、此緒戦期に於てさへ既に明瞭であつた。蓋し兩軍とも其飛行機の數には限り

があるので、更に有利なる機會の到來せぬ限り、斯の如く無益に飛行機を喪ふことは策の得たるものでないからである。午後四時三十分には既に兩軍の前衛たる巡洋艦隊は觸接して、茲に烈しき戦闘を交へつゝあつた。即ちブレーン少將の率ふる米軍の第一巡洋艦隊は、八隻より成る日本の大巡洋艦隊に攻撃されたが、此際若しアップルトン少將の率ふる第三巡洋艦隊が來援せなんだならば、米軍側は甚だ不利であつたに違ひない。斯くて第一巡洋艦隊中のハートフォード、オリンピヤ、ボートランドの三隻は何れも損害を受け、多數の死傷者を出したが、日本側も亦足柄は撃沈された。此際第一巡洋艦隊に向つて突進した日本の驅逐隊は多大の損害を受けて撃退された。

斯の如く前衛部隊が先づ其小手調べをなしつゝある際、兩軍の主力部隊は速に砲戦距離内にと接近しつゝあつた。時に兩艦隊の針路は約西北西で、其針路線は互に交叉しつゝあつたが、午後五時十五分彼我の距離二萬八



千碼に達するや、平賀提督は左舷に三點變針し、且速力を増した。同時に日本の巡洋戦隊は數の優勢なるに乗じて米國の巡洋戦隊を撃破せんと進んだ。と見る間に忽ち日本驅逐隊の三隊は、味方巡洋戦隊の戦線を突破して濛々たる烟幕を張りつゝ、米軍の先頭目蒐けて突進したので、上空を飛んで居た米軍の飛行機は之を見るや直に之をテンプルトン提督に報告した。此時日本艦隊は其優速を利用して敵列に丁字を畫かんとした。若し之に成功せんか、米軍の先頭隊は忽ちにして全滅の悲運に遭遇するのである。茲に於てか米軍は敵の企圖を覆へさんとして四點變針し、先頭部隊に命ずるに、日本軍の先頭に向ひ砲火を開始すべきを以てした。時に標的たる日本軍艦は之を視認するを得なかつたが、上空を飛んで居た飛行機が彈着観測に任じ、絶へず敵の位置、射距離、速力及針路を通報しつゝあつた。

午後五時二十五分コロラド先づ二聯裝砲の齊射を開始し、射彈は陸奥と思はるゝ日本先頭艦を超へて其の少しく前方に落ちた。茲に於て射距離

を修正したる後、コロラド、メリーランド、ウエストバージニアも一齊に齊射を開始し、二十四噸の巨彈が唸りを生じつゝ、敵艦目蒐けて飛行した。間もなく上空の彈着観測飛行機から無線電話は來た、曰く、「第一回齊射六百碼遠し、」第三回の齊射では「彈着宜し、」遂に第四第五回に至ては「數彈先頭艦に命中」と。茲に於て長門又は加賀と思はるゝ二番艦に分火し、第八回の齊射では「二發命中」と云ふ報に接した。

抑も齊射は射距離頗る遠大なる時は最良の射法なるも、毎分の命中率に對しては彈藥の消費を免れざる不利がある。然しながら遠距離に於て發射せる彈丸は落角大なる爲め、數發の命中彈も尙甲板上に落下すれば恐ろしき爆發力を以て艦の内部を破壊するので、偉大なる破壊力を逞ふするものである。斯様な理由により長門は僅に二彈を受けたるも前部に大損害を受けて一時戦列を脱し、陸奥は其第二砲塔に一發の十六吋砲彈命中して、該砲塔の砲を使用する能はざらしめた。之を見たる平賀提督は敵の優勢



なる射撃力に味方の損害を大ならしむるの不利を思ひ、少しく外方に變針して距離を開いたので、米艦隊も直に砲火を中止した。斯くて茲に日本軍が米軍の先頭に對して晝かんと試みた丁字運動は全く晝餅に歸したのであつた。

テンブトン提督は自軍の優勢なる砲火を尙も敵に注がんとして全速力前進を命じ、且四點敵方に變針した。此運動は味方驅逐隊の展張した烟幕の蔭で行はれ、一方空中では猛烈な空中戦が行はれて、日本飛行機をして下界の模様を偵察するの餘裕なからしめた。烟幕薄らぐやテンブトン提督麾下の先頭隊は既に敵列の中央より一萬七千碼の距離に肉薄して居たので、米軍は茲に再び猛烈なる砲火を開ひた。今や八隻を下らざる米軍の戰艦は伊勢と日向に砲火を集中し、爲に兩艦は約九十門の巨砲の標的となつた。次で米軍の全戰艦も亦砲戦に加はり、平均四十秒毎に齊射を行つた。此灰色の艦體より成る戦列を前方より眺むる時は、定間隔に落下する

齊射の爆發と同時に兩舷側には紅蓮の焰と爆煙が起りつゝある。砲戦に加はる米戰艦は刻々に其數を増し、日本艦隊の中央及後部に猛烈なる砲火を加へた。茲に於てか平賀提督は全力を盡して敵の射程外に出でんとするも、損傷せる麾下數艦は速力を出すを得ないので、今は艦隊速力を二十節に減じ、爲に其艦隊は最早進退の自由を喪つた。

#### 四、日本巡洋戰艦隊の奮戦

此の主力部隊の戰闘態なるに當り、注意するに足る多くの挿話は起つた、今左に其一二を述べよう。

日本の巡洋戰艦五隻は、赤城を除き何れも装甲防禦薄弱であるので、敵艦の砲火に暴露するを得ない。茲を以て平賀提督は好機の到來する迄豫備として之を取つて置いたのである。然るに今や味方の戦況は絶望的となつたので、遂に之を戦線に立たしむるに決心した。茲を以て午後五時四



十分提督は巡洋艦隊司令官和田中將に或信號を爲し、爲に和田提督は直に十六點の方向變換を行ひ、全速力を以て東方に航しつゝ、米軍の彈着距離外に出でんとした。此運動中和田戦隊は偶ま驅逐隊の襲撃に對して戦艦隊の左翼を掩護せるウインスロップ提督麾下の第四巡洋艦隊と距離一萬碼に相會した。日本艦隊にとりてはこれ實に逸す可らざる好機である。茲に於て赤城先づ其十六吋砲の射撃を開始し、續ひて僚艦の十四吋砲之に加はり、爲に一分も經たぬ間に巡洋艦トロイは撃破され、乗員の半數は死傷して、艦は大なる傾斜を爲しつゝ、海上に漂ふた。クリーヴランドも亦致命傷を受け、デンバーとウキルミントンも數彈を受けて漸く敵の射程外に逃れた。

テンプルトン提督は遙か後方に起つた大口徑砲の砲聲を聞くや、何事か起りつゝあることを感じたが、間もなく飛行機より此新らなる事實は報ぜられた。和田戦隊は第四戦隊を處分し終るや、五分間北航し、次で急に西方

に轉針し、其優速を利用して米軍の最後部にあつた第四戦艦隊と並行した。元來フロリダとワイオミングは最劣勢の戦艦であるので、他の一層有力な三僚艦の先頭に占位して居たが、此戦闘中米軍は全速力を以て日本軍の中央に殺到したので、フロリダとワイオミングは後方數鏈の所に落伍した。恰もよし和田提督の巡洋艦隊は此二艦に向て砲火を集中したのである。同艦隊のペンシルバニア、アリゾナ、テキサスの三艦は、數分後に至り僚艦の急を知りて急速之が援助に赴ひたが、既に日本の巡洋艦隊は巨砲の猛烈なる射撃を試み、爲にワイオミングは十六吋や十四吋の砲彈十二發を受け、大なる損害を受けて浸水落伍し、前橋と二個の烟突は掃射され、後部諸砲塔は破壊され、海水は彈孔より機關室へと浸水しつゝあつた。

之よりも尙大なる損害を受けた者はフロリダである。同艦は赤城の發射した第一回の齊射彈が司令塔に命中し、ハツバート提督と其幕僚を斃した。斯くて艦は一時操縦の自由を失つたが、再び陣列に復する前に三回の



齊射による命中弾を受けた。茲に驚くべきことが起つた、同艦は後部の一又は二個の彈藥庫爆發せるものの如く、艦の後部全體は爆破された。之を見たる者は何人も同艦が忽ちに沈没すべしと思つたが、其艦體の三分の一は實際上吹き飛ばされたるに拘らず、依然として海上に浮み、日本の巡洋戰艦隊が他の敵に向はんと其場を立去つた後迄も浮んで居た。然も同艦が愈々沈没し去つたのは其後三十分後であつた。斯く沈没に時間の餘裕があつたので、乗員を救出するに好都合であつたが、それでも尙三百五十名は戦死した。

斯の如く和田提督は米軍の後尾に見事なる打撃を與へ、之に大損害を加へ得たので、此際針路を轉じて主隊に合する方が得策であつたかも知れない、何となれば提督麾下の巡洋戰艦隊は今や敵全戰艦隊の注意の焦點となつたからである。のみならず提督の如上の行動は日本艦隊の中部に對する米軍の壓迫を弛むるを得た、實にテンブルトン提督は其戰列の一部が敵

の夾撃する所となれるを見るや、北東に引揚げて勇敢なる和田戰隊を居らんが爲め進撃して來たからである。此際和田提督は自ら命令を下したのか、又は急に戰意が燃へたものかは不明なるも——此事に就ては日本の歴史家さへ所説區々である——提督は確かに西方に直進し、平賀提督の主隊に合せざる以前に既に米軍戰艦隊の半數以上と反航戰を開始した。

然も時既に遅かつた。フロリダとワイオミングは和田戰隊の砲火の爲に沈黙せしめらるゝに先ち、有效なる射彈を送つたので、忽ちにして赤城と榛名は大なる損害を蒙つた。赤城は装甲が厚かつたので重大なる損害は無かつたが、榛名は艦首砲塔の前部に大孔を穿たれ、然も同艦は二十九節の高速を以て馳走しつゝ、あつたので、多量の海水は此の艦首の破孔より浸水し爲に同艦は間もなく艦首を没し、速力を減するの已むなきに至つた。同時に他の米國戰艦隊と砲戰しつゝ、あつた赤城、比叡、金剛も亦それ／＼損害を蒙り、比叡は一砲塔を破壊された。



此時に當り和田提督は遅延ながらも其快速力を利用して敵より離脱せんと決心した。然るに此時榛名は既に速度二十二節に減じ、然も此高速力を持続せんとすれば隔壁に至みを生ずるの恐れがある。他の僚艦は主隊に合せんとしつゝあるのに、榛名は艦首の浸水次第に増して、今は其速度も十八節となり、遂には十六節となつた。之を見たる米艦隊は同艦目蒐けて猛烈なる彈丸の雨を浴せ、爲に同艦の姿は砲彈の上ける水煙の爲に一時は隠れる程であつた。

之を見たる和田提督は必ずや其處置に迷つたであらふ。此際損傷の僚艦を助けて戦はんか、麾下艦隊の全滅を如何せん。さりとして之を放任するは如何に必要なりしとは云へ、勇敢なる榛名の戦友に對し武士として忍びざる所である。されば和田提督の次の行動が躊躇逡巡の形跡ありしはこれ亦已むを得ない。斯くて提督は敵の砲火を榛名以外の諸艦に集中せしめて同艦を救はんとしつゝ、數分間榛名の周圍を巡航したが、然も其目的を

達せなかつた。時に榛名は益々敵砲彈の洗禮を受け、浸水は増加し、進退の自由を失つた上に、敵の飛行機も亦來つて之が撃沈に努めた。茲に於てか和田提督は最早施すべき途なしと見て、死の苦悶にある僚艦を見棄てつゝ、涙を呑んで航走し去つた。同艦は其防水區劃が完全であつたので、飛行機より五發の魚雷を受けても尙沈没せず、遂に午後六時四十分に至り浮泛力を失つて沈没した。而して其乗員千二百名の内三百以上の士官及兵員は救助された。

然るに和田提督の苦悶は只だこれのみに止らなかつた。提督麾下の諸艦は此退却中一再ならず敵彈を受け、殊に金剛は蛇機を損じて、僚艦が敵の砲火より脱せんとする際戦列を離れた。其一分後には同艦は更に六機より成る敵の飛行機の襲ふ所となり、舷側に二個の魚雷を受け、辛ふじて動くことが出來たが、間もなく他の敵飛行機現はれ來りて止めを刺さんとするを見るや、和田提督は最早これ迄なりと觀念し、同艦を放棄しつゝ、何れも損



害を受けた残れる三隻を率ひて主隊に合せんとした。之を見たる米機は執拗にも之を撃沈しくれんと追撃したが、遂に之を撃退して無事主隊に合するを得た。

此戦闘は雷撃機は海戦の武器として爆撃機よりも一層有効なることを茲に再び實證した。元來航空母艦より飛翔する飛行機の搭載し得る最大量の爆弾は六百封度のものであるが、此爆弾は小艦に對しては兎も角として、主力艦に對しては無効なることを證明した。大艦に致命傷を與へんとすれば千封度以上のものでなければならぬが、陸上根據地より直接に飛行する飛行機なら兎も角、艦載飛行機では其搭載困難である。近時の海戦は之を以前のものと比較するに、其戦闘技術は非常に進歩せるも、此方面には尙爲すべき將來が残つて居る。

##### 五、日本艦隊の退却

轉じて彼我戦艦隊の戦況を見んに、米軍主力が日本艦隊の中堅に對して猛烈なる砲撃を加へつゝある間に日向は屢々敵弾を受け、和田戦隊が適時に救援せなんだならば該艦も伊勢も恐らく撃破されたに違ひない。實際日向の砲は其半ばは使用に堪へず、且三千噸の海水は弾孔より艦内に浸入した。伊勢の諸砲は尙大分使用に堪ゆるも烈しき損害を蒙り、且舵機を破壊されて今は推進機を以て操縦しつゝあつた。

斯る危険に臨んでも尙日本の砲手は冷靜なる射撃を持續し、米軍の戦列に對して痛ましくも麗かな手並を見せた。之が爲に最も慘狀を呈したものはニューメキシコである。同艦は其後續艦ミスシッピーが舵機を損じて衝突せんとしたので、之を避けんとして突如轉舵せる際、巨人の箒のような続けざまの齊射弾を受けて甲板を掃射された。之が爲め烟突、二個の籠橋、上部構造部の多くは破壊され、大橋は後部砲塔の二つの上に横に倒れかゝつたので、此二砲塔は遂に終日使用するを得なかつた。



(註) 米軍軍艦の艦橋は上甲板の環輪の上に固着されてゐるから、其附近の甲板が砲弾に依て破壊された時は倒れ易く、或場合に於ては之が爲に上記の如き不幸なる結果を招き易いものである。

又無防禦な五吋砲臺では、敵驅逐隊の襲撃を撃退しつゝありし際大なる榴弾が炸裂して多数の死傷者を出した、かゝる恐ろしき損害を與へた齊射弾は長門より來りしものゝ如く、同艦の射撃は特に正確であつた。ミスシツビーも亦長門と陸奥の猛射を受け、辛ふじて戦列に於ける其位置を保つて居た。

今や時辰は午後七時を指して居る、平賀提督は巡洋戰艦隊の牽制運動を利用しつゝ、全速を以て北西に進み、其敵艦は米軍の先頭艦と約三萬碼を隔つる所まで離脱した。此際若し味方の或艦が損害のため速力を減ずることが無かつたならば容易に敵の追撃を免るゝを得たであらふ。然も如何せん十七節に減じた損傷の日向を見棄つるわけに行かなかつた。時に夜暗

は將に近かんとしつゝあるので、尙一又は二時間敵の追撃を寄せつけぬならば、日本主力艦隊は安全に退却し得るに違ひない、何となれば燃料は速に減りつゝあるから、米軍は然く西方へ追撃を強行すべしと思はれない、加之ならず米軍には其追撃戦を阻害すべき數隻の損傷艦があるからだ。茲に於てか平賀提督は損害最も大なる第二戦隊を新たに先頭となし、最強力之三艦加賀、長門、陸奥より成る第一戦隊を之に続航せしめ、艦隊の後方には驅逐隊をして絶へず烟幕を展張せしめ、又飛行機に命じて追跡し來る敵飛行機を艦隊の視界外に阻止せしめた。

此の日本軍の警戒にも拘らず、二三の米軍飛行機は敵に接近して其行動を報告するを得た。ランブルトン提督は決勝的打撃を與ふべき最後の機會の失はれんとするを見るや、夜暗の到來迄尙多少の時間あるを利用して最後の打撃を與へんと決心した。茲に於て損害最も大なる諸艦を味方巡洋艦と驅逐隊の掩護に任せ、自ら十二隻の戰艦を率ひ、二十節の速力を以て



追撃を開始したが、午後七時二十分に至り再び砲の射程内に迄追及し得た時に夜暗は近づきつゝあるのと、日本軍の展張した烟幕の爲に飛行機を以てする彈着観測も有効でなかつたので、テンブルトン提督は射距離が一萬六千碼に接近する迄は砲火を開かなかつた。次で此距離に達するや、第一第二戦隊は其全砲を以て射撃を開始し、此追撃戦に會し得た第三第四戦隊中の速力速ひものも續ひて之に加はつた。主なる射撃目標は加賀であつたが、他の諸艦は陸奥をも射撃せんことを命ぜられ、且射距離の低下と共に長門をも射撃した。

此の時期に於ける戦鬪の状況を記述せる米國の著述家等は好んで當時の物凄き壯觀を畫ひた。砲口に閃く電火、爆彈の炸裂による閃光は暮れなんとする宵闇に煌々と輝き、射彈の海上に上げる大水柱は幽明の海底より浮上つた大なる幽靈の様に見へた。距離は巨砲には近過ぎる程であるが、視界狭小の爲め命中確實でないので、午後七時三十分に至り、テンブルトン

提督は命じて齊射を中止せしめた。同四十五分提督は烟幕を展張しつゝあつた日本の驅逐隊を輕砲を以て猛射した後、二個の驅逐隊を派遣して之を撃攘せしめた。

午後八時に至り距離は一萬三千碼に近づいた、偶た烟幕の所々には烟薄らいで展望稍々良好となつたので、米艦隊は其全砲を以て射撃を再始し、日本艦隊も亦直に之に應射した。距離が比較的に近かつたので、砲火の威力は忽ちに現はれ、爲に加賀は米軍の發砲毎に火焰に包まれ、舷側や甲板上には巨彈の破片が雨降した。加賀の前續諸艦も亦米軍砲火の洗禮より免るゝを得なかつた。今や日本艦隊の撃滅は此の一舉にあるので、米國艦隊の全員は擧つて其全力を盡し、日本艦隊も亦到底敵せざるを知りつゝも鈍の如き決心を以て之に應じた。

午後八時五分コロラドは前部砲塔を破壊され、之と殆んど同時に装甲を穿貫した二彈を受けて危険なる浸水が生じて來た。茲に於て同艦は戦列



を脱したが、未だ幾許ならずして火焰に包まれ、列後に落伍しつゝある加賀の撃破に参加した。時に加賀は闇に蔽はれて其損傷を暴露することは免れたもの、艦體の裂口よりは火焰迸出し、使用に堪ふる砲塔は僅に一個を残すのみであつた。同艦は米艦隊の正横に來た時全艦隊よりの射撃を受けたので直に沈没するものと思はれた。然るに火災前部彈藥庫に及ぶや、茲に響然たる大響響を發して爆發し、天地も震撼せんばかりの大響響と共に附近の海面は白晝の如く耀ひた。次で再び元の暗闇に還つたが、米國の驅逐隊は乗員を救助せんとて之に突進せしも、艦も乗員も何等其片影を見出すことは出来なかつた。斯くて四萬噸の巨艦は千五百の乗員と共に茲に全く海底に沈んだのであつた。

此の恐ろしき爆音が未だ消へやらぬに米國艦隊は更に新たなる敵を求めつゝあつた。即ち這回には陸奥が米軍集中砲火の的となつたのだ。次第に暗黒の度を加ふる太平洋の闇中に陸奥は朦朧ながらも執拗に航走を續

けつゝあつたが、其砲門より逆る火の柱と、装甲や脆弱なる上部構造物に爆破する敵彈の紅閃とが交互に起りて海上を照らしつゝあつた。偶も此時である、何としても解釋の出來ざる不思議な一事が起つた。然も之に就ては日本の歴史家の説く所も至て區々である。茲には余は當時テンネツシーの副長であつたエルマー中佐の觀察を引用しよう。蓋し同氏の叙述は劇的に興味深く書ひたものよりも寧ろ冷靜な客觀的な見方であるので一層價値があるからである。

(註) アトランチック・マンズリー、千九百三十四年五月號『海軍士官の日記より』抜萃

氏曰く、

之より驚き、既に加賀を撃破した我艦隊は午後八時二十五分猛烈に陸奥、長門と戦ひ、又我先頭にある諸艦は、尙前方に在る扶桑型と思はるゝ日本の戦艦に迫りつゝあつた。然るに突如我軍着弾手は陸奥が右八點に轉向し、我に向ひ直進するを報じた。舵機は故障を生ずれば艦を斯ることがあるが、併しながら之は推進機を適當に使用すれば針路を維持することが出来る。



陸奥は今や艦首を我に向けて突進して来るので、我砲手等は未だ嘗て知らざる猛烈なる砲火を以て之を縱射した。双眼鏡より之を見れば同艦は我巨砲弾を以て掃射されて居るので、余は同艦が直に轉針して元の針路に復するものと刻々に期待して居た。

然るに驚くべし、同艦は依然として前針路を維持した。始めは我が先頭艦目覚めて進んで来たのが、我艦隊は航進するので、若し依然として其針路を續けるならば、恰もテンネツシーの後方に於て我艦隊を横ざることとなる。果して然らば同艦の將士は最早これ迄なりと觀念して、大袈裟なる「腹切り」を決行しようとするのであらふか？

同艦との距離は今は次第に近づいて一萬二千碼となり、一萬千碼となり、遂には一萬碼となつたので、我等は砲身の暖げ、塗具の剥げる迄射ちまくつた。然も敵は依然として肉薄し來り、然も同艦の姿は明瞭に認むることが出来るので、余は之が爲に我艦は素より、全艦隊の砲手の沈着を動搖せんことを恐れた、蓋し此時我が多くの齊射弾は既に正確を缺きつゝあるを認めたらからである。然も僅に残れる六門の砲を以て應戦する陸奥の射撃は驚くべき正確を以て命中するのだ。

時 コロラドは既に戦列を脱して居たので、我艦隊は旗艦ウエストバージニアに依て導かれるのだ。

つゝあつたが、同艦は我戦列に向つて直進する陸奥の爲に幾度も齊射弾を受けた。如何に大戦艦でも僅か五哩の距離に於て百門以上の巨砲弾を浴びながら、尙沈没せずに居ると云ふ事を聞かされたならば余はこれ迄之を一笑に付したであらふが、然も今此陸奥の場合に於ては依然として水上に浮んで居るのだ。併し乍ら同艦が益々接近し來るにつれて、雨霰と降る猛撃の爲に大なる損害を蒙つて居ることは之を認むることが出来た。即ち其大なる前橋は縫れ合つた鋼鐵層と化し、第一烟突は吹き飛ばされ、第二烟突も亦蜂蜜の如く彈孔を印して、斜めに倒れかゝつて居る。破片は絶へず空中に飛び、甲板やタリスマートの装甲の大破片が飛ぶかと思へばボートリックが飛び、次で大なる渦を巻いて飛んだものは恐らく乗員の肉弾でもあらふか。實に此の接戦距離に於ては我砲弾は敵艦の端から端まで打ち抜くかと思はれるに、陸奥は尙依然として突進して來るのである。然も此時既に艦首は深く水中に没して居るので、砲弾は前甲板を貫いて機銃室にまで達した。

午後八時四十分彼我の距離僅に七千碼となるや、陸奥は突如停止して舷側を我に向けたまゝ漂流し始めた。同艦が尙も残れる二門の砲を以て運き發射を續けて居る所より見れば、降伏の意志なきものと思はれたので、今は之を撃沈するの外は無い。茲に於て更に二回の齊射を行つ



たが、遂に同艦は三十五度以上の傾斜を爲しつゝ、將に沈没せんとした。此時我飛行機來りて之に魚雷を發射した。同艦の最後は此の魚雷の力によるものと主張されたが、事實は我砲彈の力に依るものであつた。

時に時辰は午後九時を報ぜんとして居る。日本は此の追撃戦に於て二隻の精銳なる大戦艦を喪つたが、敵にも亦重大なる損害を與ふることが出来た。即ち旗艦ウエストバージニヤは近距離に於て十六吋砲彈十二個を受け、浸水甚だしく、其二砲塔は破壊され且四百以上の死傷者を生じ、其中には銃の破片に傷ひて人事不省に陥つた司令長官テンブルトン大將もあつた。同艦は使用に堪ふる有らん限りの砲筒を使用しつゝ、前部諸割壁に奔入する海水をば辛ふじて汲出した。コロラドも亦廢艦同様となりて數淫の後に落伍し、メリーランドは有形戦闘力には差支へなきも、艦主腦者の多數は戦死した。米艦隊は多少の損害を受けざるもの無く、概して云へば六隻の戦艦のみ全速力を出し得る状態であつた。

併しながら傷ひたテンブルトン大將に代りて艦隊の全指揮を取つたマクアーサー中將は、追撃戦を繼續して尙一層の戦果を收めねばならなかつた。茲を以て提督は尙戦闘に堪ふる諸艦を糾合し、旗艦カリフォルニアに在て自ら之を先導しつゝ、十八節の速力を以て航進し、行く／＼暗黒の裏に認め得る敵艦を砲撃し、同時に航空母艦に命じて残れる半數の飛行機に爆彈と魚雷とを以て日本軍の先頭部隊を攻撃せしめた。

此時に當り日本軍は最後の手段に出でた。米艦隊の嚮導諸艦が再び長門に向て砲火を開始するや、多數の日本驅逐艦は二隊に分れて左右兩舷より米艦隊目宛けて突進した。之を見たる米軍の戦艦及巡洋艦は之に對して直に砲撃を加へ、之を撃退せんとしたが、日本の驅逐隊は遂に魚雷發射距離迄侵入して魚雷を發射した。マクアーサー提督は之を避けんとして進出し來る敵魚雷の方に艦隊の艦首を轉ぜしめたので、多くの魚雷は無事列間を通過したが、巡洋艦アルバニー、ポートランドには魚雷命中し、又戦艦オ



クラホマも同様の運命に逢つた。此時日本驅逐隊は優勢なる米軍驅逐隊の襲來を受けたので雨霰の如き彈雨の中を潜り辛ふじて味方主力艦隊の所在に歸還し得たものは四十隻中僅か十八隻に過ぎなかつた。

此日本驅逐隊の勇敢なる行動は日本艦隊の殘部を救ふことに於て大功があつた、何となれば其數分前に行はれた米機の襲撃も餘り効果は無つたからである。此等の米機が日本艦隊を發見した時には、同艦隊は殆んど視認不可能なる程黒烟の裏に蔽はれて居た、勿論其襲撃時にはマグネシウム光彈を用ひたけれど、魚雷や爆彈は多少不正確に投下された。此襲撃により大なる損害を受けたものは巡洋戰艦霧島のみで、二回魚雷を喫した外、鱒酸毒瓦斯に包まれてしまつた。同艦は之にも屈せず暫くは奮闘を續けて居たが、後に至りミンダナオ海岸に擱坐し、完全に破壊した。

#### 六、大海戰の幕閉さる戰果如何

時に九時三十分にして夜益々暗く、晴雨計の降下は暴風雨の襲來を報じつゝある。マクアーサー提督は敵との觸接を失ひ、且數多の味方艦艇も傷ひたので此まゝ追撃を續行するを無益と考へた。勿論日本軍の損害は不明なれど其重大なることは明かである。沉んや米軍に取りては假令此海戰が豫期せる如く然く決勝的で無つたとするも、少くも向ふ數ヶ月間は日本を海上の覇者たる地位から引下し得ることは確實なるに於てをや。

追撃を中止した時に米艦隊は最近の根據地たるペリユウ群島の北西約四百五十哩の所にあつた、茲を以てアンガウルに向ふに決し、損傷艦は然らざるもので曳航せしめつゝ同地に向つた。夜半天候益々險惡となり、巡洋艦アルバニーは浸水甚だしひので、遂に之を放棄するに決し、アツブルトン少將は將族をロスアンゼルスに移した。戰鬪の爲め損傷して航海に堪へなくなつた五隻の驅逐艦も亦太平洋の真中に沈められた。ウエストバール、ジニヤとニューメキシコを含む其他の損傷艦も乗員の必死の努力により



幸ふじて沈没を免れて居たが、此風波と戦ふ困難なる航海には一再ならず沈没せんとした。

斯の如く險惡なる天候は一方には米軍にとりて不幸の種であつたが、他方に於ては米艦隊を敵潜水艦の襲撃より救ふことを得せしめて疑ふ可らざる天祐となつた。夜中二回翌日一回敵潜水艦襲來の警報は傳つたが、敵は魚雷を發射せりとするも効果は無つた。然るに二十一日午前五時に至り悲むべき事件は起つた米國の驅逐隊は黎明の薄明りを透して一隻の大形潜水艦を發見し、直に之に砲火を開ひた。此潜水艦は直に水中に没し去つたので驅逐艦は多數の水中爆雷を投下したが、其二個は確かに手筈へがあつた。數分の後潜水艦は再び水上に浮出したが、豈計らんやそは米國潜水艦V六號であつた。然も救助の策を講ずる間もなく破壊された船體は再び海底に沈み去つた。V六號は夜中はぐれたので翌朝再び艦隊に合せんとしつゝある際敵と誤認されたものである。而して八十名の乗員中救助

された者は僅に士官一名兵員三名に過ぎなかつた。

米艦隊の大部は四百五十哩の距離を約四十時間も費やしつゝ、二十二日の正午頃アンガウルに到着し、損害の大なる數艦は尙罷れて到着した。アンガウルでは大抵の設備は整つて居たので直に應急修理を施し、ウエストバージニヤを除ひた諸戰艦は二週間以内に布哇に向ふことが出來た。米艦隊のアンガウル碇泊中、ミンダカオから來た日本の飛行機は之を襲撃せんとしたが、米軍の航空隊は頗る優勢であつたので日本機は遂に米艦に近寄ることが出來なかつた。

由來大海戰の勝敗如何は相互の損害のみを比較して之を決定する事は出來ない。世界大戰中のジブツトランド海戰では英國側の艦船乗員に於ける損害は獨逸側よりも多大であつたけれど、戰略上に於ては前者は確に勝利者であつた。然るに此ヤップ島沖の海戰に至ては戰略戰術上何れが勝利者であつたかは一目瞭然である。實に日本は劣勢なる兵力を以て敵



よりも一層多大なる損害を蒙つたのだ。戦闘に参加した日本の主力艦十  
二隻の中少くも五隻——加賀、陸奥、金剛、榛名、霧島——は損失の中に數ふべ  
きものである。加之ならず其他の七隻も修理に大なる時日を要する如き  
大損害を蒙つて居た。巡洋艦、驅逐艦の損失も亦頗る大であつた。要する  
に日本の主力艦隊は最早有力なる單位としての存在を失つたのだ。

之に反して米國側に在ては左迄優勢でないフロリダとワイオミングの  
二隻を喪つたが、然も十四隻の戦艦は残存せる上に、尙本國には二隻の豫備  
があるから、修理完成すれば十六隻の戦艦を海上に浮べることが出来る。  
其外巡洋艦の二隻と二十三隻の驅逐艦を喪つたが、此等も將に完成せんと  
しつゝある新造艦を以て之を補ふことが出来る。

斯くて此海戦は何れの方面より觀るも米軍側の勝利は餘りに著しく且  
決定的であつた。この勝利こそは米國海軍作戰局の案書した用意周到な  
る戰略計畫に歸すべきものであるが、其偉大なる指導者は今日世界に赫々

たる名聲を輝かせるハーバー少將其人であつた。

米國は遂に戦争の主要なる舞臺に於て制海權を握ることが出来た、茲に  
於てか残るものは之を利用して日本に壓迫を加へ、日本をして講和を餘儀  
なくせしむるのみとなつた。



## 第二十一章 日本の屈辱的媾和

日本政府の位置絶望的となる——支那陸軍滿洲を奪還す——露國の樺太占領——米軍クラムを奪還す——米軍の比律賓奪還——米軍東京の空に勦降文を撒布す——媾和條件——戦争の所得如何

## 一、日本の位置絶望的となる

ヤツブ島附近に於ける日本艦隊大敗の悲報は日本政府並に其國民の耳には眞に激雷の如く轟ひた。今や在野黨は政府者の無能を痛罵して其總辭職を迫り、最高軍事會議の海軍委員等は、危険を指摘せるも其忠言を用ひずして遂に勝利の有ゆる機会を逸せしめた陸軍當局を猛烈に非難し、一方國民の方では新聞紙の報道に依て大敗の顛末を知るや、國家を斯る危地に

陥れた當の責任者をば蠶々として非難した。

然も日本の當面せる不幸は茲に止らずして他の國難は迅速且痛烈に迫つて來た。支那が日本に對して宣戰するや、日本は始め支那の重要な戰略地點の幾つかを占領して其權勢を保持せんとしたが、日本の守備軍等は將軍王楚の軍の爲に漸次に孤立無援となり、遂には降伏か撤退かの何れかを選ばざる可らざることとなつた。然るに日本軍の不幸は茲に止らずして、支那本土より嫌惡せる外國の勢力（日本を驅逐し得た民國政府は、更に其手を內蒙古に迄伸ばして、同方面に於ける日本の勢力をも驅逐した。

此成功に引繼ひて王楚は自ら其軍を率ひつゝ、十月末滿洲の邊境を通過して秦皇島に迫つた。東三省督軍李平海將軍は王が已の勢力に挑戦しつゝあるを見るや、軍兵を募集したが、然も這回も亦王楚の無敵軍に拮抗し得べくも無かつた。時に北滿洲には新たに暴民の一揆起りて其勢燎原の火の如く漫漶しつゝあつた。李は此等の擾亂を顧みず、麾下の精銳を提げ



て王軍に向つたが、それは寧ろ李の没落を速かならしむるものに過ぎなかつた。牛莊北方に於ける決戦に於て李軍は脆くも大敗し、其部下は投降し、李將軍自らは不注意にも其部下を糾合せんとする際、其手兵の爲に捕へられて王將軍の前に引据へられた。支那政府は度量寛大なる王將軍の乞を容れて李を遠隔の地に配流したが、彼は恐らく人間の大望が無益なることをしみじみはかなだに違ひない。

更に日本の立場を困難ならしめたものは、李軍の急を救はんとして急派された一個師團の日本軍が、時機既に遅れた爲め、約二十萬の優勢なる支那軍の包圍に陥つた一事である。此の日本陸軍は勇敢にも血路を開ひて海岸に出でんとする際、頗る優勢なる支那軍の爲に大なる損害を蒙り、遂に刀折れ矢つきて敵の軍門に降伏した。王楚は之に乗すべく其機を逸せなかつた。彼は迅速に其大軍を率ひつゝ、日本の援軍が到着する前に鐵道線路に沿ふて關東半島に進み、旅順を攻略し、又支那の商港なる大連をも難なく

占領して、後者を支那軍並に攻城部隊の策源地とした。日本は旅順を回復せんが爲には朝鮮守備軍を動かすの外無かつたのであるが、時に朝鮮の狀態は頗る不安を極め、何時獨立的騷擾の惹起するや計り知る可らざるが故に、其守備軍を動かすが如きは不可能であつた。

以上の外患に次で日本内地に於ても亦内憂を生じ、既に工業の中心地に於ては險惡の空氣が漲つて居たので、日本政府は支那へ向け其増援軍を派遣するに躊躇した。殊に海軍々令部はヤップ大海戦以來西太平洋の海權を敵手に委したので、佐世保より黄海沿岸に至る短距離の陸軍輸送船隊航行の安全に對してさへ責任を負ふことを拒絶した。

## 二、米軍のグワム及比律賓奪回

此時迄持續した川村内閣は内外の形勢愈々險惡にして危機の迫れるを見るや、遂に消極的政策を取るに決定したものと見へた。平賀提督の下に



在る敗殘の日本主力艦隊はカビテに於て應急修理を加へた後横須賀に引揚げ、戰爭終了時迄何等爲す所は無かつた。比島の防禦としては數隻の巡洋艦と他の輕艦艇が馬尼刺附近に残つて居たが、之を指揮する上原少將は守勢に立つべき嚴令を受けて居た、これ即ち何等積極的の攻勢を許さざるもので、今此場合に於ては敵軍の比島奪回を默認するものである。日本の比律賓防禦軍は其數約十萬に上り、其七十五%は呂宋島に在つたが、此等は數週間の間は米軍の封鎖を受けた以外何等敵軍の防禦を受けなかつた、これ此の期間米軍の注意は主としてグワムの奪回に注がれて居たからである。

時にグワム島の日本守備軍は、其艦隊の慘敗以來最早救助の繩は斷たれたが、然も尙眞の日本人たる勇を鼓して死力の防戦を續けた。然も彼等の防戦も米軍の鞏固たる遠距離射撃と、屢々行はれた空中よりの毒瓦斯彈の投下の爲めに漸次に打ち負かされた。斯くてグワムは十二月八日に至り

遂に米軍の手に落ち、星條旗は再び同島の空高く翻つた。然も此の戦闘中米國艦隊は何等重大なる損害を受けなかつた。時に馬尼刺灣は十二隻の米國巡洋艦と驅逐隊六隊より直接に封鎖されて居たので、今や比島奪回の爲め米國陸軍を上陸せしむることは當面の緊急問題となつた。此比島の奪回には米國の最高軍事司令部は、日本が千九百三十一年三月同島に對して行つた作戰に準ひ、敵を欺かんことを企てた。即ち其の上陸にはトラツク島攻略以來常に日本の空軍を凌駕し來つた優勢なる米國の空軍を利用して其作戰を容易にし、又呂宋島の東海岸諸地點には恰も米陸軍が上陸せんとしつゝあるかを装ひ、斯くして日本軍の大部をアルバーとデラサツク灣の周圍に集中せしめ、其虛に乗じて米國陸軍は比島の北西岸なるロイグ附近に上陸した、これ實に十二月二十八日である。之を見たる日本の一大隊は之を阻止せんとして突進し、最後の一人に至る迄防戦したので、米軍も大なる死傷者を出したが、日本の援軍が到着した時



には米軍は既に鞏固な地歩を占め得たので、遂に之を撃退した。運送船よりの部隊と弾薬は米艦の掩護砲火の下に續々として揚陸され、遂には米軍は右翼を味方の巡洋艦、驅逐艦に掩護されつゝ攻勢に轉じて南方へと進んだ。

其後四十八時間の間日本人は頑強な防戦を試みたが、之をリングアンの南方にある慎重に準備された戦線まで追詰めた。此地點には約五萬より成る日本軍の主力が集中されて居たのである。之と同時に米の第二軍はヂラサツク附近に上陸した。蓋し日本軍は米軍がローグに上陸した爲め該方面に注意を集中せるので、米軍は其虚に乗じたのだ。此第二軍は途上日本軍の防戦を撃退しつゝ、強行軍をなし、リングアンの附近に於て將に展開せんとする戦闘に適時に参加するを得た。日本軍の總指揮官木村大將は敵の第二軍が己を包圍せんとするを見るや、其位置を保持せんが爲め軍の右翼を轉回せしめた。將軍の企圖は比較的劣勢な一部を以て米國の一軍を

牽制し、他の諸部隊を集中して敵の他軍を粉砕せんとしたのである。然るに米軍の飛行機は迅速に此運動を看破したので、木村將軍は今も兩戦線とも苦戦に陥り、然も援軍の望はないので、戦勢を挽回すべくも無かつた。兩軍の戦闘機は其數略ほ相伯仲したが、米軍側は爆撃機の方優勢であつたので、日本側は常に壓倒され、勝敗は茲に決した。茲に於て木村將軍は一萬五千の兵を纏めて馬尼刺に向ひ退却を始めたが、其大部は包圍され、其戦闘力の半ばを喪つた後遂に捕虜となつた。米軍の死傷も亦一萬一千を超へ、毒瓦斯を以て日本軍に有效な打撃を與へた空軍が適時に來援せなかつたらば、其損害は尙一層多大であつたであらふ。

此會戦は全戦争を通じて戦はれた陸戦中の大接戦で、日米兩國共に之を誇りとするに足る有名なる戦闘である。普通にはリングアンの會戦として知られ、今は町の南方戦闘の最も劇烈を極めた地點に記念碑が建てられて、如何に其戦闘の壯烈慘烈なりしかを物語つて居る。此記念碑は戦後日



米兩國の親交を増進せんが爲に、兩國の有志に依て建てられたものである。リンガエンの戦鬪の翌夜馬尼刺にあつた日本の巡洋艦と驅逐隊は米軍の封鎖線を突破して脱出せんとしたが、巡洋艦阿武隈、夕張及少くも三隻の驅逐艦は其目的を達したけれど、他は撃退され、二隻の驅逐艦は烈しき戦鬪の後撃沈された。而して米國軍艦カンサス・シチーも亦日本軍の魚雷を蒙り艦は遂に放棄された。

今や優勢なる米軍に對しては馬尼刺の陥落も疑ひないので、此戦鬪後數日にして上原提督は令して殘餘の軍艦を爆沈せしめた。此爆沈は最も完全に行はれ之を千九百五年の降伏に先ち露軍が旅順口に爆沈した方法と比較するに、後者は實に論するに足らなかつた。

馬尼刺は千九百三十三年(天正二十二年)一月八日陥落した。木村將軍と其部下の守備軍は爾後戦鬪に従事せざるべき宣誓の下に寛大にも日本に歸るを許された。此措置に對しては米國內の或方面では猛烈な非難が

起つたが當時呂宋島に於ける米軍總司令官クレイ大將は、休戦の近きを知れる米國の最高軍事司令部より、無益の流血を防がんが爲め斯る處置に出でんことを訓令されたものであるのは最後に至りて一般に知れ渡つたのみならず、斯る寛大なる處置は、他の島々を固守せる孤立無援の日本守備軍をも速に降伏せしむることゝならふ實に此等の守備軍は速に戦争を止めて平和な家庭に歸らんことを熱望して居たのだ。

此時に當り戦鬪が將に終局に近づきつゝあることは何人の眼にも明かであつた。日本が之を支配せんとして全力を盡した支那は今や完全なる獨立國となり、朝鮮も亦外からの援助さへあれば支那の後を追はんとし、樺太は日本が敵側に新たなる敵國を加へざらんが爲めに完全に露國のものとなつた。而して又内に在ては川村内閣は遂に倒れて東京には民主々義を標榜する新内閣が組織された。ヤツプの大敗以來米國巡洋艦は自由に其發射を伸ばして日本の通商破壊を試みる事が出来たので、國內物資の



缺亡は益々甚だしく、斯る事情は財界の危機と相俟て、此の島帝國をば將に絶望の域に沈めつゝあつた。

### 三、米空軍東京の空に勸降文を撒布す

日本に於ける此の人心變動の時機に乗じ、米國航空隊指揮官シモンズ海軍少將が巧みに之を利用して人道的に戦争を終結せしめた功績は特筆大書するに足るものである。此航空隊は航空母艦アラスカ、カーチス、レキシントン、サラトガ及モンタークより成り、米國艦隊の一部として横須賀の敵艦隊を誘出せんが爲め、千九百三十三年一月下旬日本の太平洋沿岸を巡邏しつゝあつた。次で一月三十日の夜間五十の飛行機は示威の爲め東京の上空に向ひ、茲に多數の爆弾を投下した。此等の爆弾は發光性のペンキを以て塗られ、且急速なる落下を防ぐ爲に落下傘を附してあつたが、主都の混雑した町々には大恐慌を起した。然るに此等の爆弾は一も爆發しないの

で、驚愕は變じて好奇心となり、仔細に之を検査したが、驚くべし、何れも日本語で書かれた印刷文のピラが這入つて居た。然も其印刷文には、これ以上の人命の損失は無益であるから、米國民は日本人の良心に訴へ、何等正當の理由を有せざる無益の戦争を熄めんが爲め、休戦を勸告する旨が記され、今や戦争の原因たる支那は外國の羈絆を脱して自國民の手にて國事を處理しつゝあることに注意せんことを求め、太平洋を隔て、相對する日米兩國は、殺人的戦争を爲さんよりも、寧ろ平和的通商を爲すの優れるに加かざることが力説されてあつた。此等の所謂「爆弾」の多くは警官に依て没收されたが尙數千は民衆の手に落ちた。

### 四、休戦より媾和まで

斯種の宣傳は如何にも戲曲的であつたが、戦に疲れた日本人の大部に平和を宣傳するには大效があつた。茲に於てか日本政府は輿論の聲に動かさ



れて休戦を提議し、此提議は二月四日米國政府の容るゝ所となりて、其後五月十五日上海に於て媾和條約の調印を終る迄兩交戰國は完全に休戦した。此媾和條件は一般の熟知する所であるから茲に之を繰返すの必要なきも、簡單に云へば、

(一) 日本は赤道以北に於ける舊獨領諸島の委任統治權を放棄して、米國之に代ること。

(二) 兩國は支那に對して政治的及經濟的支配權を得んとする如何なる努力をも之を制抑すること、並に第三國にして將來支那に對し前記の支配權を得んとする者あらば、兩國は之に對して商議し、以て協同動作を執ること。

(三) 戰爭中相互に占領した土地は之を現狀維持とすること。

此條項は實際には獨り米國にのみ適用された、これ同國はカロリン、ペリユウ、マリアン、マーシャル群島を占領せる以外に、西太平洋に於ける其舊領をも回復したからである。但し此條項は日本の威權を傷けるものであつた。

(四) 米國は何等償金を要求せざること、但し別個の議定書を以て既に兩締約國に對し利益を與

へた從來の通商上の互惠主義を確保すべし規定を定めた。

斯くて日米兩國の平和は鞏固にして明かに恒久的なる基礎の上に再建されたが、歴史家は米國が日本に對して實際敵意を有せず、且日本にとりては米國との親交は、自國の福祉増進に缺ぐ可らざるものなるにも拘らず、謂れなき攻撃を敢てした日本の無謀を驚きの眼を以て見つゝあつた。此の謂れなき戰爭の結果として日本は殆んど破滅の境涯に落ち、今後三四十年間は一等國としての從來の地位を恢復することは困難と思はれた。

他の一方に於て米國は戰ひに勝つたが、同國の爲政者にとり多年間頭を悩ました日本との戰爭の脅威を取除くことが出來た以外には、何等物質上の利益を得なかつたと云はざるを得ない。米國の通商貿易は根底より覆やされて回復の曙光さへも見出すを得ない、況んや戰爭の爲に費した莫大なる軍費は勢ひ租税の増率となりて社會的不安を高めたのだ、抑も戰爭は何れの國民的立場より觀るも其失ひし所を償ふに足るものでない。實



に此日米戦争も亦少くも其物質的方面に就ては勝者も敗者と同様悲惨なることを示したものである。

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字列が続く）

### 第二篇批判

（注意） 第二篇中の一、二、三等の各節は各々第一篇中の第一、第二、第三章等に相當するを以て彼我對照されんことを要む。

一、

日米戦争！ 日露戦争後幾度か太平洋上に漂ふた日米の戦雲は霧の華盛頓會議に依て平和の曙光が見へたと思つたのも束の間、此條約の調印尙未だ乾かざるに太平洋の彼岸に於ては米國防備の完成となり補助艦の増建となり、大規模の海軍大演習となり進んでは鏡面皮なる日本移民制限法案の制定となるに及んで、復もや太平洋上には戦雲の搖曳せざるを得ない。これ抑も何の故ぞ、蓋し有體に云へば華府會議は日本の發展膨脹を制抑せんが爲めに仕組まれた英米の芝居で、之に列した各國殊に日英米の代表者等は互に懇懇の辭を交換して永久渝らざる親交國となつた様に振舞つた



にも拘らず其裏面に於ては結局衝突の避け難きを自認して、自國に都合好  
き位置を得んが爲め、各々虚々實々の策略を弄した一時的の結果であるか  
らだ。これ實に偽らざる事實の告白である。

斯る現状に於て日米戦争論が再び世界識者の話頭に上るは亦已むを得  
ない。果して然らば日米戦争は遂に避け難きか。斯る重大なる問題に  
對しては吾人は茲に輕々の論断を下すを欲せざるも、若し眞に戦争の可能  
性ありとせば如何なる點が其原因となるかは日本國民は素より世界の人  
士が豫め充分に知悉せねばならぬ要點である。何となれば此の悲惨なる  
戦争の惨害を豫防する點より見るも斯る智識は絶対に必要であるからだ。  
凡そ戦争は政略の繼續にして、現時の戦争なるものは畢竟するに此の國  
家の政略目的を達せんが爲めの手段に外らない。然らばバイウオーター  
氏の書いた日米戦争の原因及其動機は抑も何れに在るか。讀者は先づ  
此點に留意せねばならぬ。

バ氏の書いた日米戦争の原因と動機とは之を要約すれば次の一語に盡  
さる。曰く日本は支那併呑の野心を有し、然も此野心は華盛頓會議に於て  
列強の爲に匡正されたが、それにも拘らず口を拭ふて依然獨占的侵略政策  
を持續した。偶ま千九百三十一年一月支那廣西省の利權問題より日米の  
關係非常に緊張を來すや、時恰も日本に於ては共產主義者の煽動により今  
にも革命勃發せんとするの危険あり、時の川村内閣は對外問題を利用して  
國民の思想を一新統一せんとし、加ふるに支那自身に於ても統一の曙光が  
見へ始めたので、併呑政策の野心も亦水泡に歸せんとするを恐れ、此機を利  
用して米國と開戦に決したと云ひ、然も此日米戦争は川村首相が多年間懷  
ひた豫定の計畫であつたと云ふのである。

抑も極東問題は日本國民の生活に關する問題であると同時に又國家自  
衛の死活問題である。換言すれば此問題は列強に取つては利權爭奪の問  
題たらんも日本に取つては國家の生命に關する重大な問題である。され



ば將來若し太平洋に戰雲の曇くものありとすれば其主因は正に茲にあるべく、此點に於てバイウオーターが支那問題を捉へて日米戰爭の主因としたのは寧ろ當然である。併しながら日本を以て支那併呑の野心あるものとなし、支那の統一を妨げ、列國の門戸開放機會均等を蹂躪するものとなすに至ては日本を誣ふるも亦甚だしきもので、本書が故意に排日の動機を以て書かれたものであるのは既に此出發點を見るも充分明かである。

今夫れ列強特に日英米の對支政策を概觀するに英國は既得の權利利權を失はざらんとして現状維持を欲し、然も支那に對しては印度の例に倣つて壓迫政策を用ひんとするは事實の歴々示す所である。之に反して運れ馳せに支那の富源獲得に参加した米國は時機既に運く、支那の要地は列強の巢ふ所となり、殆んど米國の驥足を容るゝ餘地がないので、今は列強就中日本の利權を吐き出させて均等の資格で割込み、以て其資本的帝國主義を支那に向て施さんと欲し、正義人道の表看板を標榜しつゝ、支那に對して連

りに懷柔政策を取りつゝある。然も此政策が結局に於ては支那を滅亡に導くべき一種の帝國主義たるに於ては他の帝國主義と大同小異である。獨り日本に至ては東亞の安定と其民族の平和的隆昌を圖るを以て維新以來の皇謨となし、支那に對しても其分割を防ぎ、眞の統一を助長し、且共存共榮の主義に依て彼我の長短相不足せるものを補ひ、外國の侵略に對して共に、安寧及福祉を庶幾せんとするのである。素より日本の對支政策にも時としては非難すべきものもあつたが、併しながら大觀すれば斯の如きは寧ろ外國の侵略に對して自衛の策に出でたる已むを得ざる措置で、之を以て日本の野心を云爲するが如きは本末を顛倒せるものである。

日本は建國以來外國に對して侵略的戰爭を爲さざるを國家の傳統的主義として居る。遠くは神功皇后の三韓征伐より、中世紀の豊太閤の朝鮮征伐の如き、何れも皆外敵の侵略に對して我先づ先手を打つたものである。彼の日清、日露、日獨戰爭の如きも何れも日本にとりては一の防禦的戰爭で、



若し之を放任せんか、國家の死活に關するに至り、結局に於て外敵の挑戰に應じた受働的戰爭であつたのだ。斯る傳統的國民性を有する日本國民が今後と雖も自ら進んで挑戰的主動的の戰爭を敢てすべしとは殆んど想像す可らざること、唯だ日本を離間せんが爲めの苦策であるのは何人も容易に看破し得る所である。況んや日本の政府當局者が國內問題の收拾と國民思想の一新の爲め、國家の運命を賭する挑戰的戰爭を敢てすると云ふに至つては言語同斷である。

バ氏は又日本に於ける共產黨の革命的煽動を題材として居るが、實際我が日本帝國の現状に於て最も憂慮すべきものを求むれば對外的よりも寧ろ對内的方面に存するは吾人素より異論は無い。見よ我帝國は今や十字街頭に立ち、一方に於ては階級的反目の稍もすれば國民的團結心を弛めんとするあれば、他方には國民間に於ける思想渾沌として右傾せざれば左傾し、左傾せざれば右傾し、斯くて國民的精神を擴充すれば國際的精神となり

國際的精神を煎じ詰むれば國民的精神となるを解せず、兩者交も相ひ軋しつゝある。さればバ氏が日本の此の弱點を捉へて之を戰爭の題材としたるは如何にも巧妙なるも、さればとて吾人は之により革命の氣分が遂には國內に漲るが如き結果となるとの悲觀説を容認するものでない。彼の自由平等を熱望する餘り共產主義者となり、無政府主義者となる者は何れの時代を問はず何れの國にも在る。然も由來日本國民は伶俐の國民である。彼等は喜んで新を趁ふも、一度其皮相の見解なるを知るに及んでは弊履の如く之を放棄するに吝ならざる者である。今や一方に於ては反動時代將に來らんとし、他方に於ては國民の中堅が今尙依然として堅確なる思想を維持しつゝ、嚴存する以上、一部社會主義者の蠢動の如きは必ずしも恐るゝに足らない。只だ我が階級的鬭争、思想の渾沌を匡正せんには、我國民の自覺と共に上下を擧げて尙爲すべき多くの改善を要するを以つて、吾人はバ氏の題材を皮相の見解なりとして一言の下に笑殺するよりも寧ろ他



山の石として之を國民の反省に供せんとする者である。

然らば我日本が極東問題に關して、米國と云はず、他の列強と云はず、遂に劍を執て起つのは如何なる場合であるか。吾人は例へば彼の米國に於ける鬻の排日法を目して直に日米戦争を云爲する一部の論者に與みするを得ない。吾人の見る所を以つてすれば、我國民の生活と我國家の生存とに直接且重大なる關係を有する極東に於ける日米政策の衝突こそ、之眞に日米戦争の主因を爲すもので、彼の排日法の如きは僅に副次の原因を爲すものに過ぎない。何となれば我國民は必ずしも米國に移民せざる可らざるの理由なく、それは寧ろ國家の名譽と體面に關する問題で、之を世界の公平なる輿論に訴へ米人を自愧反省せしむるこそ賢明の政策であるからだ。之に反して我國民の生活と我國家の存立が脅かさるゝ場合例へば或外國が滿蒙に於ける我が特殊利權を動搖せしめんとし、福建省の不割讓條約が蹂躪せられ、其他支那の分割並に支那及極東露西亞の要地に第三國が軍事

的根據地を得んとするが如き場合、又は露支の經濟的發展を獨占せんとするが如き場合には、帝國は一日も晏如たるを得ないので、遂に勘忍袋の緒は切れて最終の手段たる戦争に訴へざるを得ない。茲に戦争の主因がある。抑も戦は努めて之を避くべく、唯だ已むを得ざる場合にのみ之を行ふべきものである。併しながら吾人は亦軟弱なる一派が唱導するが如く、帝國の生命に匕首を擬せられ、其咽喉を締められんとするにも拘らず、尙且無抵抗主義に甘んぜんとする無氣力者にも與みするを得ない。斯の如きは一片歌々の義氣を有する我大和民族の斷じて爲すべき所でない。吾人素より國際間に戦争を絶滅するの一法としてトルストイ流の無抵抗主義の幾分必要なを知る。然も今や世界何れの強國も皆これ國家及民族を以て單位となし、其世界的經綸は主として國家を通じ、國家を以て之を行ひつゝ、ある現時の實世界相に於ては、斯る無抵抗主義は自ら好んで我日本帝國と日本民族とを亡ぼすものである。



バ氏の書ひた日米戦争の骨組を評論せんには、之に先ち日米兩國の政略上の目的、並に此政略上の目的を達成すべき手段としての作戰大方針を豫め了解して置くことが肝要である。

日米戦争を論ずる者或は曰く、米國は日本艦隊を全滅し其陸軍を日本に送りて城下の盟を爲さしむるを得んも、日本の貧弱なる艦隊は米國艦隊を敗るを得ない。果して然らば日本は米國をして降を乞はしむること不可能なるべく、寧ろ始めより無益なる戦ひを避くるに加かずと。一見すれば此論定に一理あるが如きも、不幸にして戦争の目的を忘却し、此戦争の目的如何に依て其採るべき戦争の方法にも亦二様あることを知らざる一種の謬論である。

前説せるが如く戦争は國家政策の繼續にして、此政略上の目的を達せん

が爲めの手段に外らざるが故に、戦争の最終目的が政略の上に在るは疑ひない。然らばバ氏の書ける支那問題を主因とする日米戦争に於て日米兩國の政略上の目的は如之に之を豫想し得るか？

之を合理的に考慮するに日米戦争に於ける日本の戦争目的（政略上の目的）は極東に於て何國よりも優越なる地位を占め、我國民生活と戦時に必須なる物資の供給を安全ならしむると共に、斯る要求を劫かきんとする米國の勢力を驅逐するに在るべく、之に反して米國の戦争目的は、日本に斯かる政策を放棄せしめて、自己の有利に之を展開せしむるにあるや明かである。

然るに此の戦争目的を達せんには、日米兩國は其相互の地理的狀態乃至は兵力、兵資の如何により、其採るべき戦争の性質を異にするものである。米國は前述するが如く日本艦隊を撃滅又は封鎖し、日本をして城下の盟を爲さしめんとするであらう、これ素より合理の措置である。然るに日本の



場合に在つては他の強國と聯合して米國に當るか、又は特殊の場合にあらざる限り、米國內に我陸軍を進めて城下の盟を爲さしむるを得ない。否若し日本にして一定の限度を超へたる戦争を行ふに於ては惡戰略となりて却て敵の爲に敗らるゝの不利を醸すものである。果して然らば日米戦争に於ては日本は上述せる極東に對する政策の達成を以て満足するの外は無い。これ恰も日露戦争に於ける日本の場合と同様である。軍事専門家は斯る戦争を目して、日本の場合には之を制限的戦争と云ひ、日露の如き場合には之を無制限的戦争と云つて居る。即ち日本は此の制限的戦争に於て戦争目的を達するを得ば之を勝利と解すべく、反對に米國は其目的を達成するを得ずんば之を敗戦と解せねばならぬ。日米戦争の勝敗を云爲せんとする者は先づ此點を知ることが肝要である。

然らば此の政略上の目的たる戦争目的を達せんが爲めには日米兩國の外交家及戰略家は各々如何なる任務を其双肩に擔ひ、如何なる作戰大方針

を採るべきか、これ次に起る問題である。凡そ兩軍直接に相戦ふ所の戦術なるものは千變萬化し、彼我互に其術を秘せんとするので、敵の戦術を知ることとは甚だ困難であるが、之に反して戦争の原則即ち兵理なるものは多くは不變であるから、此兵理の上に立つ彼我の作戰大方針なるものは大體に於て之を推斷することが出来る。

日米の國交、今や正に斷絶せんとする時に於て、本書の書ける日米兩艦隊の配備は左の如きものである。即ち米國の主力艦隊は布哇に集中され、其偵察艦隊は大西洋方面に、而して比律賓には貧弱なる亞細亞艦隊がある。其他米國の前進根據地たる比島とグワムの防備と施設は華府條約に依り現状維持とせられて居る。之に對して日本艦隊は本國方面に集中され、徐ろに戦機の熟するを俟ちつゝある。

斯る狀況に於て日本の外交家は就中露支兩國を已に與みせしめて米國に對し宣戦せしむるか、又は其最小限度として日本に對する好意的中立を



保持せしめ英國に對しては嚴正中立を保持せしめんと努むべく、之に反して米國の外交家は英國を自己の與國となすは勿論進んでは露支兩國をして日本に對して宣戰せしむるか、又は其最少限度として日本に對し嚴正中立を保持せしめんと努むるであらう。

次に日本の戰略家は

- (一) 米國艦隊をして日本に對する作戦を不可能又は困難ならしめ、彼を攻せば之を撃破せんか爲り、疾風迅雷の勢を以て米國の亞細亞艦隊を屠り、比律賓とグロムを同時に占領し、巴拿馬運河に對する作戦(運河の閉塞)を行ひ、大西洋艦隊の合同を妨げ、又は米國の太平洋岸に對する攻撃を斷行し、戰勢の進捗に伴れて布哇をも攻略すること。
- (二) 日本海、黄海、東海及支那海の海權を完全に掌握して日本の重要な交通線を確保し、斯くて長期の戰爭に堪ふる準備を爲すこと。
- (三) 日本陸軍は露支兩國を已に與かせしめんとする我外交家に保障を與ふること。
- 之に對して米國の戰略家は

- (一) 速に全艦隊(太平、大西洋艦隊、及一部の亞細亞艦隊)を布哇に集中し、又日本の沿岸砲撃、空中よりの爆彈投下を行ひ、日本の海外交通線を妨害するの目的を以て潜水艦、假裝巡洋艦、航空機等を放ち、日本の南西交通線上に作戦せしむること。

- (二) 日本艦隊を撃滅するか、又は封鎖により日本をして飢饉が降伏かの何れかを選ばしめ、已むを得ず米國の前に屈せしむるの目的を以て、布哇に集中せる米國艦隊は先づ南洋群島に假根據地を速成し、日本艦隊を索つて之を敗り、次で比島とグロムを奪回し、爾後の封鎖作戦の根據地とすること。

以上は本書の畫ける開戦直前の形勢を基礎として採り得べき日米兩國の外交政策並に作戦の大方針を示したものである。然るに茲に就中此の作戦の大方針に至大の影響を及ぼし、延ては遂に戰爭の勝敗に影響する重大なる一事がある。これ即ち開戦の時機を適良に撰定することである。抑も彼の相模道を見るに其立上りの如何が勝敗に至大の影響あるが如く、戰爭に於ても亦所謂其立上りなる開戦時機の如何は最も重大なる影響を及



ほすものである。而して此開戦時機は、之を米國より云へば、其全艦隊が比律賓とグワムに入りたる後に於てするを最も有利とし、其艦隊の一部は太平洋方面に、他は大西洋方面に在るが如き平時の状態に於てするを最も不利とする。蓋し米國艦隊若し比島とグワムに無事入港するを得ば、日本に對する作戦を甚だ容易ならしめて、日本は之が爲に至大の苦痛を感すべく、又若し米國艦隊にして太平大西兩洋に分在せば、巴奈馬運河は稍ももすば日本の爲に閉塞されて、兩艦隊の合同を困難ならしめ、合すれば日本艦隊に比し優勢なる米國艦隊も、合せざれば日本艦隊と同等若くは以下となりて甚だ不利の位置に立つからである。次に之を日本側より見るに、開戦の時機は米國艦隊が前記の如く太平大西兩洋に分在する時を最も有利とし、比島やグワムに入港せる後に於てするを最も不利とする。されば之を日本側より云へば、開戦の時機は早ければ早き程有利にして、如何なる時に於ても布哇に集中せる米艦隊が西太平洋方面へ向ひ進發の報以前に之を斷行せ

ねばならぬ。

茲に至て余が讀者の注意を喚起せんとするは、國際聯盟乃至は華府條約による太平洋に關する四國條約である。今先づ國際聯盟に就て云はん、日本は聯盟の加入國にして米國は非加入國であるから、例へば支那問題に關して日米間に國交斷絶の虞ある紛争を生ずる時は、聯盟規約第十七條に基き、聯盟理事會は正當と認むる條件を以て、非聯盟國に對し聯盟國の負ふべき義務を受諾せんことを勸誘し、之を仲裁々判又は聯盟理事會の審査に付せんことを提議するに違ひない。然も此場合英國は米國に味方するものと思はるゝを以て、早ければ早き程日本に有利なる開戦時機は之が爲に遅延せざるを得ない。茲に日本の不利がある。

次に四國條約を見るに、此隱微たる四國條約は日英同盟を葬るを主眼として出來上つたもので、締約國は互に太平洋方面に於ける其島嶼たる屬地及島嶼たる領地に關する其權利を尊重すべきこと、「締約國の何れかの間



に太平洋問題に起因し、且前記の權利に關する爭議を生じ、外交手段に依りて満足なる解決を得ること能はず、且其間に幸に現存する圓滿なる協調に影響を及ぼすの虞ある場合に於ては、右締約國は共同會議の爲め、他の締約國を招請し、當該事件全部を考量調整の目的を以て其議に付すべし」と約定されて居る。元來本條約は支那問題には關係なきも、日米の風雲急となれる場合、假りに米國は之を楯として比島やグワムが日本に占領せられざること、並に日本が委任統治の南洋群島に對して軍事的施設を施すを防がんとして共同會商を求めたとせば如何。日本は之を一蹴するを得んも、米國の背後に英國あるを知る時、果して之れを一蹴し得るの勇氣と達見ありや。此共同會商の期間を利用して米國の艦隊は太平洋に集中され、進んでは自國領土を訪問するとの正當なる主張の下に比島やグワムに進發するとせば如何。茲に日本に有利なる開戦時機の撰定は勢ひ遅延せられて、愈々益々米國側に有利とならざるを得ない。吾人は華府に於ける我全權等

が本條約を締結するに當り、果して斯かる點迄考へ及びしや否やを知らざるも、此條約は日英同盟を葬り去らんが爲めの膿腫たる條約たると同時に、日本にとりては斯る重大なる不利を含むものなるを思ふて、切に識者の三考を煩はし、若し第二華府會議開かるゝに於ては、須らく之を是正せんことを勸むるものである。

再び本文に轉ぜんに、形勢斯の如くなるを以て、バ氏の畫ける米國大西洋艦隊の太平洋集中、並びに米國海軍用運送船二隻の比島への航海が、日本の抗議する所となれりとの記事は如何にも最もで、米國の斯種の措置は日本をして已むを得ず戰意を決せしむるものである。これ恰も日露戰爭の直前、ヰキレニユース少將の率ふる露國戰艦三隻、驅逐艦七隻、水雷艇三隻、其他義勇艦隊汽船三隻より成る枝隊が、旅順艦隊を増援せんとして極東廻航の途に上るや、日本政府は其到着に先ち個々に撃破するか、又は之を本國に歸還せしめんとして急速開戦に決したと同様で、米人たるもの須らく茲に艦



みて其行動を慎まねばならぬ。(拙著日米戦争日本は負けない参照)  
然らば貧弱なる米國の亞細亞艦隊を如何にすべきか？　バ氏は此艦隊を以て依然比島を防禦させて居る。これ果して適切なるか？

華府條約により比律賓が防備の現状維持を約定された結果、開戦初頭該島が容易に日本の手中に歸し得るを豫想し得べき現状に於て、比島の防禦を如何にすべきやは米國にとりて緊切なるも然も最も困難なる問題である。或は曰く、米國は須らく有力なる艦隊を同方面に常備して日本の攻撃に備ふべしと、然も同島に於ける施設の現状が、一戰略單位の艦隊をも安全に碇泊せしめ、且其戰鬥力を保持するに足らざる以上、斯種の意見は畢竟するに實行不可能である。茲に於てか米國內に於ては主として奇襲艦艇(驅逐艦、潜水艦)と空軍及機雷により之を防禦すべしとの説が有力となつた。例へばフィスタ海軍少將は曰く、『敵の侵襲に對し比島を防衛するには、機雷及潜水艦に依て支授せらるゝ優勢なる空軍を備ふれば足る、要塞の

如きは其要を見ず、防禦用の戰艦戰隊も亦全く無用なり』と。これ素より至當にして既に比島の防禦が日本艦隊を撃破し得る如き優勢なる艦隊の力に依てのみ之を爲し得るに於ては、日本の比島占領を妨害遅延せしむる策としてはこれ以外に求むるを得ない。只だ提督は要塞の不要を説き、且驅逐艦の必要を説かざるも、斯の如きは其當を得たものでない。然るにバ氏の想定した亞細亞艦隊への訓令は、巡洋艦以下の諸艦種、同島の主要なる海軍根據地への集中を命じて居る。これ即ち帯には短く線にはながく、其兵力何れともつかざる結果は、容易に日本軍に撃破され易き恐れがある。寧ろ前記の如く同島の防禦を奇襲艦艇や空軍及機雷に委ね、他は速に布哇の主力に向ひ合同せしむるを可とする。只だ之をバ氏が米國民への親切なる警告と見れば、斯る明瞭なる戰略上の過誤を敢てせしめたバ氏の筆も其意義を有することゝならふ。

バ氏は更に進んで巴奈馬運河が開戦直前の重要なる時機に於て遂に一



時的に閉塞されたことを報じて居る。此巴奈馬運河の閉塞は米國の大西洋艦隊をして適時に太平洋方面への集中を遅延せしめて其作戰計畫を覆へすのみならず、太平洋方面に必要な物資の輸送をも遅延せしめて米國艦隊の作戰に至大の苦痛を與ふるものである。唯だ茲に問題となるのは、本書の示した如く竊に一汽船を爆沈することが果して可能なりや否やにあるが、それは兎も角として、米國陸海軍當局は運河に對し飛行機を以てする敵の爆彈投下の恐れあるに鑑み、運河の防備が適切なるや否やを檢ぜんとして、大正十二年二月より同三月に亘り大規模の海陸大演習を行つたが、結局(一)運河の重要な一部は敵の爆彈攻撃に依り破壊さるゝの憂ひあると、(二)防禦砲配備の不適當、(三)防禦用航空機の不足、(四)陸海軍通信連絡の不完全等、現在の弱點を指摘し、且運河を攻撃せんとする敵に飛行根據地を組成せざらしむる爲め、適當なる條約に依て、米國航空隊の爲に運河附近に根據地を收得せんことを建議することゝなつた。然も米國民は由來軍

費の支出を吝み、議會は容易に之に協賛を與へないので、米國の軍事當局は苟も機會ある毎に國民に其必要を説法しつゝある。想ふに、バ氏の筆は米國民に巴奈馬運河の閉塞が如何なる影響を與ふるかを痛切に感ぜしむべく、米國の爲には至れり盡せりと評すべきであらふ。

バ氏が華府條約中潜水艦の使用制限に關する條文中の矛盾せる句を指摘して、將來の海戰にS一號對日光丸事件の如き、兩交戰國が互に相反せる解釋を下し、依て以て該條約を水泡に歸せしむるが如き行動に出づること、は如何にも有り得べき事と思ふ。華府會議中或委員は之を指摘して、米國委員の注意を促したが、米國政府の意見は、本條約の第一條は一般的原则を示したもので、潜水艦の通商破壊は第四條に禁止を明示してあるから、差支へなしと云ひ、結局潜水艦は之を通商破壊用に使用することを全然禁じたことになつて居る。然しながら由來條約文面上の曖昧な文句が兩交戰國の何れかに濫用され易きは屢々起る所で、これ實に本條約の缺點であつたのだ。



元來潜水艦の通商破壊禁止は之を一般的に見て正當でない。蓋し潜水艦は商船に對し、國際法上の臨檢搜索を爲すことが出來ないから、之を通商破壊用に用ひんとすれば、勢ひ獨逸の採れるが如き不法行爲を爲すの外は、無ひとの禁止理由の前提が間違つて居るからである。潜水艦は今や連りに其噸數を増大し、世界大戰中の巡洋艦の大きさにも近遜せんとしつゝある。斯る現狀に於て潜水艦が商船の臨檢搜索を爲すを得ずとの斷定は明かに正當なるものでない。實に華府條約が斯る不當な條文を無理にも列國に承認せしめたのは、英國の利己的外交が勝を制したもので、英國にとりては潜水艦を全廢するを最良策とし、此全廢にして列國の承認する所とならざれば、其使用を制限して通商破壊用に使用せざらしむるを次の良策とするからである。幸にして本條約は佛國の批准せざる爲め一片の白紙と化し去つて居る。尙本條約中の商船の定義も明諒でないから、此等は將來に於て更に是正を要すべきものである。(此等の點に關する詳細に就ては拙著

「是れでも世界平和乎」参照

### 三

轉じて比島方面の戰況は如何、日本の勝利を報する第一報は先づ同方面より起つて來た然らば、バ氏の書く所如何？

バ氏の畫びた日米戰爭は、ルーバン島沖海戰の前迄は順當に經過し、人をして首肯せしむるに足るも、此のルーバン島沖海戰より以後は支離滅絕其軍事上の智識の如何を疑はしむるものがある。一言にして云へば、本章叙述する所のリブレ艦隊の全滅の如きも、提督をして猪進せしめ、無理にも之を全滅せしめたものである。

リブレ提督が其艦隊を徒らに馬尼刺灣内に殘留せしむることなく、灣外に出でて沿岸附近を巡航し、日本の運送船隊を撃沈せんと決心せるは、當時の狀況に於て、寔に適切なる作戰計畫なるも、之を實施せんが爲には先づ



次の諸件を考慮することが肝要である。曰く(一)速に敵軍の近接を知らんが爲め空軍の配備を如何にすべきか(二)敵を要撃せんが爲めに潜水艦は如何に之を配備すべきか(三)驅逐艦の最良なる使用法如何(四)巡洋戦隊は奇襲艦艇の作戦を掩護せんが爲めに如何なる行動を採るべきか(五)敵軍特に其運送船隊の上陸運動を妨害せんが爲めに機雷の敷設を如何にすべきか(六)敵軍の上陸に對し陸海軍の協同防禦戦は如何にすべきや等である。右の内空軍の使用法のみは稍々其當を得たるも未だ以て充分でない。特に不可解なるは、其潜水艦の半部を呂宋島の南西岸沖を巡航せしめ、斯くして同島東岸の海面を敵手に委した一事である。實に此六隻は寧ろ之を同島の東岸に配すべきものであつた。次に其驅逐艦の中、機雷敷設用のものには、敵上陸の恐れある地點に速に機雷を敷設せしむべく、其他の驅逐艦は夜襲を試みしむるの決心を以て之を提督の麾下に握り置き、機を見て之を派遣すべきも、バ氏の筆は一も此點に及んで居ない。

更に奇怪なるは巡洋戦隊の行動である。リブレ提督にして眞に敵の運送船隊を撃破せんとならば先づ其快速装甲巡洋艦の一を選び、之に數隻の驅逐艦を付して敵軍の偵察に努め、敵を誘致して我潜水艦の潜伏地帯、又は我が機雷敷設面に誘ふべく、提督自身は旗艦と三隻の巡洋艦、並に必要な驅逐艦を率ひ、馬尼刺灣より遠く離れざる地點に在て各隊を指揮統率し、戦況の如何により爾後の行動を定むべきものである。然るにバ氏は提督をして何等此種の措置を講ぜしむることなく、徒に盲進して日本巡洋戦艦の砲火に暴露せしめて居る。其の何等得る所なくして全滅するは當然の歸結で、苟も兵を知れる者の首肯し得る所で無ひ。然り春秋の筆法を以てすれば、リブレ艦隊を全滅せしめたものは提督自身にあらずして寧ろバ氏の不合理なる筆である。



戦局は次第に進展して比島は遂に日本の手に入った。これ素より當然の歸結で、米國にして同島を金城鐵壁の堅壘となし、この固定防禦に加ふるに日本艦隊に優に比敵するに足る遊動防禦、即ち艦隊を常備するに非んば之を守るを得ない。斯るは少しく兵を知れる者の容易に了解し得る所なるにも拘らず、米國民は何故か之に耳を傾けなかつた。思ふにバ氏の筆はこの無智なる米國民を説破するに大なる力あるべく、反對に日本の爲には非常なる害毒たるは云ふ迄もない。幸にも霧の華府會議に於ける我全權等は深く茲に顧みる所あり、遂に日本の主唱下に比島やグワムの防備の現狀維持を協定せしむることに成功した。これ實に同會議に於て日本の受けた有ゆる屈辱中、唯一の成功的獲物で、米國の識者等は日本に斯る成功を許した結果、米國は東洋進攻の力を喪ひ、門戶開放機會均等も遂に一の空言と化したと叫びつゝある。

主力艦の比率が限定せられ、太平洋の防備が現狀維持を協定された結果、

米國は開戦の初頭に比島やグワムを襲ひ、其太平洋作戦を困難ならしむること非常であるが、茲に、此不利を償ふて米國をして有利の對日作戦を爲さしむるもの唯だ一つある、これ即ち英國と聯合し、英米の力を以て南北より日本を挾撃するか、又は英國の好意的中立の下に英國の海軍根據地や屬地を利用することである。

華府會議中太平洋に關する四國條約の締結せらるゝや、炯眼なる識者は此の朦朧たる條約中には英米間に一の默契存せざるやを疑つたが、果然千九百二十二年二月十七日に至り、米人クラバス氏は紐育で開かれた外交關係調査會の席上に於て、左の如く日本に對し英米提携の密約あることを言明した、曰く。

余の見る所に依れば、四國條約は、英米の聯合艦隊が太平洋に於て日本を抑へると云ふことを別言したものである、蓋し英米共同すれば我米國は世界第一の海軍を建設して莫大なる費用と犠牲とを惹起する必要もなく、太平洋に於ける英米の聯合艦隊は優に日本を抑へて其義務を



守らしむるを得るからである。

余が總ての米國全權より聞き、且英國全權バルフォア氏の意見を確めた所に依れば——英國全權の總ても素より同様と信ずる——四國條約は、何等かの手段に依て公式の協約を結んだものでなくて、單に了解を求めた迄のものである。然も此了解の裏面には、英米間に將來非常の場合起らば、常に最も密接な協同動作を取ると云ふ約束が作られたのだ。

之に對してヒューズ、ロツヂ、アンダーウッド諸氏は直に之を否認したが、クラバス氏は後之を訂正して『余の右の意見は信すべき筋よりの情報に依るものである、余は實際英米間に斯る了解があつたことを事實と信じて居る』と繰り返して述べて居る。

吾人は右の英米密約説が無根の事實ならんことを望むも、米國の對日作戦が甚だ困難なること、新嘉坡軍港問題が忽ちにして現はれて來たこと、米國の太平洋に於ける大規模の演習が遂に濠洲に迄及んだこと、並に米濠の關係が華府會議後忽ちにして親善の度を増したること等を想像する時は右

の密約説も必ずしも齊東野人の言にあらざらんことを恐るゝものである。米濠の關係は世界大戰後より漸次に接近の度を加へ、華府會議に於て日英同盟の葬り去らるゝに及んで頓に其親善關係を促進し米國大艦隊の布哇附近に於ける演習後濠洲を訪問するに至て殆んど其絶頂に達した。試みに此艦隊の訪濠前後に於ける英米言論界の二三の所説を左に紹介しよう。有名なる米國の論客フランク・シモンズ氏は大正十四年二月十九日華盛頓スター紙上に日英米の關係を論じ、日米戦争は當分の間は起るの憂ひないとするも、日米兩國が支那問題を挾んで頑強に相争ふに於ては、結局戦争に訴へるの外なかるべしと論じ、更に筆を進めて云ふ、

日米間に戦争若し起るとしたならば、英國人は其海外屬領たる加察陀や濠洲は素より、南阿さへも英本國を壓迫して米國に與みして起たしむるに至るべく、又若し日英相戦ふとせば、太平洋岸の米人は恰も響の世界大戰中大西洋岸の人民の壓迫により、米國が遂に参戦したのと同様に、英國に與みして戦争の渦中に投ずることを確信して居る。今や英國内の輿論は、奇妙な



るも然も明白に、歐洲問題に關して英米相提携すべしとの篤の信念を放棄し、少くも共同の敵たる日本に對せんが爲め、兩國の提携は已むを得ずと考ふる様になつた。余は思ふ、斯る提携の避く可わざることは通言に非ずと。

更に有名なる英國の海軍論客サー・ハーバート・ラッセルは同年七月二十九日號の英國『海陸軍雜誌』に、濠洲が日本海軍の發展の爲め著しく不安の狀態にあるを述べ、日米戰爭の場合を豫想して曰く、

英國は日米戰爭の破裂を避けんが爲め有ゆる努力を爲すであらふ、されど同國が果して何事かを爲し得るかを豫想することは寧ろ困難である。日本は其必要とする要求を遂げんとして頑として動かざるべく、米國の専横なる又調停を容れないであらふ。此際濠洲は全く米國に與ひずるに違ひないが、之が英國の關する限りに於て非常に局面を複雑ならしむるものである。

斯くて日本を目標とする米濠提携運動は、濠洲前首相ヒューズ氏が米國議會に於ける移民法案討議中渡米活動せるを始めとして漸次に濃厚の度を加へ、新嘉坡防備問題、布哇大演習及米艦隊の濠洲巡航問題に關する米國

一部の言論界及豫備將官連の無遠慮なる米濠共同作戰の暗示となり、近くは下院議員ブリテン氏の太平洋岸白人國會議の提案となり、更に進んでは濠洲は其國情及産業の狀況等を米國に紹介し、兩國の産業的、經濟的關係を密接ならしめ其親善提携を圖らんが爲め特使としてエルダー氏を米國に派遣し、氏は演説に文書に、無電放送に、頻りに白人濠洲主義を主唱し、亞細亞移民の排斥と米濠の提携とを宣傳しつゝあるに至つて、兩者の提携は更に一步を進めんとしつゝある。

人或は云はん、英本國に於ける英米提携論は比較的冷靜なりと。然も米濠の關係斯の如くなるに於て、日米戰爭の場合、濠洲若し米國に與みして起たば、英國は果して晏如たるを得るか。千九百二十三年七月八日に開かれた米國の政治協會(Institute of Politics)は舊の米國亞細亞艦隊司令長官にして將官會議々員たるストラウス提督列席の上、「米國は同盟國の援助を得るに非んば日本を屈服せしむるを得ず」との宣言をなして居る。然り日



米戦争は獨り日米兩國のみの戦にあらずして、日本對英米の戦争なるを想ふ時、吾人は太平洋の形勢の變化に我國民が目覺めんことを絶叫せざるを得ない。

若しそれ比島占領戦に於けるバ氏の畫ひた飛行機や潜水艦の威力は餘りに過大で、此點は本書の全部を通して皆然りである。併しながら新武器の出現は將來の陸軍輸送に大なる影響を及ぼすは明かであるから、之に對して飛行機や驅逐艦の數を増すことは日本にとり最も緊要である。

五

バ氏は開戦初頭に於ける日本の海陸軍力並に其戰略的對勢を概観して居るが、茲にも亦氏の筆は故らに日本を中傷し、以て無智なる米國民を煽動せんとして居る。此毒筆の第一は日本の補助艦建造計畫の過大なるを非難して、華府會議の精神を破るものは日本其の魁たりて、ふ氏一流の從來の

排日的筆鋒を繰返したことである。然も事實は如何、大正十四年十月始めに於て、日本の巡洋艦、驅逐艦の勢力は、米國に比し僅に三割五分、潜水艦に於て同四割四分で、我が補助艦の既定計畫を進めて行くとしても、大正十七年末に於ける比率は、前者に於て僅に五割二分、後者に於て七割六分となるに過ぎざるは左表の示す通りである。

日英米補助艦勢力表(艦齡) 巡洋艦十六年末滿  
驅逐艦、潜水艦十二年末滿  
(第一) 巡洋艦及驅逐艦

國別	現在		大正十七年末	
	隻數	噸數	隻數	噸數
米	二八八	四七〇、五六一	二三四	五五〇、五六一
英	四〇九	四七六、六九五	二〇六	六一八、五四四
日	七七八	一六六、三七三	一〇〇九	二四八、六三八
		比率		比率
米	二八八	一・〇〇	二三四	一・〇〇
英	四〇九	一・一〇	二〇六	一・一二
日	七七八	〇・三五	一〇〇九	〇・五二